



校友會雜誌

第二號

明治三十五年一月發行

山口縣萩中學校之友會

[Faint, illegible text on the reverse side of the page, possibly bleed-through or ghosting from the other side of the paper.]

校友會雜誌第貳號目次

●論 說

英杜戰爭

會 長 雨谷羔太郎

文體論(第一)

特別會員 安藤 紀一

家庭改良論(懸賞當撰)

第四學年 紀藤 庄助

學生の墮落云云に就て

第四學年 福田 信彦

●學 術

高岳親王

特別會員 郡司 厚

コンスタンタイン大帝を論ず

第五學年 湯原 綱

●雜 纂

第一回卒業式に於ける野田視學官の演說

山口中將の演說

前田豊作君の南洋視察談

能勢教諭見嶋視察談

ガスタフソン先生の日本に於ける所感

寸鐵瑣言

希望

己か目的

汽車旅行

特別會員 頼野 多介

第五學年 湯原 綱

第三學年 山縣 恭輔

特別會員 宮澤精一郎

●詞 藻

記郊遊(戲擬漢文)

特別會員 安藤 紀一

公園に遊ぶ記

第三學年 池田 克彰

夏日漫筆

第五學年 山本 松四

十六夜日記をよむ

第五學年 三宅彌太彦

羅馬史を讀みて感あり

第五學年 佐伯 益豊

神皇正統記を讀みて感せし條々

第四學年 林 壽香

讀書の心得

第三學年 百井 盛二

最嗜好する遊戯

第二學年 大賀 幾太

最嗜好する遊戯

第二學年 大谷 清記

大和魂

第一學年 堀 俊雄

建武中興の失敗に歸せし所以を論ず

我が國の海軍

端艇競漕を観る記

亡友を追想す

正直

修學の目的(懸賞當撰)

我政郷(全上)

全上(全上)

蒸氣船(全上)

如何にして父母に事ふべきか

第五學年 小澤 泰二

第一學年 白井 洸

第一學年 大草 靜真

第二學年 竹内 宗輔

故第二學年 矢田 茂介

第二學年 大賀 幾太

第二學年 工藤 康生

第二學年 増野 純亮

第一學年 師井 幸彦

第一學年 福場 温

特別會員 宮澤精一郎

全上 藤井 百輔

全上 安藤 紀一

全上 郡司 厚

全上 竹内菊五郎

● 雜 報

○舊師を送り新師を迎ふ○第一回卒業式○我
校 撰手の名譽○補習科の消滅○赤十字社山口支部
總會○陸上運動會○伊東海軍大將の來校○竹内
先生の叙勳○第一回端艇競漕○山口師團長の來
校○同窓學友の死去○同窓學友の病氣と見舞○
第二回端艇競漕會○寄宿舎工事と假寄宿舎○假
寄宿舎茶話會○文藝部懸賞文○各組の茶話會及
遠足會○柔道擊劍部の現況、附たり同部有志者
の壯舉○英語談話會員諸君に望む○父兄保證人
談話會○文藝部委員の辭職及び補缺撰學

● 附 錄

○山口縣立中學校現任職員表○生徒郷貫別表○
生徒入學前の成業別表○生徒年齢表○生徒假
定目的分類統計表○通學生徒宿處別統計表○本校
特待生表○陸海軍其他諸學校へ入學せし卒業生
の表○武學貸費生表

校友會雜誌第二號

論說

英杜戰爭

會長 雨谷 羔 太郎

一、緒論。

(一)亞弗利加。

亞弗利加は尤早く世界の文化に貢獻せし國なり。即ち埃及は、今を去ること五千年前に於て、既に開化の域に進み、政治に、宗教に、工藝に、學術に、燦然として見るべきもの尠からず。殊に、現今吾人の使用せる太陽曆は、實に彼等の發明する處にかゝる。かく亞弗利加の一部は、早く開明に赴きしも、其他の地方は、所謂暗黒大陸にして、毫も探索の行届かざる所なりき。太古「フェニシア」人が大陸を廻航せし説も傳はり、羅馬の皇帝「ネロ」が「ナイル」阿流域を探險せし譚もあれど、是等は、僅かに、其痕跡を印したるに過ぎず。十六世紀の頃、葡萄牙王大に航海を奨励し、印度歐羅巴間に、直接の交通を開かんことを企て、「ディアス」は、喜望峯を發見し、「ヴスコー、ダ、ガマ」は

印度に達する航路を發見し、かく續々亞弗利加の海岸に觸れしものあるも、其目的たるや、印度にありて、亞弗利加にあらざりしなり。此大陸の秩序的研究は、十八世紀の終より着手せられ、現今に至りて、大陸の暗黒なる部分は、漸く明かなるに至れるも、探究の至らざる所未だ尠しとせず。英國にては、一七八八年^{アフリカン、アフリカン}亞弗利加協會設立せられ、其後英國^{ロイヤル、ジオグラフィカル、ソサイチ}地理學協會起りて、亞弗利加の研究に着目し、年々歳々、學識ある冒險者を派遣せり。此等探險者の事歴は、今一々枚舉せざれども、其中尤錚々たる一二の人を擧ぐれば、「リビングストン」氏は、一八四九年より一八七三年迄、亞弗利加の研究に従事し、一は未だ知られざる地方を探險し、一は耶蘇教の布教に盡瘁し、「ナイル」河源の大湖水を發見し、「セチガル」、「コンゴ」西河の流域を探り、遂に之が爲めに一命を犠牲に供するに至れり。其後「スタンレー」氏が、南弗探險を企て、コンゴ河源を跋涉し、大陸を横斷せしは、吾人の記憶に新なる所なり。此の如く是等探險者の力により、此暗黒大陸は、漸次光明を放つに至りたるものにして、吾人は地圖を披見すること、此等偉人の効績を回想せざるを得ざるなり。

回顧すれば、印度帝國が英國の支配に歸せしは、無賴漢と呼ば做されたる、「クライヴ」、「ヘスチングス」の如き人々の力にてありしなり。今の北米合衆國が、嘗て英國の領土となりしは、宗教の自由を樂まんが爲め、大西洋を横切りて、移住したる「ピュリタン」信徒の力にてありしなり。英國が太平洋に、主權を得たるは、「クック」等の如き航海者の力にてありしなり。亞弗利加も又此例にもれず。或は私立團體の盡力により、或は一個人の奮發により、其勢力を樹立するに至りしなり。之に由て是を觀れば、英國の膨脹は、政府の計畫盡力にあらず、大膽にして剛毅なる國民の力にあることを知るべし。

佛國大革命の戦亂、既に其局を收め、歐洲の平和回復せられてより、亞弗利加に着目せしものは、獨り英國に止らず。白耳義は、「コンゴ」國の設立を計畫し、佛蘭西は、アルゼリアを占領し、「セチガル」、「ガブーン」河畔の殖民地を建立し、「チャット」湖、「ナイル」河流域に其手を伸ばし、新興の獨逸帝國は、南部及東部亞弗利加を略有し、以太利は紅海沿岸に其領地を開拓す。土耳其、葡萄牙、西班牙は、歴史的理由によりて、領地を有するも、國勢日に衰退して、殖民的政略に盡力するの餘裕を有せず。埃及は一八八一年の内亂以來、財政の紊亂を極め、「スキス」運河權利の大部を英國に讓與し、財政上の監督を委任して、實際上英國の保護國となり、かくて、亞弗利加の大部は、歐洲強國の侵略占有する所となり、百年前に於ける廣漠無人の暗黒大陸は、今や白人活動の大舞臺となるに至れり。一八九〇年—一八九一年の協議によりて、英、佛、獨、伊、葡、の勢力範圍の大体は決定せられ、更に一八九八年の「ナイジャー」協定、及一八九九年の宣言により、英佛間の境界は決定せられたり。

歐洲列國の領地、并に保護國、

佛領

三、六四〇、〇〇〇方哩

論 說

校友會雜誌

第貳號

三

英領	一一、〇一〇、〇〇〇
埃及	一、一〇〇、〇〇〇
コンゴ國	九〇五、〇〇〇
獨逸領	八九八、〇〇〇
葡萄牙領	七九四、〇〇〇
トリポリ(土耳其領)	三四〇、〇〇〇
以太利領	二二〇、〇〇〇
プール共和國	一七七、〇〇〇
西班牙領	一五四、〇〇〇
歐洲勢力以外の獨立國、	
アビシニア	三二〇、〇〇〇
モロッコ	一八〇、〇〇〇
リベリア	五二、〇〇〇
所屬未定の地方	六五〇、〇〇〇
湖水	七〇、〇〇〇
總計	一一、五二〇、〇〇〇

(二)トランスバール、及オレンジ自由國。

南亞弗利加に二共和國あり。一をトランスバールと云ひ一をオレンジ自由國と云ふ此兩國、西は「オレンジ」河によりて、英領に界し、南東又英領に包まれ北は葡領及獨領に接す。此人民は、和蘭人の子孫にして、元喜望峰地方に居住せしが、此地英國の有となるや、彼等は其羈絆を受くることを肯せず、一八三六年相率ゐて、喜望峰の地を去り、北東「ナタル」地方に轉す。而して此地も英國に歸せしを以て、更に西方に轉じ、土人を擊破して、此に住居を定む。かくて、一八五二年英國は其獨立を承認し、唯外政の權は、英國之を掌握しぬ。其後杜人は英國政府の壓制を怒り、兵を擧げて英國に抗せしが、英國は之を鎮定するの國難なるを感じ、一八八一年三月二十一日媾和條約を結び内政の自治を許し、外交のみ英國之を監督することとし、駐在官を其國都に派遣す。一八八四年二月二十八日再び條約を改定し、「トランスバール」を改めて南弗共和國と改稱し、外政監督も大に制限を加へ、駐在官の代りに、單に外交官を派遣すること、なれり。

杜國の建國は、誠に短時期なり。然れども、其獨立を全ふせむが爲めに、絶えず困難に遭遇せる悲惨の歴史を有す。然して、其困難に陥りしは、常に保守黨内閣の時にして、其獨立を樂むを得しは、常に自由黨内閣の時であり。彼「ゴルドン」將軍が、一八八五年「カルツーム」に於て、名譽の戰死を遂げしより、自由黨は大に國民の輿望を失ひ、踵て内治政策は、國民の自負心を満足せしむること能はず、一八九五年「サリスベレー」僕を戴ける保守黨と、「チムバレーン」を仰ける自由統

一派との聯立内閣は組織せられ、其標榜する所は、帝國主義の政略にあり、一八九五年の冬「ジェームソン」博士が、一隊の兵士を卒ゐて、「ヨハチスブルグ」に侵入し、「ブル」人の政權を覆さむと謀りしも、杜兵の爲めに撃破せられ、「シエムソン」自は其生擒する處となり、其擧は一敗地に塗れしと雖も、是事は、偶以て英國人心を刺戟するの材料となり、英國政府をして益帝國政略を強行するの必要を認めしむるの結果を生したるに過ぎず。嗚呼杜國の前途は、岌々乎として、其危しと云ふべきなり。

杜國は、共和政府体にて、行政の長官を大統領となす。當時の大統領は、七十五歳の老翁「クルーゲル」其人にして、一八八四年より相踵て其職に任し、憂國の精神と、國民の輿望とは、氏をして閑地に其老を養ふを許さず。副統領は大統領を補佐す。當時「ジューベルト」氏其職に當り、軍事總督を兼ね。佛國「ユークノー」信徒たる名族の後裔にして、性質勇悍、尤も戰爭の經驗に富む。立法院は、上下兩院より成り、其議員たるべきものは、年齢三十歳以上にして、不動産を有し、新教を奉し、刑罰に觸れざることを要す。上院議員は、一級市民より選舉す。一級市民權を有するものは、「トランスバール」獨立に戰功あるもの等にして、歳齡十六歳以上の男子とす。二級市民權を有するものは年齢十六歳以上の男子、及歸化人（二ヶ年間杜國に居住したるものは歸化することを得）とし、或ひは二磅を納め、政府の承諾を経たるものとす。歸化人にして、十二年間杜國に居住し、下院の決議を経て、一級市民となることを得。大統領及軍事總督を選舉するは、上院の特權たり。

り。

面積は一一九、一三九方哩。人口八六七、八九八人。中白人二四五、三九七人。首府を「プレトリア」と云ひ。人口一万を有す。然るに、杜國中尤盛大の都府は、「ヨハチスブルグ」にして、人口一〇二〇七八人、實に杜國礦業の中心にして、又政治上重要な關係を有す。

「オレンジ」自由國は、其南隣に横はり、人種、言語、歴史、政体を同ふする唇齒の共和國なり。面積四八、三二六方哩。人口二〇七、五〇三人、中白人種七七、七一八人。其首府を「ブレイムホントアイ」と云ひ、人口三、四五九人を有す。當時の大統領を「スタイン」氏となす。

二、戰爭の原因。

「ヨハチスブルグ」に於ける英人は、頗る多數なり、是等の英人は、多くの財産を有し、多くの租税を負擔す。而も政權は少數なるブル人の手にありとは、實に兩國争議の濫觸なり。「ヨハチスブルグ」の英人は、屢々本國政府の保護を求め、其嘆訴する所にすれば、曰はく、外國人放逐法を施行したり。曰はく、新聞に嚴重なる檢束を加へたり。或は警吏の爲めに家屋を搜索せられ、或は集會を解散せらる。杜國政府の壓制は、實に枚擧に遑あらず。是等は、自由を尊重する英國人の堪ふる所にあらずと。殖民卿「チェンバレーン」は、公言して曰はく、かゝる壓制の下に苦める英國人は、之を黙視することを得ず。英國政府は、如何にもして是が救済の道を求むるの權利あり。是權は條約によりて、確實なるのみならず、かくて、英國臣民の不平永く引續かば、遂に南亞弗利加に於け

る全体の争亂を醸すに至らむと。亦以て、英國政府の意向如何を知るべきなり。然れども、吾人を
して事實を語らしめよ。英國人は、本國政府の威力を恃みて、或は違法の行爲をなし、或は無理な
る要求をなすこと一再にして止らず。況彼「ジエムソン」侵入事件の如きも、「セシル、ローヅ」、「チ
ュムバーレーン」の教唆に出てたりとの風説さへあることなれば、杜國が嚴重なる警戒をなせるも
亦至當の處置なりと云はざる可らざるなり。兎に角、英國政府は、遂に是を以て干涉の端を啓き、
一八九九年杜國に要求するに、一級市民権の所得は、之を五ヶ年に短縮せむことを以てせり。然る
に、杜國の憲法に由れば、外人にして一級市民権を得むには、十二年間居住することを要す。然れ
ども、「クルーゲル」元、争を好むものにあらず、之れを九年に短縮することを承諾しぬ。英國は頑
然として動かす。更に「クルーゲル」は、七年に短縮することを承諾しぬ。英國猶前議を固執して
動かす。夫れ杜國をして、人口夥多にして、外國人の數を増すも、政權の移動を憂へざるの國情な
らしめば則ち可ならんも、杜國の如き少數の市民を有する邦國にして、外國人が容易に參政權を掌
るに至らば、國權の漸く外人に移るべきは、明白の事實にして、杜國が英國案に同意する能はざる
の理由は實に茲に存す。英國豈又之を知らざるの理あらむや。

其後、幾多の會議も、幾多の交渉も、要するに無効なりき。英國の要求は愈出て、愈嚴、遂に、一
八九九年九月十六日、最後の通牒を發して曰はく、英國政府は、「トランスバール」にして、自ら以
て完全なる自由獨立の國となす要求を争ふ時は、斷して一切の提議につき考慮すること能はざるべ

し。曰はく、五年間在留したる外人に、參政權を興へ、金礦地の議員を増し、大統領及軍事總督の
選舉に同等の權利を有せしむべしと。杜國の主權は、今や明に非認せられたり。杜國が遂に最後の
決心をなすに至りしは、誠に是非もなき次第といふべき也。杜國は、一八九九年十月九日を以て戰
を宜しぬ。英國は、杜國の獨立を承諾せざるの故を以て、敢て戰の宣言をなさず、唯杜國に在留せ
る事務官の引上を命じ、各國に向て、英杜兩國戰爭の状態成立せることを報しぬ。かくて數年來結
で觸けざりし兩國の紛議は、鐵火の判決を求めざる可らざるに至りぬ。

昔「カーセージ」は、羅馬に對して苛重なる貢賦を收めたりき。羅馬聽かず。船艦兵器を獻したりき。
羅馬は猶聽かず。是羅馬の目的は、貢賦船艦にあらずして、「カーセージ」の全滅にあればなり。今や
「トランスバール」は、英國に對して、讓歩に讓歩を重ねたり。英國の固く執て聽かざるは、蓋し讓
歩以外に其目的を有すればなり。元來英國は、亞弗利加大陸を一貫せんとするの方針を有するもの
なり。南北一貫の政策は、獨り亞非利加に於て、勢力と領土とを獲得するに止らず、印度洋を越て
太平洋を有し、印度を有し、又東亞に於て至大なる利害を有す。然るに此等諸國との交通は、唯「ス
キス」運河に由るか、大西洋を迂回せざる可らず。一朝事あり、「スキス」運河の扼せらる、ここあ
らば、英國に取りては實に由々敷大事也。果して然らば、英國が汲々として、南北連絡の大事業に
全力を盡しつ、あるは、決して偶然にあらざるなり。即ち一方には、埃及を保護國となし、更に南
進して、土人を擊破し、道路を開通し、一方には、岬角殖民地より北進して、其領土を開拓し、鐵

道を敷設しつゝあり。英國の富力と、熱心とを以てす、其南北相聯絡するに至るべきは、決して遠き將來にあらざるべし。

而して是進路の障害となるは、一は獨逸なり。然れども、英獨協商は既に成立せり。第二は葡萄牙なり。然れども、其一部を買入るゝの契約は、既に成れり。第三は佛國なり。佛國は、「アルジャリア」及大西洋岸の地を有し、紅海沿岸狭小の地を有す。是が聯絡を計るは、實に佛國の政策たり。されば、英は南北を貫かんとし、佛は東西を聯ねんとす。兩國の衝突は遂に免る可らざるなり。一八九九年佛國の「マルシャン」大尉(現今清國在留の佛國軍參謀長)は、一隊の兵を率ゐて、亞弗利加遠征の横斷を企て、「カルツーム」の南、「ファシヨダ」に到着す。偶英將「キツチチル」も又遠征軍に將として、此地に達し、果然「ファシヨダ」は、兩國の衝突點となりぬ。其得失は實に兩國政策の消息に至大の關係を有す。されば兩國は其占領に就きて、交渉談判容易に其局を結ばず。英國は、遂に最後の手段に訴へても、其目的を貫かむとするの決心を示すに至り、佛國は、當時軍備未だ整はず、力爭し難きをや知りけん、遂に「マルシャン」少佐の遠征は、佛國政府の命する所にあらず、且「マルシャン」少佐は、兵疲れ、糧乏しく、到底「ファシヨダ」を占領するの力なしとの口實を以て、佛國は遂に其要求を撤回しぬ。されば、英國南進の道は、茲に開かれたりと云ふべし。

更に翻て、其北進の方向を考ふるに、ブル兩共和國をして、英國の主權に服従せしむれば、則可なるも、固く獨立自由の態度を取らむには、英國に取りては實に眼上の大瘤たる觀なき能はず。英

國が杜國に對する提議の精神は、温和なる人權問題の如何にあらずして、杜國は畢竟英國の主權を承認するか、或は干戈に訴へ、其獨立を主張するか、二者其一を撰まざる可らざるに至りしなり。

さて杜國は既に宣戰をなせり。凡ての利害關係を同ふせる「オレンジ」自由國が同時に英國に向て戰爭を宣言せしは、誠に至當の處斷と云ふべきなり。

三、戰爭の狀況

今戰況を述ふるに先ち、英杜兩國と諸外國との關係を一言すべし。既に述べし如く、亞弗利加問題に就きて、英獨協商、英葡契約は既に成立せり。露國は、亞弗利加に於て一の領土を有せざるが故に、強て此事件に關係し、其恨を買はむことは、決して好む所にあらざるべし。佛國も、又獨力を以て、之が妨害を肯てするものにあらず。而して杜國は、或は歐洲に、或は米國に、其助力と干渉とを得んことに盡力し、少くも、萬國平和會議に對して、希望を有したるも、一も實効ある援助を得る能はず。されば、杜國の孤立援なきに反して、英國は全力を以て之と戦ひ得るの狀況なりき。かくて、戰は初れり。「ブル」人は、英軍の侵入に先ち、「ジューベルト」「クロンジュ」等は、英領侵入の計畫をなし、英軍は、一軍は西方より、一軍は東方より、一軍は中央より、道を分ちて進撃す。杜軍は皆烏合の農兵にして、訓練なきも、射撃に長し、勇悍にして地理に通ず。されば、英軍は連戰連敗し、一步も敵國內に進入するを得ず、却て防守の姿勢に轉じ、東は「レヂースミス」に於て、北は「マヘキン」に於て、西は「キムバレー」に於て、杜軍の包撃する所となり、苦戰防禦、

偏に援軍の至るを待つ悲境に陥りたり。

是に於て、英國は五十年前、印度内亂を鎮定したる「ロバート」將軍を起して司令官となし、「ファシヨダ」の英雄、「キツチネル」を參謀長となし、十餘萬の兵を授けて、南弗に派遣しぬ。兩將南弗に着してより、英軍大に振ひ、二月十五日「フレンチ」は「レヂースミス」の圍を解き、「キムバレー」「マヘキン」の圍相踵て解け、「ロバート」は長驅して、オレンジ國の首府「ブレイムホルタイン」を陥れ、「ヨハネズブルグ」を取り、遂に六月四日杜國の首府「ブレトリア」を占領す。是時に當りて、彼杜將「ジューベルト」は「ブレトリア」に於て病死し、「クロンジュ」は英軍に降り、「クルーデル」は、和蘭の軍艦に塔して歐洲に逃れ、佛國を経て、和蘭に至る。今や和蘭に、佛國に、其聲授を求め、頻に本國の恢復に盡力しつ、あり。「ブール」人が疲弊殘餘の勢を以て、今猶頑固に抗拒しつ、あるは「クルーデル」在外應援の方、與て大なりとなす。杜國既に陥りしを以て、「ロバート」は、「キツチネル」を止めて、本國にかへる。國民争て感謝の意を表し、今年の議會には、將軍に十萬磅を送るとを議決せり。戦争も茲に一段落を告げぬ。

ブール國は既に英軍の陥る所となれり。然れども、「ブール」人民は未だ降服せざるなり。「ボーサ」「ヅ、ベット」「デラレー」の諸將は、新に軍隊を編成し、屢騎兵を以て、英軍を襲撃し、鐵道を破壊し、交通を妨害し、隠現出沒端倪すべからず。要するに、杜軍の戰略は、實を避けて虚を擣き、強に當らずして、弱を撃つに在り。然れども英將「キツチネル」は、剛毅にして戰畧に富むの人、着

々「ブール」人を攻め降しぬ。其詳況は、載せて五月八日政府に發せる將軍の書信中にあり。之によれば、「キツチネル」將軍は、「オレンジ」國を四區に分ち、諸將をして其一部を擔任せしむると同時に、其聯絡を計らしめ、「トランスバール」は、又「フレンチ」等をして敵を追窮せしめつ、あり。「ブール」人は、屢英領内に侵入し、掌制的運動を試むるも、英軍の注意周到にして、常に其功を奏する能はず。以前は外國よりも多少の助力を得たるもの、如し、然れども英軍の用心嚴にして孤軍援絶、糧食彈藥も亦欠乏せるを以て、今や正式の戦争は成立せず。「ブール」人は、土匪或は盜賊の状況に陥りたるものなり。尙英軍の分捕品中に發見せられたる、スタイン宛の書簡によれば、ブール人は、相踵て英軍に降り、彈藥糧食は、殆んど欠乏し、政府は最早其勢力を維持すること能はず。國民的觀念も、日に滅滅しつ、あり。唯杜國の豫期することは、歐洲に一大紛争起りて、杜國の獨立に好機會を與ふるにありと云ふにあり。クルーデルの佛國にあるや、本年七月「ボーサ」將軍の夫人は、本國の使命を啣みて、佛國に至り、「クルーデル」に告ぐるに、糧食既に竭き、人民亦降和を望むもの多し。最早戦争を繼續すること能はずとのことを以てせり。然れども「クルーデル」は、斷然として猶戦争を繼續すべきことを命令しぬ。

「キツチネル」將軍は、遂に「ブール」人にして九月十五日迄に降服せざれば、悉く其財産を沒收し、又將來「トランスバール」より放逐すべしとの宣言を發せり。此宣言は、必ずや「ブール」人に對して著大の効力を有するならむ。今や杜國外援の望既に絶え、兵食又給せず、恃む所は唯杜人

の勇氣と忍耐とのみ。

夫れ優勝劣敗は、世界の大勢とは云へ、眼前にかゝる實例を目撃するは、吾人の慨嘆に堪へざる所、然れども、英國が其富と力とを以て、此小國に臨む。當さに大石の雞卵を壓するに等しかるべし。然れども何ぞ圖らむ、杜人の剛強なる、攻敗二年にして猶降らず。加之將來も其戰爭を繼續せむとす。假令不幸にして、國亡ひ、民竭くるの時あるも、「ブール」人民の獨立の精神と忍耐の氣衆とは、將に萬古の青史を照さむとす。

四、戰爭に對する兩政黨の態度

英國の政權を左右する自由黨及保守黨の歴史は、今茲に述べず。一言以て兩政黨の主義を覆へば、自由黨は、人民が箇人として如何にせば、其權利を享有し、其利益を保全し得べきかを主眼とし、保守黨は、如何にせば、大英國が世界に於ける最大強固として、其歴史的の地位を維持することを得べきかを主眼となす。されば、自由黨の政略は、自ら内治に力を盡し、保守黨は、自ら國權國利の擴張に傾く。今回「トランスバール」の大戰爭も、保守黨なればこそ、是を斷行するに至りしなれ。此事件たる巨大の軍費を要し、多數の人命を犠牲にし、英國のみならず、實に世界中の最大事件とも云ふべきものなり。されば、此問題は、昨年の國會に於て、兩黨議論の燒點となりしも、亦宜なりと云ふべし。然れども、政府黨は國會に於て百餘標の多數を有するが故に、自由黨は亦之を如何ともする能はざりき。自由黨は「グラッドストーン」を失ひ「ローズベレリ」去てより、其結合

鞏固ならずして、帝國自由派、非常國自由派の二派に分裂し、益悲運に陥るに至りぬ。然れども、「サリスベレー」内閣は政權を握りてより、既に五年、且戰爭の長引くに従ひ、今や國會を解散して、國民の信望を新にするの必要をや感じけむ、政府は一九〇〇年九月廿五日を以て、議會を解散しぬ、而して其總選舉の結果は、

保守黨	三三二人
政府黨	六九人
自由統一派	四〇一人
總計	一八七人
自由黨	八二人
反對黨	二六九人
國民黨	
總計	

にして、自由黨は大なる失敗を蒙りしのみならず、「パーシンハム」の如き大都會に於て、同じく政黨に一籌を輸したりしは、黨の盛衰に重要な影響を有せずんばあらず。十二月三日、第十五議會、即ち「ビクトリア」女皇最後の議會は召集せられ、千六百萬磅の軍事費を議決して、直に閉會せられたり。今年一月二十二日、女皇崩御して、皇太子エトワード七世王位に即き、二月十四日第一議會は開會せられたり。この議會に於て、最も重大なる問題は、實に「トランスバール」に關係する事件にして、其第一は軍事改革法案たり。

「トランスバール」戦争に關して、内外識者の評論する所によれば、英國は二十萬の大軍を六千哩外に派遣し、殆んど二年の戦を繼續し、十五億圓の軍費を擲ち、七萬の死傷を生ず。然れども、國內の人心は少しも動搖せず、政府も又狼狽の狀なきに似たり。英國の英國たる所以は、實に茲にあり。然れども、翻て考ふれば、蕞爾たる一小國を征服するに、力を勞すること此の如きは、實に英國軍隊の組織訓練の不完全を證明するものにあらずして何ぞや。もし英國をして、大陸諸國の如き、整頓あらしめば、杜國の征服は、其幾部分の盡力を以て、充分なる結果を奏せしならむとは、蓋し過言にあらざるべし。

陸軍大臣「ブロードリック」氏は、三月八日の議場に於て、陸軍改革案を提出せり。曰はく、第一、吾人は二軍團よりも多くの軍團を派遣し得るの準備をなさざる可らず。第二、此等の軍團は、一層完全に編成せざる可らず。第三、軍團の外國に派遣せらるゝに當り、更に國內を防禦するに、充分なる準備をなさざる可らず。我砲兵は、不完全なり。我騎兵は、不充分なり。輸送の方法は、更に改良せざる可らず。軍醫の組織は、更に完備せざる可らず。吾人は義勇兵の方法によらずして、徴兵の方法を執らざる可らず。是れ「トランスバール」戦争が、吾人に與へたる教訓なりと。氏は進むて、六軍團を置き、其中三軍團は常備兵となし各軍團に、司令官を置きて、完全なる責任を帯びしめんと。其他兵士の給料に就き、軍事と軍政との區別を論じたり。今氏の提出せる兵數を示せば、左の如し、

常備軍		155,000	歩兵		260,000
豫備軍		90,000	國防軍		96,000
國民軍		150,000	龍動守備兵		100,000
イオコソリ(騎兵)		35,000	參謀部		4,000
義勇兵		350,000	補充兵		120,000
總計		680,000	總計		680,000

英國は、從來専ら力を海軍に注ぎ、陸軍は國家壓政の利器となりて、民權の危ふせし歴史あると、又英國は、海國にして、其必要少きことにより、之を改良し、擴張するに熱心せず。されば、兵數と云ひ、組織訓練と云ひ、大陸諸國に比較すれば、遠く劣等の地位にありしは、亦怪むに足らず。今や是改革案の提出を見る、時勢の催す所已むを得ざる次第と云ふべきなり。次に重要な問題は、財政法案にして、帝國主義實行の結果莫大の膨脹を呈しぬ。四月十八日、大藏大臣「ヒックス、ビーチ」氏の説明によれば、一九〇二年度の歳出は、

歳出	1,598,020,000
公債利子	27,800,000
總計	1,876,020,000
内陸軍費	29,000,000

而して、前年度の歳出一、三三七、二二四、〇七〇圓に對比すれば、五三八、九九九、三〇〇圓の増加を示す。

而して此歳出を充すべき歳入は、

海關稅	236,000,000
消費稅	331,000,000
相續稅	140,000,000
印紙稅	80,000,000
地租及家屋稅	25,000,000
所得稅	300,000,000
郵便收入	143,000,000
電信收入	34,500,000
王領收入	4,750,000
スキズ運河收入	8,300,000
收入	20,000,000
	132,255,000
不足	55,347,000

而して此不足を如何にして補ふべきかと云ふに、所得稅の増加三八、〇〇〇、〇〇〇圓、砂糖稅五一、〇〇〇、〇〇〇圓、石炭稅（新に一噸一志を課す）二一、〇〇〇、〇〇〇圓、合計一一〇、〇〇〇、〇〇〇圓を得るも、猶四四三、四七〇、〇〇〇圓の不足を生ず。而して是不足は、「コンソル」公債六〇〇、〇〇〇、〇〇〇圓の募集をなして、之に充てんとするにあり。

是等重大なる問題に對し、議會の形勢は果して如何なりしか、自由黨の首領「カムベル、バンナーマン」氏の如き、「ハーコート」氏の如き、「グレー」氏の如き、「アスキス」氏の如き、各雄辯卓論振ひ、或は政府の交渉宜しき得ざるが爲め、早く媾和の局を結ぶ能はざるを責め、或は増稅の商工業に及す影響を痛論し、或は「コンセントレーションカムプ」(敵の人民を一所に集む)を非難し、英軍の非文明的行動を攻撃せしも、到底保守黨の多數に敵すべくもあらず。是等の諸法案は、僅少の修正によりて通過せられたり。

自由黨は、改革俱樂部に於て、大會を催し、「カムベル、バンナーマン」氏の信任を議決し、兎に角自由黨表面上の統一をなせりと雖も、「カムベル、バンナーマン」氏は其演說に於て、謂に帝國派、及非帝國派の歡心を買ひ得たりと雖も、英杜戰爭問題を自由問題となすに至りしは、自由黨實際の統一、果して何くにかある。戰爭問題は、實に一黨の向背を明にすべき主要の問題にあらずや。すれは、「ローズベレー」卿が、自由黨の曖昧なる態度を評論して、自由黨の衰微せるは、主要なる問題に對して、意見の衝突せるにあり。意見の衝突は、過去二十年間に於ける帝國發達の結果なり。

意見の衝突は避く可らず。又現今救済の道なく、會合等により、決して隠蔽せらるべきものにあらず。自由黨にして、其勢力を恢復せんと欲せば、兩說中何れか勝利を占めざる可らず。其時に至る迄は、自由黨の大主義を公言するも、果何の益かあらむと言ひ、更に七月十九日、自由俱樂部に於て自由黨に對すに卿の演説は、慥かに自由黨に對して、至大の影響を與へたるものと云ふべし。保守黨に在りては、屢の會合に於て、其意見を發表しぬ。五月十日「チエムバーレーン」は、「バーミンハム」の宴會に於て、英國人民が、數月以前に、内閣の信任を發表せしは、「トランスバール」戦争が安價に買ひ得るが故にあらずして、此戦争が公明正大の理由を有するが故なるべしと喝破し、「サリスベレー」も亦宴席の演説に於て、此戦争は、無條件の降服ある迄は、遂行せざる可らず。不完全なる條件の下に、平和の局を結ぶが如きは、英國將來の國權の消長に關するものなりと。之に由りて之を觀れば、政府の杜國に對する意向の、如何に強硬なるかを知に足らむ。若夫れ政府の計畫通り、戦争其局を結ば、保守黨、殊に「チエムバーレーン」氏の勢力は、其極點に達すべく、自由黨は、之に反して、昔時の勢力回復せんこと決して容易の業にあらざるべし。

文 體 論 第一

特別會員 安 藤 紀 一

文章は言語の符號にて、その思想を後まで傳ふるものなれば、文を作るには、その思想を正しく寫すべきは、勿論なり。さて、その思想を正しく寫すは、口語の氣脈を失はぬ様に書くにあり。例へば「事が出来たら、手柄が見えう。」と、「事成らば、功現れん。」とは、口語と文章との差こそあれ、その氣脈は相同し。もし、「事成ならんか、則ち、功應に現るべし。」と書くときは、前の二例と比べて、如何なる差異あるか。その意義は同じからんも、尋常の人に聞かしめば、最後の文は、解釋六かしからん。これ、その氣脈が口語に遠ざかれればなり。それ、文章は、人の聞取らる、言語の符號の傳はるものなれば、これを視て解し得ると同時に、その譯を聽きても、容易く明る様に、書かざるべからず。聽きて易く明らざる文章は、決して、その思想の眞想を示すこと能はざるべし。我國今日の文體は、種々雑多にして、多くは、口語の氣脈に遠ざかれり。これによりて、近來、言文一致なるべしといふこと、物新しげに言出されたれども、この事は、遠き古の世とても、已に行はれたることにて、國文を記するには口形の形式を失はじと務め、古事記のごときは、漢文に長せる作者の筆なれども、最意を用ゐたるところは、言文の差別なきもの、ごとし、降りて、祝詞、宣命、物語、冊子より、三鏡軍記まで、凡鎌倉時代までに成り出た文章も、假令、口語の形式に一致せざる部分あるも、總て口語の氣脈に近し。然るに、今日に至りて、種々雑多の文體の行はる、は、如何なる變遷によれるかと考ふるに、元來、文章が、斯く口語を直寫し、思想を發揮する價ありと見認らる、に隨ひて、一方には、文學者が前時代の事實を記するときに、その眞相を發揮せしめんとて、その當時の人の使用せし言語の儘を寫すことの多きにより、他の場合に於ける自作の文章の中にも、

古言を用ゐること、なりて、その文章自然に現時代の口語の形式と一致せざる傾ありしこと、また、一方には、文學者が、古事を研究せん爲に、古語研究の必要を以て、古語を慣用することにより、自作の文章にも、好みて古語を用ゐて、全く現時代の口語の形式と一致せざる傾を生ぜしことは、即ち、言文一致の文體の、變化を起す有様の一端なりといふべし。かくのごとく、文章が、現時代の口語の形式と一致せざること、なれるは、文學者が、國の古事を傳へ、國體を明にせんとする努力の間に生せる自然の變遷にて、學問研究上に、已むべからざることなりしならめど、これを普通の國文とし、國文の標準とするが如きに至りては、誤てりといふべし。然れども、これ猶その形式の一致せざりしまでにて、その氣脈に至りては、もとより同じかりしなり。然るに、こゝに、また、他の事情より、文章が、言語の氣脈に遠ざかる原因となるあり、漢文和讀の口調、洋文直譯の口調、の二つのものは是なり。それ漢文、洋文は、もと彼方の音をもて讀むべき者にて、これを我國の語脈にて訓まんことは、もとより至難なり。故に、この漢文、洋文の意を我國語にて表はさんとせば、その文意の全躰に就きて、思想の那の點にあるかを尋ね、其思想に依りて、國文を作る外、良策なきものとす。然るに、漢文には、

政に従ふに於て何か有らん

なんぞ各爾が志をいはざる

惡ぞその民の父母たるにあらん

是れ世子にあり

以て犠牲に供するなし

祝鮀が佞あつて宋朝が美あらずんば

などの讀方ありて、聞きたるのみにては、文意明ならず。これ他なし、國語の氣脈の如何を顧みずして、文字を拾ひ讀みにすればなり。また洋文には、

汝の楯を以てか、或はそれに上にか、返れよが、戰場に向て彼の出立つに於て、彼女の子にまで、すばるたの母の訓戒でありし。

哲學が、それ等の賢き諺、そのの簡單を、我輩が尙簡明として記載する所のそれらの賢き諺に因て、代られてありし。

などの讀附け、即、變則風、一時流行せりといふ。この讀方は、亦國語の氣脈に據らずして、文字を拾ひ讀にするものなれば、原文を見ずして只聞きたるのみにては、その意固より明解せらるべくもあらず。而して、この讀附の口調と、彼の漢文和讀の口調とは、屢々國文中に侵入して、國文の形式を變せしめんとす、蓋し、漢文を用ゐ、洋文を譯するに際して、知らず識らず、それらに傾向すること、亦自然の勢なるべしと雖、それを普通の國文とし、國文の標準となすが如きは、亦謬れりといふべし。嗚呼、わが國文は、かゝる諸因の爲に、その價值を抹殺せられて、現時代の言語と愈遠ざからんとするがごとく、國文中に用ゐらる、語脈は、上古に僻したるあり、漢文を讀むがご

ときあり、洋文の獨案内を讀むがごときあり。これ、國文に取りては、重病に罹れりといふべし、而して、學者、或は古僻文に見慣れ、或は漢文和讀體の文に見慣れて、優雅壯潔とし、或は洋文直譯體の文に見慣れて、奇巧なりとし、その大罹病者なることを知らず、却て、今日の口語の氣體に一致する文を野卑とし、淺陋とす。豈不了簡の極にあらずや。故に、苟も、今日の文體を統一して、國文の標準を定めんと欲せば、まづ、この病根を一掃して、口語の氣脈に遠きものを排斥し、その近きものに就き、進みて、漢文洋文に於ける、前述の讀方をも成るべく用ゐぬこと、せざるべからず。これ國文の標準を定むる準備なり。今、こゝに、言語の氣脈に近接して、普通文の模範たるべきもの一二例を示すべし、

そもそも、人間は、犬や猫と違ひて、單獨にて暮らし得べき動物にあらず、是非とも、他の人々と共に家を成し、國を成し、睦み合ひて暮さねばならぬ性質の物なり。蓋し、一所に暮す他の人間あればこそ、名譽も欲しく、權力も欲しく、財産も欲しくなれど、他の人間は、皆死でしまひ、自分獨この廣き地球に残るものと考へて見ば、財産も權力も、名譽も、誠につまらぬものなるべし、これを思へば、他人の身の上を思ひやる心なく、只管私慾にばかり耽るほど、道理に違つたる事はなし。他人といふものがなくば、大發明をしたりとても、用ゐやうなく、大豪傑になつたりとても、手柄の仕様もなき譯なり。孰かといへば、他人あつてこそ、我身も大切になる道理。今我々が必死となつて、色々の學問をするも、畢竟は、卒業して、昔の學者、豪傑、賢人、智者

にも立ちまさつたる大智者、大賢人となりて、色々の工夫を凝らし、上は、天變地異を避ける工夫から、下は病氣、その他の災難を、人間社會から追ひ拂ふ方法を考へ、衣食住、其他にも、十分の改良を施し、すべて、この人間世界を、今のよりも、遙に立ちまさつたる世界にして、出来るものならば、強竊盜や、人殺や、戦争や其他色々の悪きことを、悉く根絶やしして、全然天堂極樂のやうなる世界にしたきものといふ大望からする事なり、決して、自分が褒められ、自分ばかりが樂をせん、なごいふ私慾一方の了簡よりすることあらず。……………

文久元年の五月上旬に、英國公使は、其屬僚を率て、富士に登山し、同月廿八日に、江戸に歸り、高輪東禪寺の公使館に入れり、余は、外國方の淵邊德藏等と、共に、此前日より、東禪寺に詰合せたり。この時、東禪寺の警衛は、別手組凡二十餘人にて、中門内を守り、御警衛大名松平時之助本館中門外を守り、同じき松平和泉守、洞春院の裏手を守りたり。然るに、この日、公使歸館して、館内は、雜沓を極めしが、黄昏より、梅雨、少しく降りて、物靜になれり。外國方の詰所は、中門内の右側なる塔中にて、本館を距ること四十間許の所にありて御目付方も、此の中に宿直せり、午後十時にも及びたれば、寢に就くべしとて、小使に命じて、蒲團敷かせ、蚊帳釣らせ、其中に入りたるに、俄然として中門内と本館を關前との方向に當りて、多人數の叫び聲も、聽えたり。扱は、失火にてもあるやらんとて、詰合一同は、飛起きて、帶を締め、蚊帳を除き、まづ同心に物色せしめんとする時に、狼籍者なり、討入なり、といへる呼喚に接し、同時に浪人

討入りたり。……………

これらの文、探索せば、猶多かるべし。余は、學生其他作文家が、よく言文の關係を合點して、その氣脈の一致といふことに意を留め、思想の真相を發揮する價値を失はざらんことを希望す。次に言文一致體といふ文に就きて、少しく言はん。左に示すは、即ち此體なり。

國語を改良するに就いては、國語學者の責任の重いのは勿論であるが、國語の内容を殖やすに就いては、國學者よりは、他の文章講話などに従事する諸學者の盡力に頼るより外はない。吾等は、これらの諸學者が、その學の振興を計ると共に、國語の改良發達などにも、思慮を及ぼされう事を切望する。

地理と歴史とは、何うしても離れることが出来ないもので、地理を知らないで歴史を讀んだら、恰で、經文の棒暗記をすると同じで、折角の暗記も、譯が分つて記憶して居るのでないから、日を経るに従つて、段々忘れて了ふ。そうして、歴史の内でも、殊に、戰の事實は、地理地形を知らなければ、記憶をするにも、困難で、已むを得ず棒暗記をしなければならない事になる。……………私は雪が大好きです。で、雪降の朝は、きつと、誰よりも一番早く起るのです。處が、今朝は、折よく、雪降でしたから、私は、まう大喜で、早くから、外へ出て見ますと、お向うの三郎さん所の門の横手に、妙な物が、突立て居りました。それは大きな、眞白な、魔物、何でせう。私は、本當に驚きましたよ。だが、度胸を定めまして、その傍へ行き、その正體をよくよく見届けます

と、これは、矢張、雪で拵へた雪達磨でした

前の二者は、獨語體ながら、形式に少し差別あり、後の一は、對話體なり。いつれにしても、これを主張する論者は、この文體の示すごとく、文章の形式を、悉く口語に一致せしめんとするにあり。此論誠に至當にして、文章の文章たる價は、此體によりて、現はるべしといへども、今日の口語は、各地に、種々の方言ありて、口語の標準、未定らず。それ、標準の定まらざる口語を、文章形式の根基とするときは、その文章語が、一般に明解せらる、ことを得ざるは、必然の事なり。然りといへども、口語の標準を如何に定むるかといは、やはり、この文言一致體の文をよく作りて、一般の言語の統一を誘くと、確にその一良法なるべければ、一般に明解せらる、限に於て、この體の文を作ることを研究し、研究に研究を積みて口語の標準を作ること、亦これ作家の急務なるべし而して、言文一致體といへども、その結構は、普通文、これが誘導をなさざるべからざるものなれば、普通文が從來の弊を脱して、口語の形式に接近し、思想の真相を發揮するものとなり、かの言文一致體に向ひて、不斷の模範たらんこと、亦今日の急務なるべし。而して將來の國文の標準が、今日の普通文體に歸せんか、言文一致體に歸せんか、又は、兩者の調和せる別體に歸せんかは、今日に於ては、言論の上に臆定し得べきものにあらず。但吾人は、言文一致體の研究の度を強むるに従ひて、普通文の統一の研究の度は、益々これを強むべきことを忘るべからず。

家庭改良論 (懸賞當撰)

第四學年 紀 藤 庄 助

余は、今日社會の人士が青年の墮落を慨くを見て、深くこれ等の人士の淺慮を慨く、彼等は、國家を興すべき基礎はこの青年にあり、國威を發揚すべきはこの元氣にあるを信ず、而して今この頼むべき青年社會が斯る腐敗に沈めるを慨き、天を仰いで國家の先途を啣つなり。

凡て事の成るは、成る時に成るにあらずして、必ずや遠く由て來る所あり、俗に偶然なるを夕立の如しと云ふ、夕立豈偶然ならむや、必ずこれに來るべき起因あつて來るなり、世事萬端、物として原因あらざるはなく、これに由て起き、これに由て現はる、然らば、今日人士が慷慨する青年の墮落も、亦一日にして成りしものにあらずして、これを來すべき或る原因の存するや明なり、若、人士徒に悲憤するをやめて、その由て來る所を研めむか、或は思ひ半に過ぐるものあるを知らむ。

吾人は、新に社會の新聞紙言論者が述べ盡くして餘りある、青年が墮落の跡を追うて繰り返へすことをなさず、只、要するに今時の青年はあらゆる不行儀、あらゆる不徳義を行ひ、己が負擔すべき重大の責任を忘れ、興さざるべからざる第二の國家を忘れて、墮落の極に陥れるなり、あ、思うてこ、に至れば、誰か扼腕に堪へさらむ、然れども人士よ、今日に於ける我が帝國の位置時代を知るか、徒然、世人の墮眠を警醒し、青年を喚起してのみやむべきの時なるか、否々、宇宙の風潮を察せよ、この世紀に我が帝國は、何をなさざるべからざるかを思へ。

回顧せよ、十九世紀は慥に日本の過渡時代なりき、たゞへ浦賀の黒船に三百餘年の夢破れてより、驚くべき速力にて文化は勇進したりとはいへ、日本は猶東洋一隅の日本なりき、時としては、支那と同色を以て世界の地圖にあらはれし事なきにしもあらずといへども、文學に於て、商工に於て、僅に微々命脈を保つに過ぎざりき、然るに、十九世紀の終に彼の事件のため、日本は東洋より脱して世界の日本となれり、大膨脹の日本となれり、その文物は日に進み、殆ど世界の列強と比肩し得るに至れり、二十世紀は、明に日本が驥足を延ぶる時代なり、然れども各國も亦昨日の各國にあらず、然り、シーザルも英雄なりき、ナポレオンも英雄なりき、しかも未だ彼等の劍は黃血を味はず、墳墓は郷土を出でざりき、今列強の勢力は何處に洩されんとするか、明なるべし、十目の見る所手のゆびさす所、あ、東亞多事なるかな、今日の我が位置時代果して如何。

余が、青年の墮落を慨く人士を慨きしはこの點にあり、この時に當りてこの墮落を見るもの、豈徒に拱手洪嘆してのみ已むべけむや、宜しくその原因を探查研究し、以て矯正の策を施さざるべからず、これ實に、目下重要な務にあらずや。

何をかその原因と云ふ、何をか矯正策と云ふ、吾人はこれを明言することを憚らず、家庭の腐敗はこの因て起る所にしてその改良はこれが唯一の救済策なり。

抑、人生と家庭とは如何なる關係あるか、見ずや、奈翁の偉業はゼヨセウヒンの離別も共に動き、豊太閤の覇業は後閨の紊亂に泥びたり、九代の權勢を維持し十五代の大平を保ちたるは、内に圓滿

の家庭ありし北條氏と徳川氏との政略なり、これ皆、蓋世の英雄が残せる、家庭に於ての跡ならずや、三遷の教は彼を聖孔の中興と仰がしめ、露牌前の誠は果して亡父の言を空しうせず、孟軻子として、小楠公として、賢母の擧と共に後世に流る、繰り返へさむ、人生と家庭とはそも如何なる關係がある。

蓋、圓滿嚴肅なる家庭は、完全公德の偉人を生じ、然らざれば反對の結果を呈す。

現時我が家庭を見よ、社會の準據たるべき上流社會に於てすら、道德は地を拂うて見る事難く、金のために、利益のために、慾情のために、社會公私の道德は抛れたり、ある者は朝夕花柳の蝶に眠り、酒池肉林の域に横る、此處に收賂事件あり、彼處に欺惑騒動あり、しかもこれ、要極なる上流の人物に於て見る所、試に紳士録を緋け、高利貸あり、相場師あり、甚しきに至ては博徒の親分あり、紳士とは何ぞ、士なり、品行徳性群氓の師表たるべきの君子なり、思ふべしこの世間の腐敗と誤謬とを、あ、至れるかな、極まれるかな。

世の教育家、徒にスペンサーやヘルバルトの研究をやめよ、有志士、希くは青年の墮落を慨くことなかれ、青年は社會家庭の反射鏡なり、豈、源泉濁れて下流澄まむ瓜の蔓に茄子はならず、この圓滿善良ならざる家庭の下に、清廉純潔の子弟あるの理あらむや。

そも教育の主點は、青年の本領たる感情を高尙にし、以て高潔なる理想を作らしむるにあり、實に學校と家庭とはこれが教育者たり、而してその原動力は家庭にあり、家庭は、將にその感情の大部

を感化し、一日一年の大半、彼等は家庭に起居し、その風情に浴しつ、あるなり然かもこの大なる責任ある家庭、今日の我が家庭は、果して高尙に彼等の感情をし得べきか、あ、彼等は感化し能はざるのみならず、その反對の地位に立てり、學校の一日熱する所家庭これを十日冷す、何んぞその熱を保つを得む、益軒先生云ふ、教育は穀種なり、家庭は田地なり、と、如何なる精良の穀種も蓋し、荒蕪の田地に於ては良果を収むる事難かるべし。

この家庭改良は、只一個教育上の問題なるのみならず、又論すべき社會の緊要問題なりとす、然れども今日吾人が言はむと欲する所は、教育的方面より墮落を矯正すべき原因なる家庭に及ぼせしものにして、社會的方面は多く預る所にあらず、況むや、屢、卓見なる當局者の論する所なるをや。

今日の家庭は、道德に、風儀に將た習慣に、殆ど青年を容るべからざるものにして、道德もとより改良すべきなり、風儀習慣亦然り、然れども特に採るべき第一着の手段は、一般の家庭をして教育思想に豊かならしむるにあり、苟も該志想の家庭に存せむか、又誰か徳義を外る、者あらむ、風儀を亂すものあらむ、これ青年は家庭の一動一作をうつす反射鏡なればなり、隨ひて社會の道德風儀は、聲を揚げずして振ひ、鞭を擧げずしてたつべきや必せり、余が、家庭改良の手段として先づ該志想の必要を説くもの即ち此處にあり、見よや如何に今日、吾が國人一般にこの志想の缺乏せるかを、家庭と學校との氣は脈全く絶え、父兄は、學校が如何に吾が子弟を教導するかを知らず、當局者、亦、隨つて家庭の状態を詳にするに由なし、只世人は、子弟を學校に一任して願す、讀書と講

義とが完全の教育をなし得べくむば、教育は眞に只々の業のみ、迂濶も亦甚しと謂ふべし、聞く、歐米人の最、意を注ぐは教育にして、閑ある毎に學窓を訪問して、教授を參觀し、互に不審を晴し相互、子弟を化育しつ、ありと、吾人は、斯くてこそ始めて教育の眞果をあらはし、氣風を高くし意志を潔うし、以て頼むべき青年を作り得べしと信す。

今や、教育者、見る所あるもの、如く、屢、學校家庭連絡の聲を聞く、本校の如き夙に尤も勤む、その保證人茶話會の如き、實に本旨に叶ふもの、吾人は、未だその状態を明にせずといへども、好果を収むべきや疑なし、冀くは、この種のもの益健全に發達し、家庭が青年化育の責をつくし、吾人をして再び實にこの嘆聲なからしめむことを。

然れども未だ世間は暗し、暗流は莽濤として襲來し、社會家庭を紊亂の渦中に捲き去らむとす、正義那邊にかある、純潔那邊にかある、現在の精神が宿る社會は腐敗せり、未來の柱礎を研くべき家庭は墮落せり、扼腕歎、あ、熱血膽力ある幾多の人士、これに啞かずして何のためにか、男子この紅涙を持つ、これに振はずして、男子何のためにかこの健腕を持つ。

余はこの文を懸賞文中の壓巻とす。

小田君に同感。

行文稍見るべしと雖も、論旨平凡、第一等となすの價値なしと思ふ。

家庭改良の必要を言ひて、其の理由を明示するは已に至れり、家庭改良の細節に入りて、其の

小田

藤井

雨谷

系統を詳説することは未だ及ばず、これを家庭改良論の序論と見るは可なり、更に、本論に筆鋒を向けずんば、九俣の山を見むこと難かるべし、作者に望む所、豈僅に、一簣のみならむや。

雨谷

家庭の細節に論及せざるの遺憾は前評の如しと雖、本文の如き大問題の善美を、青衿の筆に向て責むるは酷に過ぐるることなきか、然れども、本文が懸賞文中の壓巻たるを以て、直に一等となすは懸賞文の程度を卑くするの虞あれば、一等を虚位とし、本作を以て二等とし、以下順次に等を繰り下ぐるも宜しからむと思ふ。

竹内

學生の墮落云云に就て

第四學年

福田信彦

近頃、新聞紙に雜誌に、學生の墮落を云云するものあるを見る。吾人は學生の一員として實に慷慨に堪へざるなり。無論、全國百萬の學徒中、時に二三の墮落を生ずるは止むを得ざれども、今日學生界の風儀に至りては實に言に忍びざるものあり。勿論、新聞雜誌の雜報や一口投書に出でたるが如きは、殆んど信すること能はざれども、彼の萬朝報の如きは新聞社たる責任を以て滔々として墮落書生の汚點を列記し、且つ實例を擧げて之れを戒めたり。聞く、都下の魔窟たる遊廓に登るものは半ば學生なりと、嘆すべき哉、彼等は正に學生たる躰面の一端を汚したるなり。彼等は世人をし

て學生の墮落を叫ばしめたり。即帝國の學徒に泥を塗れるものなり。願ふに、吾人は正に社會の繼續者にあらずや。しかも他日社會の中堅たるものなり。他日我が日本帝國の基礎たるものなり。其責任の重大なる、實に双肩に餘れり。斯く責任の大なるにも係はらず、溜々として日に墮落の域に至るは其責任を忘れたるものにして、又、其本分を無視せるものなり。其身の責任を忘れ、其本分を無視するは、即ち、人類たる道を盡さざるものなり。故に、人類として其道を履行せざるものは人面獸身といふも不可なかる可し。

然れども學生の墮落たる一概に其罪を學生にのみ負はしむべからず。今日の社會は學生よりも寧ろ其責任の大なるを知る固より學生に罪なしとせざれども、今日の有様に至らしめたるもの、社會墮落の一事與て力ありといはざるべからず。今や、社會の墮落は延て學生に涉れり。而して、吾人は今日學生に籍を有す。學生は元來神聖なり。此神聖なる學生は社會の墮落すると共に、其汚流に捲き込まれ、忽ちにして同化し、共に墮落の淵に沈まんとす。吁、吾人は彼の惡むべき、賤むべき、墮落せる輩と共に、學生てふ名目を被らざるべきか、嘆すべき哉、慨すべき哉。

而して、斯の如き墮落の風俗は主として東京の如き繁盛なる土地にのみならずして、數年前の長周日報にも、防長學生を戒むてふ標題を掲げ、以て、吾縣教育の主腦地たる山口を主とし、各地學生の汚點を指示し、之を戒めたりしを記憶す。時に吾人は未だ小學に在りし時代なりしを以て、其如何なる都合なるか解せざりしが、今日に至りて見れば、彼の悲むべき汚軍は、已に吾長防を襲ひた

りしなり。由來防長人は正義を以て立ち、防長學生の名譽は各地に噴々たりしが此に至りて斯の如き汚風は此の尊ぶべき正義を汚損し、喜ぶべき名譽を傷け、延て防長の教育界を汚せり。實に悲むべき極みなり。

元來、新聞紙の傳ふところのものは、詭多く、從て世人中には殆んど新聞紙を信用せざるものあれども、新聞社は新聞社たる責任を以て筆を採るものなり。乃ち社會を開發し、又改良する責任を有するなり。たまたま一の惡徳新聞あるの故を以て新聞全般を蛇蝎視するは甚だ酷なりといふべし素より彼の一口投書の如きは、中傷的のものありて殆んど、信するに足らざれども、新聞紙が自己の言論として出し、或は雜報といへども、責任を帯びて記載する以上は、新聞社自ら責任を有するなり。勿論、新聞社たるものが、無根の事實を列記してみだりに中傷を試み好んで學生の體面を傷くるものに非らざるを知る。特に注意すべきは、一口投書と雖も、數度重なるときは、時に世人の目をひかざることなきにもあらず。斯くなれば、其腐敗なる語は、終に、其地方學生の代名詞たるに至るを以て、其地方の迷惑一方にあらざるなり。是に於てか、吾人は益々憤慨に堪へざるものあり。去る九月廿九日、防長新聞紙上蟲聲欄内に於て、吾が親愛なる萩中學校生徒の墮落せりて誘りしものあり。曰く、萩中學生中には、道路に於て通行人を冷評し、時には妙齡の婦女を赤面せしむることありと。素より信す可からざる一口投書にして、半ば中傷的に屬するならんも、余輩は學生として、又、本校生徒として、殆んど讀むに堪へざりき。吾人は帝國の學徒なり、防長の學生な

り、然かも本校の生徒なり。何ぞ慨嘆に堪へん。悲むべし、墮落の風潮は延て防長に侵入し、進んで我が愛すべき地に及ばんとす。吁、我が愛すべき同窓諸友は斯く迄墮落せしか、斯く迄腐敗せしか、否、決して然らざるを信ず。吾が敬愛なる學友諸氏は未だ清淨潔白にして、一點の汚流に捲かれたるを見ず。慶すべきなり。されば、彼の投書は無根ならん、中傷的ならん。然れども、又、吾人は注意を要す。世に墮落々々と叫べども、是亦一般にせしにはあらず。例へば、一枝に於て數人の破廉耻漢を出せば、江湖よりは之れを以て直ちに墮落學校の號を冠するに至る。慎むべきなり。我が萩中學の如きは、創立以來僅かに二年、各地に遊學せるもの歸りて我校の名聲噴々なるをいふ。されば、たとへ無根の事實とは云へ、斯くの如き謗りを受くるは、少なくとも校の名譽を害するものなれば、喜ぶべき現象と云ふ可からず。若し、夫れ、彼の謗りをして、事實なりとせば、獨り吾人の耻辱のみならず、我校の耻辱にして、大にしては、此地方の耻辱となるなり。故に、吾人は飽く迄注意せざる可からざるなり。

嗚呼、顧慮せよ。世は二拾世紀なり。今日世界の集目點は我東洋にあり。而して、吾人は他日帝國の中堅となり、基礎となりて、此の複雑なる二拾世紀の中間に立ち、しかも世界の燒點たる此の東洋に於て、世界の大勢に對抗し、二千六百年間維持し來れる、神聖無缺の我が神國をして、世界に光輝を放たしめざるべからざる一大責務を有するにあらずや。殊に、我が防長は明治維新の原動力たり。而して、我が蕪城の地たる、正義尊王を持って起ちたりし吉田松陰先生の出生地にして、將た

明治の柱石たりし元勳諸氏の生地なり。されば、此地に生れたる防長青年の責任は更に大にして、蕪城青年の責務益々大なること言を待たす。若し一朝不幸にして墮落の淵に沈まば、吾人は防長の天地に對し、又、地下に瞑する無数の先輩に對して、何の詫言か之れあらん。豈に等閑にすべき時にあらんや。されば、吾人は家に在りては父兄の嚴重なる監督を受け、學校に至りては、諸先生の指導教育を受くると共に、益々一致團結して校則を守り、校訓を遵奉し上下禮義を正し、各自相勉め相勵み互に相指導して一の確乎たる校風を造り、學友間の制裁をして益々重からしめ、如何に社會が墮落するとも、如何に衆人が腐敗するとも、斷々乎として、彼の厭ふべき、憎むべき汚風をして秋毫も犯すこと能はざらしめざるべからず。否吾人は單に消極的覺悟を以て已むべきにあらず、須らく先づ我校風を確定し、之を以て吾人の周圍に來るものを同化し、天下學生の墮落を改善する原動力たるべき積極的氣概なかるべからず。起てよ蕪城五百の有血男兒、君等は今や滔々侵入して我防長の地に凱歌を擧げんとする墮落軍に向て十字軍を起すの勇氣なきか。

雜 纂

卒業式に於ける野田視學官の演說

四月十五日、我が校の卒業式に、本縣知事代理として列席せられたる野田視學官の演說は、主とし

て卒業生の爲にせられたるものなりといへども、また一般學生の大に記憶すべきものあり。視學官の言はれたる所左の如し。

「さて、本校第一回卒業生諸子よ、諸子は畏れ多くも 御聖影の御前にて、かゝる壯嚴なる式場にて、美事なる卒業證書を得られたるは、諸子に於て最名譽とし紀念とするとなり。此の如き名譽を得られしも、全く多年の修養の結果に外ならずとも、この名譽に對する充分なる責任を盡さるべからず、即ち今、手にせる證書は表面より見れば、只中學課程、即ち最高等の普通教育を卒へたることを證せども、深く裏面より之を観察すれば、實に重大なる責任を負ふべき宣告書なるを知らざるや。されど、諸子の目下の形勢を前途の廣遠なるに較せば、只僅に家の地盤を造れるが如く、船の龍骨を据ゑたるが如し。故に、諸子は後來如何に堅牢なる家屋は建らる、か、將、如何に鞏固なる船舶は造らる、かを證せざるべからず。又、諸子は將來社會に立つに當りては、幾多の障碍誘惑あるを豫知せざるべからず。障碍とは何ぞ、曰く牽制、誘惑とは何ぞ、曰く利欲之れなり。諸子は今より果して此等百難を排して、進み得るや否やの好試験期とはなれるなりされど、勇敢なる諸子よ、諸子は決して此等に屈せず撓まず直進急行彼岸に達せんことを期すべし。故にこの卒業證書の裏面には一大責任を負へる宣告書なりといふ、否か。

又、殊に知事より命せられしとあり。そは近來世間に往々或は新聞に或は口頭によりて先輩崇拜を非難する者あり、此は甚だ誤れるものにして、泰西諸國にては英雄崇拜は人權を無視せる怪物なり、

と評する者あれど、我國にては、古より上下の分明にして忠孝一途の國なり。而して諸子の今日あるは、實に先輩諸公の賜なり。また殊に、諸子は他地方と異り最多く國家に功勞ありし先輩を有す、至幸といはずして何ぞ。又曰く、當今の先輩は後進を親愛誘導せずと、これ後進の先輩を敬慕せざるに歸す。されば、諸子は世の濁流に染まず、宜しく先輩を崇拜すべし。

今一つ命せられしは、外國人に對して不敬の行爲をせざる様注意すべし。近頃我が國は文明の域に進みたれども、軍事を除きては未だ彼等に誇るべきとなし、故に國勢を擴張するには充分彼等の文物制度を採用し、以て文明國たるの眞價を有せざるべからず。是を以て、本縣會は、本年度より縣下の各中學校に外國教師を用聘することを可決したり。依て近々當校にも外國教師の來任せらるゝこととなりたれば、益、外國文物の輸入に便なると共に、其の師たる外國人を輕せざる様、心懸くべきなり云々。〔石津御橋記〕

山口中將の演説

先般北清より凱旋せられたる山口中將閣下は、此度募參の爲め當地に來られし序を以て、九月二十四日親く本校を訪ひ、一場の演説をせられたり。今其の概要を記さん。

閣下は先づ一同に來意を告げ、而していはる、様、余が昨年北清事件に於いて彼の地に屯在中、清國の現狀に陥れる原因を覺れり。そは、全く教育の不振殊に精神的教育の興らざるにあり。一人の

教育にありては、専ら孔孟の道によれる故、屢、孝子節婦の輩出せるを聞けど、苟も一郷を率ゐ、以てその利益を謀り、或は廟堂に立ちて國是を進むるが如きに至りては、殆どその影を見ず。精神教育の治國に必要なは、我が松陰先生を以て明なりとす。先生は主として之に意を注がれし故、其門下に英雄の輩出せるにあらずや。されば、我が國には最、教育に心を盡し、殊に精神の教育は廣く學校を興し、以て幾多の子弟を養成せり。而して、夙に軍人には、朝廷より五個條の勅諭を下し給ひしを以て、總て之に由りて教育の本とし、着々歩を進めたり。さて、西洋諸國の軍隊にも亦大に之に意を用ゐ居れることは、今回親しく見たる所なり。

抑、精神教育とは、君に忠に國を愛するを始め、普く諸般の道德に亘る教育なることは、申すに及ばざることなり。故に、諸君の内には將來或は軍人に、或は政治家に、或は實業家にならる、ならんが。何にしても、この精神教育の必要なは論を俟たざるなり。されば、諸君は一日も之を勉むることに怠るべからず（落合兼文記）

前田豊作君の南洋視察談

我が文藝辯論部は、今年九月の例會に於て、先程南洋諸嶋を巡視して歸朝せられたる前田豊作君を聘し、一場の視察談を願ひたれば、例により左にその要を記す。

予は數月前、菽地を發して門司に出で、此より直航船博多丸に乗し、香港を経て新嘉坡に向ひ、再び、新嘉坡より南洋諸嶋を巡視せるなり。さて、この博多丸は我が郵船會社の船なれど、事務長を除くの外、船長を始め他の樞要なる役員は、悉く外國人なり。是を以て、如何に我が海運事業の奮はざるかを想ふべし。殊にこの濠洲航路は近來創めしとなれば、その船員概ね外人なり。翻て我が商船學校卒業生を見れば、渠等は纔に近海航路に堪ふべきのみ、元より學理は高尚を以て誇れども、實務の素少きを如何にせん。されば勢、外人に我が船長たることを委任せざるべからざるの理にして、歐洲諸國にては英國の外他に例なし。但し英國は自國海員の供給は需用に超過すること有るども、不足を感ずることなきが故なり。諸君の知らる、如く香港は極めて狭き地なる故、重樓層をなし大厦巍然たるの觀あり。加之、山上に旅舎あり、之に通へる急峻なる鐵路あり、余は始めてかゝる瀛車に乗りしこと故、やや恐怖の念を生したり。凡て香港新嘉坡は生産物たるべきものなく、たゞ歐亞二洲の物産の集散地たるのみなり。

新嘉坡にては十數日滞在し、親しく諸工場を視察し、其よりセレベス、ボルネオ、パタビア等に渡れり。此等は概ね支那人を以て組成し、商工權は皆渠等の專有に歸せり。ニューギニー、ボルネオは皆和蘭領なれば、蘭政府は四万の守兵を置いて之を防備せり。而して内二萬人は蘭人なれど、他は支那人等なり。甚しきは、嶋の官吏すら概ね支那人を以て充すとは豫想外のことなり。誠に支那の屬國地たるの觀あり。内地土人の帶劍濶歩せる様を見れば、封建の昔を思ひやらる。しかし、沿岸地方の商工業の發達は我が國に超越せること數等なり。實に我が實業界は海綿的實業なり。假令表

面上盛大を装ふとも實際に至りては微々たるものなり。これたゞ學理の蒐集にのみ傾きて、實務を度外視せる故なり。

南洋諸嶋は主として世界的物産を製し、又自ら用ゐるにも世界的共通のものを嗜好すれど、我が國の産物は絶對的一般に適せざるが故、我國に過剩すればとて直に外國に出すこと能はず。これ販路の狭き所以なり、即鐘詰夏橙の如し。故に、爾後我が實業家は商品の改良進歩を謀り、以て世界的物産とせざるべからず。如何に武は雄くとも、實業衰へ、財政困難なるに於ては、國權を伸張するを得ず。嘗て一蘭人の予に語りて曰はく、貴國は數年の内に戦はざれば、國亡びんと、これ絶對的に適當なる語ならざるも、我が國民の一考を要すべきことなり。諸君若し高等學校等に入りて學ぶ所あるも、他日海外に漫遊することあらば、大に技術を學ばざりしを悔ゆるならん。さればとて、只商工のみを學べといはされど、徒らに學理にのみ馳するは無益の至りなり。予も亦た其の道に入らずして法學を修めしを、甚だ悔ゆる所なり。殊に我が國は近來漸く開明に赴きし故、商工業を輕んずる弊風ありて、技術家は高位にあることを得ざるが如く感ずれど、南洋諸嶋にては技術家は甚だ尊敬せられ、賃銀は官吏の俸給に勝れるを見る所なり。されば、諸君にして未だ志の定まらざるものは、進んで商工の諸學校に入り實業家となり、以て大いに我が國威を輝されんことを望む、云々。(増野純亮君)

能勢教諭見嶋視察談

發 端

諸子の知れる如く、見嶋は萩地の地方遙に距てる渺たる一孤島なり。海上波荒くして渡航甚だ不便なれば、他方と交通の路少なし。故に、この地は、人情風俗さては産物に至るまで、頗る參考に供する點多かるべしと信じ、渡航を希望せしこと久しかりしが、偶々好機會を得て積日の望を達することを得たるは實に本年七月十八日なりとす。十八日の拂曉東天紅なる頃玉江の漁舟に乗じ、阿武川の嵐に滿帆を孕ませて、かの島影さして走りぬ。日は登れり、海はさながら油を流せる如く、願れば内地の山々は高く又低くして、却て沖の叢雲かと疑はれぬ。とかくする内、風止みければ、漁夫は鐵の腕顯はして、櫓拍子面白う漕ぎ行けり。實に予は今日の如き靜穩なる日に乗り出でたるを、いたく喜びぬ。かくて午後二時といふに、船はやう／＼かの島に着きたり。

見嶋の地理

この島は、數年前まで見島郡とて獨立せしが、今は阿武郡の一村となりき。萩地を去る海上二十五哩なりといふ。さて島の形南北に長く、その中央の幅狭く所謂瓢形をなせり。圍回三里十八町、面積〇、五三一方里、戸數三百四十三、人口千〇八十九(明治三十三年十二月調)あり、島内に本村港宇津港の二村落ありて、前者は漁民多く、後者は農民多し。

全島盡く丘陵の起伏を以て成る。故に狭き谷は之を道とし、廣き谷及び低き丘は之を耕地とす、さ

れば降雨一度到れば、道路變じて河流となり、又往々耕地すら一大沼池の觀あるとありといふ。加之、海上險惡なれば、漁業の困難は勿論、冬季に至りては他方との交通の杜絶すると月餘に涉るとあり。誠にかゝる所も住めば都と思ふ島人の哀さよ。

見島の地質

見島の土性は火山灰質にして色或は赤く或は黒し共に乾けば灰の如く、濕へば餅の如く、固れば石の如し。岩質は全島火山岩にして熔岩集塊岩の二種あり、後者は主として本村附近に、前者は海岸の地に多くして、概ね千丈の絶壁をなす。從て景色に富めるもの少なからず。今、その一二を記さば、本村より東に岸に沿ひて進めば、日崎あり、本島最東の地なるを以て此名あり、海上を抜くことその高さ百餘丈、仰けば峻壁磨するが如く、削るが如く、或は將に崩んとするが如し。若しまた上より臨まんか、目眩めき足戦き久しく居るべからず。されど、依てなれる所を觀察すれば、よく當時地變の如何に猛烈なりしかを思ひ出で、心自ら豁然たるを覺ゆ。

日崎に對して宇津港を抱くを觀音崎といひ、紅巖黒石相重りて層をなし恰も棒縞を見る如し。誠に地殼の變動の最も烈しかりしとを證せり。以上の點によりて考れば、島内一の噴火口らしき所なきも、全島明に一大火山にして、しかも、觀音崎は成層火山の口壁なることを示せり。其の杜絶の趾を觀ては絶大の感自ら禁ずると能はざるなり。觀音崎を廻れば、一つの深き洞窟あり。舟よくその奥を極むれど、入ること十餘間にして、暗黒巨燭を用ゐれば又進むこと能はず、加之、奥底に寄す

る浪音は洞壁に反響し、時ならずして雷鳴を聞くが如くその凄しき様に怖れその奥を究むるものなしといふ。されど、比窟の成因は全く富士の人穴と同じく熔岩の流れ出てたる跡なれば、敢て惟むとなく、又、一の妖怪の住むべくもあらざれば、爾後此所に遊ばんものは、必ず最終を見極んとを望む。

宇津港の濱は、誠に美しき細砂にて敷かる。されど、之をとりよく驗すれば、悉く貝殼の細片にして數千年來の貝屬の遺殼の畜積せるものなり。

西岸亦奇岩少からず。烏帽子岩、竈岩、鍋岩等あり。みなその形によりて名とす。正南に金岩とて館狀の熔岩よりなれる岩あり、其他奇岩怪石數ふるに暇あらざれば、爰に一々せず。

見島の動植物

本島の動植物に就きては、余の最も囑望せし所にして、又最も失望せし所なり、始め北海の孤島には必ず内地と異なるもの有ん、と思ひ居たりしに、此度その實際に就て視察するに及び、貴重なる産物も、また奇異なる動植物も發見せざりき。素より時日短く、加ふるに波浪高きことにより、採集の便を欠きしと少かりしかど、概ね萩地方と大差なく、決して世人の想像するが如き動植物の種屬に富みたる地とはいふべからず。唯海産物の大きに於て、比較的優れたるもの多きを長所とするに過ぎず。別に野獸と稱すべきものなく、人家より遁れたる野猫、海岸に出沒する海獺あるのみにして、狐兔の類さへ棲ますといふ。鳥類は鳩、烏、鷓鴣、鶉、及び朝鮮鶯、駒鳥の如き候鳥あるのみ。

陸生植物には松杉等の針葉樹、其他普通の樹木雜草にして種類甚だ少し、殊に、海産動物海草等は
一も内地と異なるものなし。

見島の水産業

四周皆海なるを以て、魚屬の繁殖最も多きが爲め、従ひて漁業の發達盛大ならんと考ふ者あるべけれど、決して然らず。その漁法幼稚なるを以て、空しく天賦の富を海中に残すの感あり。
本島、海産物の主なるものは、鰯、鰯、くろや、小鯛、飛魚、鮑等なり。漁夫中、勇奮進取の氣なく、海波の危険を恐れ遠海に出漁するものなきは、本島の爲め大に惜むべきことなり。

見島の農業

農業は耕作牧牛を兼ね、農産物としては稻、麥、大豆、薩摩芋等あり。農夫はみな保守的氣性にして、舊套を追ひて進歩せず。従て空しく收穫を減少するの嘆あり。今、若し耕作の法を改良したらんには、今日の收穫に倍蓰すると難からざるべし。況んや八町八反畦なしと稱する廣大なる良田あるに於てをや。

牧牛の法、亦一層の改良を要す。目下見島牛として稍々稱せらるるは、能く勞働に堪へ蹄の健なるに由ると。蓋し土地の岩石よりなれる天然の影響に外ならず。

山林は風力強きため生育不充分なる上、濫伐せし故甚だ不足を告げ、甚しきは薪料を内地に求むるに至れり。要するに本島の産業は、甚だ有望なるに關せず、最も幼稚にして、しかも、改進の氣運

に乏し。故にこの點に盡力せば、沿海漁業は此の島の收益なるのみならず。進んでは國家を利する
と大なるべし。殖産に志す人士の一顧を促す所なり。

見島の舊跡と風俗

傳説によれば、文治の昔、平家壇の浦に破る、や、能登守教經逃れてこゝに匿れたり、と稱す。今
尙ほその墳墓なるもの存すれど、頓に信すべくもあらず。

下つて近世毛利氏の所屬となり、海防令出でし際、本島中、本村、高見山、觀音崎の三ヶ所に砲臺
を築きたり。高見山の砲臺、今尙ほ遺跡を存す。東南の海岸に里俗チコンボツと呼ぶ所あり、海岸
の石礫中に石を以て疊みたる横穴に類するもの數多あり今は大概破壊せられたれども其邊多く土器
の破片等を拾集すべし思ふに古き時代の墳墓ならんか。

風俗習慣の奇なるは土地の然らしむる所一々茲に擧げざるべし只近年教育の普及と共に舉島舊習を
改善し業務に精勵するに至りたるは實に喜ぶべき限りなりとす此等の點に就ては阿武郡書記厚東氏
見島小學校教員長松氏等の誘導獎勵の効其多きにありと云ふべし

從來此島は巨額の共同負債ありために全島の衰微を來したりしも今や着々救済の方法を講じつ、あ
り若し全く此苦境を脱して島民奮つて精勵せば一大富源地となること決して難からず殖産漁業に志
ある士は大に同島に囑望すべき時機なりと信す殊に此島の出身にして我中學校の生徒たる諸子よ後
年必ず自己の郷土たる見島のために大に盡すべきことを決して忘るべからず。(石津御嶺、落合兼
文増野純亮共記)

ガスタフソン先生の日本に於ける所感

十一月十六日の文藝部例會に於てガスタフソン先生が「米國より日本への航海及び日本に於ける余が所感」てふ演題の下に述べられたる所は、頗る興味あるものなりしが、其内先生の所感 (General Impressions) の部分は、自由の空氣を呼吸し、秩序ある大社會に教育せられたる先生の眼光を以て僅かに嚴重なる階級制度を脱却し、今や雜然紛亂たる過度時代にある日本の小社會を観察せられたる、一種の日本觀にして、吾人項門の一針たるべきもの少からざるを以て、特に先生に請ふて、先生草稿中の一部を左に抄譯すること、なせり。

第一、日本に於ては諸種の勞働に人力を用ゐること多く、機械若くは動物を利用すること遙かに西洋より少し。

第二、日本には廣原平野至つて少しと雖も、耕作は善く行届き居れり。

第三、日本に於ては貧富の懸隔甚しからず。極貧の者といへども、生活し得べき充分の所得あり。

第四、日本に於ては、商業上の取引及び競争、米國に於けるが如く、しかく活潑ならず。寧ろ緩慢なるの感あり。

第五、余は日本に於ける道德の標準の甚高からざるを公言して憚からず。これ特に日本人に多く見る所の暴飲博奕につきてのみいふに非ず、寧ろ一般社會の惡德につきていふなり。即ち人間獸慾

の肆行、商業上の不正實等の如し。然れども今や漸々改良の域み、婦人の位置の如きも高まりつ、あるもの、如し。

第六、日本人の性質は溫順にして親切、且好く人を遇し、交際を好み、忍耐に富む。惡意なく、執拗ならず。

第七、自然を好むも亦日本人美德の一なり。家毎に庭園を作り、或は插花を好むなど、以て見るべし。

第八、人力車、小兒を背に負ふこと、衣服、下駄、日中帽子を冠らざること、家屋、家具、靴を脱きて疊に上ること、茶菓、頭を垂れて敬體すること、敬語を多く用ゐること等悉く奇ならざるはなし。食事は至て簡單なりといへども、饗應には諸種の料理を用う。

第九、日本に於ける教育制度は甚好良なり。生徒の體格の兵式体操、擊劍柔道等によりて鍛鍊せらるゝと、素養を作るため數多の學科の課せらるゝと、其他道德に關する方法規則等亦頗る可なり。學生は一般に丁寧にして行儀正しく、快活にして事をなすに熱心なり。彼等は能く笑ふといへとも笑を装ふにあらず。教室にて失策し又は惑亂する時などは、大聲を發して笑ひ、或は頭を搔く者あり。彼等は自信力に富む、只不快に至らしめざるを要す。彼等は善良なる性質を有すること多し、然れども尙一の米國學生より學ぶべきものあり。何ぞや。勞働を卑めざることこれなり。如何なる勞働といへとも、正直なる勞働は人間の品性を傷くものに非ず。米國に於ける幾千の學生は、或は大工

となり、庭園の掃除人となり、或は皿洗となり、或は給仕人となりて、修學しつゝ、あるなり。日本學生の遊戯に感心すべきことは、倒るゝに當りても、平然として毫も叫ぶことなし。又服装一定せるを以て、其働作を劃一ならしむるを得べし。余の初めて生徒を見るや、彼等の顔何れも同様なりしが、今は各人相異の點を認め、又其性行に於ても大に一樣ならざるを悟るに至れり。

今や日本は國力充實し、一方に平和を欲すといへども、また決して戰に怯なるものに非ず。其狀恰も一匹の巨鷲一足に平和の橄欖枝を攫み、一足に一束の矢を握れる、米國旗章に類するものあり。一朝事あるに當り、日本は痛撃を支那に加ふべく、魯國といへともまた宥すとなかるべし。余は日本人を愛す。然り、余は眞の日本男子を愛するものなり。云云。(小田省吾譯)

寸 鐵 瑣 言

特別會員 頓 野 多 介

一、天高く地抵し、峨々たる山、洋々たる水、仁か智か、倏忽變幻、蒼桑極りなし。況んや人生は夢一場、遽然覺め來れば榮辱禍福、すべて茫茫、迹の覓むべきなし。浮漚の且つ消え且つ結びて、生々滅々、何の關する所ぞ。天は鳥の翔るに任じ、海は魚の躍るに縱す。吁嗟乎、樂天か厭世か、共に世態の眞相にあらざるなり。

二、天地間、至剛にして至柔なるものを、人の意志と爲す。「精神一到、何事不成」これ其至剛なる者なり。「雪山之鳥、日出則忘」これ其至柔なるもの也。而て剛柔は則ち成敗の分るゝ所。豈寒心せざるべけんや。

三、窮せざれば志立す。餘裕は人をして遊惰ならしむ。しかも窮する者、必ずしも成功を期すべからず。これ志は立て難きを患へず、之を持するの難きを患ふる所以。

四、吾人は夫れ猶象のごときか。側に人あり、督勵看守するにあらざれば則ち怠る。自ら制するの心、薄ければ也。世界に勝たんと欲するものは、先づ己に勝たざるべからず。意馬や、心猿や、其慾を逞うし、其情を肆にせんとす。能く之を箝制するものにして、始めて與に事を談すべきなり。

五、世間一切の罪惡には、必ず痛苦ありて之に伴ふ。これ善を勧め惡を懲さんが爲に、特に造化の心を致せる所なるなからんか。

六、疾驅すれば、玄冬尙ほ汗す。勤苦已まざれば、事成りて自ら裕あり。

七、獨立特行は、布衣の王侯。阿權趨利は、衣冠の豚犬。

八、望なきは生前の死なり。名を留むるは死後の生なり。

九、口に言ふて心に思はざるは、これ讒語也。心に思ふて事に行はざるは、これ妄想也。行と心と言と、三者相待て而て始めて全士と謂ふべし。

十、人に財を托せられ、自家の囊底一物なきも、尙ほ意氣軒昂、恰も富める者あるが如し。直に笑ふべきの事。而かも看來れば世間這般の事、極めて多々。

十一、望々然として爲さざる可らざるもの有るが若く、身閑にして心いよく忙、匆々空しく鳥兔を斷送し了す。青年の行路、必ず此の廻瀾に逢着す。須らく策勵一番、跳然として身を園外に脱せざる可らず。

十二、善惡必ず報あり。之を求む、故に得ず。之を求めず、而て後に自ら得。

十三、尋を望んで尺を得、尺を望んで寸を得。男兒須らく天空海闊の氣象あるを要す。

希 望

第五學年

湯 原

綱

青年の希望 青年に希望ある恰かも綠叢間に紅粉を呈する美花あるが如し。希望は青年の裝飾なり。宜しく裝飾をして華麗ならしめ、天上天下唯我獨尊の抱負あらしめよ。見よ、偉大なる人格は偉大なる希望を有す。孔孟の希望大なること巨燭の如く、皓々として宇宙の半面を輝耀し、仁義の聲は三千年後の弟子の唇頭に反覆せられつ、あり。耶釋の教理や其の光を月光と争ひ、幾億萬の愚夫凡人をして安身立命の觀念を得せしめ、快く黃泉國に行かしむるなり。嗚呼、偉人の希望や其の終局する所なく、其の光芒や果して幾世紀の後を照らすかを疑ふのみ。

將來の希望 學生にして將來の希望を告げ、その遠大の思想を吐露し得るもの果して幾何人ぞ。何ぞ青年の意氣消沈せる甚だしきや。その希望の光りの小なること豆の如く、風前の燈火將に明滅

せんとするの感あり。見ずや尊王攘夷時代の衣至附袖至腕的の學生を。その意氣は豪壯に、放言大語は口を衝て出で、燃ゆるばかりの大希望は胸に充つめり。その光は迸りて電光石火の如く、維新の大業となりて顯はれぬ。あ、彼等以前に彼等なく彼等以後に彼等なし。

己が希望 文學の神は慈愛なる御心を以て我をこの土に指導し給へりと自信せざるを得ず。あ、文學々々、文學の熱は我が胸を焦して止むときなし。あはれ之を冷すべき岩清水を谿間に一掬するを得ざるか。

讀書の希望 鷄鳴かず鴉鳴かず東天紅を呈せざるのとき、萬籟耳朶にうそぶき波浪渚汀にさわぐ海岸に至り、嗜好せる書冊を繙けば神胸爽然として紙上風發言外の趣味あり。若しそれ四隣寂然たるの秋夜、孤燈に對して所好の大著に接し、聖賢と共に語り策士と共に謀るに於てや、讀書の快實に人と共に語るべからざるものあり。

己が目的

第三學年

山 縣

恭 輔

軍人となりて國家の干城に供せんか實業家となりて財政を豊富ならしめんか將た政事家となりて民心を善良ならしめんか吾人未だ定りたる目的あらず然れども吾一の抱負なくんばあらず

余は人生を單に五十年と信ず吾等此短時期に於て如何なる進路を取るべきか只目前の行掛りに制せ

られて何の希望もなく感情に驅られて何の理想もなく區々たる衣食に全生涯を献じ汲々として世俗に壓抑せられて生を終るべきか曰く然らず假令吾人は斯の如くにして死するも社會は長へに死せず然らば現時の社會が世人の言ふ如く腐敗したりとせば如何に腐敗するも吾人は至誠を以て之が腐敗を防ぎ其進加を輔くる大責任あり此責任を果すに當りては苦痛何かあらん貧賤敢て辭せじ

現時我が國は空吹く風も枝を鳴さず寄する波も鳥影を騒がさず上下相和し君民相鼓舞して四海靜謐なり然れども眼を放て全世界の形勢を見るに今や東方問題消え去り歐米強國手を亞細亞に伸ばし所謂絶東問題と化し來る東方問題は如何になり行くも尙袖手傍觀すべし絶東問題に至りては主人公は即ち東洋の支那帝國而して我が國は其隣國なれば所謂唇破れば何ぞ齒全きを得んや終に我が國に波動の及ぶや必せり故に我が國の將來は多忙なり多事なり而して是等の衝に當るものは實に將來の人物即ち現時の青年なり嗚呼青年なるかな青年なるかな今の青年は我邦の安危東洋の治亂を兩肩に荷ふ我等青年の任務重且つ大ならずや故に我等青年は今より精神を鞏固にし己が目的を定めざるべからず

若し一旦此事件破裂せんか駿馬を鞭ち利劍を揮ひ叱咤咆哮三軍を指揮して或は堅城を攻撃し或は壘砦を陥れ又は艦艦鬪艦列を正して舳艫相衝み敵艦を馳騁して走路を失はしめ或は敵艦を砲撃して海底の藻屑とし海陸相應じて敵軍を破り我が國をして泰山の安きに置き敵をして城下の誓をなさしめんと欲するも我の抱負なり

斯の如く一旦緩急ありとせんか然れば現時軍備の擴張財政の豊富を謀らざるべからずこは一に殖産工業の繁榮通商貿易の盛昌に依るべし又人生最も必要なるものは衣食住の三なり此三者は上は王侯より下は萬民に至るまで一日も缺くべからざるものなり斯くも貴重の資料を生む根源を問へば是皆實業家の致す所なり故に己實業家となりて文明國と云ひ開化國と稱せらる、泰西諸國より彼の長を輸入して我の短を補ひ殖産の旺盛を圖り美術技藝の發達を促がし漸次舊態を變更し以て面目を改むべし凡そ始めは善しとせられし物も次ぎのもの、製出せらる、に至りては遂に悪きを感せらる、は天下の常態なれば今迄歐米諸國人が發明せし器械よりも善良なるものを發明して獨り其利を占め以て一個出色の文明開化を東洋に掲げ燦然たる光輝を放たしめんも我の抱負なり

而して國家の盛昌繁榮を策せんと欲せば天下の人心を正しうして善政を布き大に天下の耳目を洗淨せざるべからず之をなさんと欲せば己政事家となるに如くはなしされば吾他日議會の一方に割據して能辯滔滔として懸河の如く辯論し一世の風潮を排して群小政事を壓倒し滿腸の經綸橫縦の策を吐きて輸贏を争ひ平生の主義を貫徹して天下に利澤を施し以て我國を文明の境に置かんも我の抱負なり

斯の如くにして内治外交宜しきに適ひ文學技藝は益發達し武備は愈完全強盛を極め邦家開明の基礎初めて茲に成り立つべし是れ即ち吾の一大目的なり

然れども人生には限りあり而して功名心は限りなし限なき功名心を滿すに限りある人生を以てせん

とす實に成し能はざるなり故に我は三者を兼ねる能はず故に一を撰ばざるべからず
古人曰く人各己の天稟を省察し己に適する事業を勤めざるべからずと而して吾は己の天性の何に適
ひ居るやを知らず故に目的ありて目的に惑ふ

然れども人此世に生れ且生活する間は君父に對して社會に對して義務あるは論を俟たず故に我は之
を盡すに躊躇するものにはあらず

夜色方に沈々萬籟閑として聲なきの時燈火書を繙き志立たざれば天下成る可きの事なし百工技藝と
雖未だ志に基かざるものあらず志立たざれば恰も舵無きの船衝無きの馬の如し漂蕩奔逸何の底る所
あらんやと云ふに至りて大に悟る所あり前三者其種類こそ違へ歸する所は 天皇陛下のため國家の
ために働くにあり且嗜好は天性と云へり而して余は軍人を好み軍人軍人余の天稟は軍人にあり我
軍人となりて國家を護り 陛下の大御稜を海外に示し以て 陛下の御恩徳に報いんとす我天稟我目
的曉り得て胸間爽かなるを覺ゆ時に天は靜かに地は眠り草に鳴く虫さへ音を絶て只聞くものは隣家
の犬の物音に驚きて高く吠ゆると蚊軍の一隊我が決心を試みんとにや我を襲ふ叫喊の聲あるのみ

瀛車旅行

特別會員 宮澤精一郎

私は、此の間の暑中休暇を幸として、九州より中國、畿内、東海、東山あたりを旅行いたしました
から、一寸其の概略を述べやうと思ひます。さて萩を出立しましたのは、七月二十四日の午後六時
で、萬歳丸に乗つて海路無事に翌二十五日午前七時、門司に着し、それより瀛車で博多に赴きまし
た。

福岡市は黒田侯の舊城地で、博多、福岡の二つの町から成りまして、那珂河を隔て、此の二つの
町は相對して居ります。人口は殆んど七萬ほどで、九州では熊本と相並んで、商業繁盛の都會で、
博多灣を抱て、其の兩端に東西の二公園があります。東公園は我が國三松原の一なる千代の松原に
連つて、此のあたりは元寇襲來の多々良濱であります。東公園には元寇紀念碑日蓮上人の銅像
などが建設せらるゝ、そうで、今工事を急で居ります。

福岡に數日滞在しましたが、其の間に、箱崎宮と、香椎宮とを參拜しました。箱崎宮は博多の手前
の箱崎停車場のすぐ後の森の中に鎮座しまして、官幣中社で、應神天皇、神功皇后、玉依姫命を
祀ります。社は宏大で、神門の上には、彼の延喜の聖帝の物されしといふ、敵國降伏の四大字を彫
つた額が今に掲げてあります。此は東公園から町つゞきであります。前の方は博多灣を控へて、
表鳥居のあたりは風景が甚だよろしい。香椎宮は箱崎の手前の香椎停車場の前方、十數町入り込ん
だ處に鎮座して、博多からは三里とか申します。宮はさほど大きくはありませんが、官幣大社で、
神功皇后、應神天皇、表筒男命、中筒男命、底筒男神を祀り、歴代の天皇崇敬からざる社で、熊
襲征伐の時、仲哀天皇と神功皇后とが軍議をこらししといふ香椎宮の舊跡は、社の後方の山上だと

申します。

七月二十九日に、博多を出發して太宰府に行きました。太宰府は二十日市といふ停車場から一里餘で、途中に菅公の居られたといふ、榎寺の古趾があります。官幣中社太宰府神社は實に公を祀た社で、我が國の天滿宮の大元でありますから、境内も廣く、殊に社殿は此の度、新築せられたから、此の上もなく立派で、此の度私の參拜した神社の中では、最も壯麗の社でした。觀世音寺はそれから十數町隔りたる處で、彼の菅公の都府樓纒看瓦色、觀音寺只聽鐘聲といはれたのは、此の寺です。此には天智帝の時築かれた水城の樋といふ者があります。其の眞偽は知れませんが、幅五尺、長さ二間ほどの者が二面ありますが、此の二枚を合せた者らしく思はれました。水城は博多から二十日市に行く途中で、瀛車の中より見えますが、太宰府を圍める兩山脈を連ねた丘陵のやうの者が、あまり大きくはありません。都府樓の遺趾は觀音寺から五町ばかりはなれた一段高い處で、今は大概水田となつてしまつて、石碑と數十の礎石とが存してありますが、其の礎石の面は、中央に圓形の座を設けて、四五寸ばかり突起して、柱が其の上を被ふといふやうな都合らしく見えます。之を見ても、古代の建築法と、今日のとが異なつて居る事が知れます。此には當時の瓦片が出ますが、此の頃樓屋に用ひた瓦は外國より渡來した者で、色は淡黒で、質硬く、布の目のやうな者が附て居ますから、布目瓦といつて、今日用ひて居るのは大きに違つてます。太宰府廳の趾は其の南の方にあるのです。二十日市のすぐ近くに、武藏の温泉がありまして有名です。

七月三十日は久留米市を一覽しました此は元、有馬侯の舊城市で、其の城趾は今猶市の北にあります。して、篠山神社といふ有馬氏の祖先の靈が祀てあります。水天宮は縣社で、安徳天皇、建禮門院、平中宮二位時子を祀つて、東京日本橋區蠣殼町の有馬家邸内にある水天宮は、此から分社したのだと云ひます。社は筑後河に沿うて居て、景色はよろしいが、名の高き程立派ではありません。梅林寺には有馬氏累代の墳墓があります。寛政三偉人の一なる高山彦九郎の墓は、遍照院といふ極粗末の寺の境内にあります。墓は中々立派で、明善校の職員生徒で建てたのだと申しますが、誠に感心な事です。彦九郎は御承知の通り、上野國、新田郡、細谷村の人で、大に忠孝の大義を鼓吹し、皇室の爲めに、大に畫策するところがあつたらしくありましたが、惜しい事には九州を漫遊せし時、其の事の成らざるを知つて、久留米の森嘉膳の家で、屠腹して死んだのです。然るに明治の大御代になりました、朝廷は其の忠烈を追賞せられ正四位を贈られたのは、誠に有り難い次第で、彦九郎は永く地下に感泣するであります。

久留米から瀛車で、八代在の鏡といふ所に直行して、此に數日間滞在して、八月二日に熊本を見物しました。熊本は始め加藤清正の城地でしたが、其の子忠廣の時に、加藤氏は改易せられて、後は細川氏の城邑となりました。其の熊本城は市の中央にあります、さすが築城治水に精しかつた清正だけあつて、堀などは自然の溪で深さは數十間もあり、其の中には大木が生茂つて、恐ろしいやうであります。城樓は西南の役に、賊軍が花岡山から砲撃した爲め、悉く焼けてしまつて、今日で

は只矢の倉といふ樓が残つて居るのみで、中には兵營があります。本妙寺は清正の遺骸を葬つた寺で、立派な廟かありまして、其の前には數十人の法華宗の信徒が、一心になつて御題目を唱へて居ますが、誠に人をして氣持をわるくさせます。維新以後、神佛混淆の禁が出で、から、熊本城の北門外に錦山神社といつて、清正は祭られ居ります。水前寺は郊外十數町の處にありまして、また成趣園ともいひ、一の庭園で、水が清冽であるのが有名です。細川侯の祖先を祀つた、出水神社が其の側にあります。

八月三日に熊本を出發して、博多の方へ戻りました。途中木葉で下車して、西南の役の際の激戦地たる田原坂に行きました。此の坂は木葉から植木の方へ行く途中の坂で、木葉からは半里程であまり險阻ではありません。抜刀隊の功も、實に此の坂に於て立てられたばかりでなく、此が一度破れて、賊軍が全く屏息し、日ならずして、熊本の重圍が全く解けるやうになつたのです。坂の頂上には、人家が十數戸あります。此の間まで彈丸で蜂の巢のやうになつた、紀念の土藏があつたそうですが、二年ほど前にこわしてしまつて、惜しい事に今はありません。只紀念碑が松林中に残つて、松風が其の上の事を語るやうの感じがいたしました。木葉停車場の前方の丘陵には、此の役に戦死した將校、下士卒の墳墓が、一様の形で列をなしてあります。其の中に伍長谷村計介の墓もあります。それから大牟田の炭坑に行きまして、參觀を請ひましたが、知人は水戸中學の生徒の案内に行かれ、面會することを得ず、かたかた汽車の都合もありまして、遺憾なからすぐに福岡まで歸りました。

此の度の旅行には、充分各地の商工業の事をも視察する考でしたが、自分かその方の眼識が無いのと、都合上より觀察することが出来んで、徒に名所古蹟を探つたばかりであつたのは、大に耻入る次第で、且誠に残念でありました。

八月五日に宇佐に行きました。和氣清麿の故事で有名な官幣大社宇佐神宮は、宇佐停車場から二里ばかりありまして、御承知の通り應仁天皇、神功皇后、比賣大神を祭り、天下有數の大社で、朝廷の尊崇は殊に厚くあります。一山皆境内で、樹木が生茂つて晝なほ暗しといふ位で、何となく神々しく思はれました。參拜を終へまして、中津まで引返して宿りました。中津は奥平氏の舊城地で、明治の初年泰西文明の輸入者たる福澤諭吉先生は、此の地の出身です。翌六日耶馬溪の勝を探りました。耶馬溪は中津から二里強もありまして、山國川の沿岸及び水流中の岩石の奇を稱するのです。我が國の大文豪なる頼山陽も、此には筆を措いて嘆賞したそうですが、斯る景色は何處にもあると思ひます。只此特色は、範圍の極めて廣い事です。なほ此の奥數里の間は、危巖峭壁で充されて居るといふ事です。之か天下に勝れて居るので、天下第一と云はれるのかと思はれます。私は耶馬溪を渡つて、羅漢寺まで行きましたが、此の寺は岩石より成れる山腹にあつて、岩を負うて造られ、下から望むと恰も山水の畫を見る心持がします。耶馬溪の岩石は、總て火成岩で、小石のやうな、凹凸が甚だ多くつて、丁度蝦蟇の背の様です。耶馬溪の景を見るのは、山國川の對岸かよろしいそうです。そうでないと、自身も亦畫中の人物となりまして、其のよろしい處は見られません。見終

て中津に歸り、直に瀛車で、門司まで直行し、關門海峽を渡つて、午后五時頃馬關に着しました。馬關では急いで安徳天皇を祭れる官幣中社赤間宮、安徳天皇御陵壇浦で討死した平知盛を始とせる、七盛の墓龜山社などを参拜して、日清媾和談判のあつた春帆樓、清國媾和使李鴻章等の旅館であつた引接寺などを見物して、夕七時發の上り列車で、京都の方へ向ひました。

八月七日の午前に岡山に着しました。岡山市は舊池田氏三十万石の城下で、交通は極めて便利で、市街繁盛、山陽道中廣島市と伯仲する大都會です。其の後樂園は市の東隅、岡山城の北に在つて、日本三公園の一です。そうして旭川の清流に臨んで、竹林が其の四方を圍んで居ます。此の庭園は明治の初年までは、舊藩主の庭園であつたのを、今は四民遊覽の地となつたのです。園内には色々の勝地があつて、此處、彼處に東屋などがありますが、此の庭の特色は、梅は梅、櫻は櫻、紅葉は紅葉、松は松といふ様に、樹木を植ゑるのに、夫々一區劃をなして居ります。園内より舊城の天主閣を望見するなどは、甚だよい眺望で、日光でもあつた時などは、得もいはれぬ眺めたと思はれました。山陽道の名所の見物は、馬關と岡山だけで、其の外は歸り途に寄るとして、此の日の午後京都につきました。京都は昨年も滞在し、本年も十數日居りまして、處々見物もしましたが、之は中村先生から御話があらうと思ひますから、やめまして、其の後の事を御話申さう。

八月十二日に、男山八幡宮に詣でました。社は山にあつて、或は石清水八宮ともいひ、官幣大社で、社殿は壯麗であります。神殿の雨樋は、黄金で造られて、長さ十三間、幅一尺五寸、厚さ一寸三分あるといひますが、多分減金でせう。宮司に就いて、いろいろ寶物などを拜觀して、宇治へ行きました。平等院は宇治橋の南二町ばかりの處にあつて、始めは河原左大臣源融の別荘であつたのを、藤原頼通の時寺としたので、宗旨は天台宗だと云ひます。有名鳳凰堂は現存して、屋上には高さ三尺ばかりの銅製雌雄の鳳凰が附いて居て、風に順つて舞ふやうになつて居ます。堂の形も亦鳳凰の羽翼を張るさまに似せて、左右四間ばかり隔て、二閣を作つて、中間に廊下を通してあります。先年本邦より北米シカゴ博覽會に出陳したのは、此の堂の模形だと申します。境内にある扇の芝といふ處は源三位頼政の自殺した地だと傳へ云ひます。

八月十五日に京都を出發して、奈良に行きました。奈良町は古の奈良の帝都の一部分で、今に昔の條坊の名を存して居ります。御承知の通り、此は神社、佛閣、名所、舊蹟の多い處でありますから、倒底一日位に見盡す譯には行きませんが、私の見たのは、眞に其の一部分たる有名の者のみです。春日神社は官幣大社で、武甕槌神、經津主神、天兒屋根命、比賣神を祭つて、時めける藤原氏の氏神ですから、古から随分崇敬のあつた神社で、今に参詣人が甚だ多いのです。従て神殿の壯麗なるはいふまでもなく、此の社は、古來燈籠の多いので有名ですが、或人の計算したところを聞くのに、金屬製の者九百八十八、石造の者一千七百七十九基あるといひます。社の附近には神鹿が多く居て、人に向つて頭をさげて物を乞ふなどは、無情の吾々もふり捨て、只行き過ぐる事が出来ませんでした。春日神社の上方に聳えて居るのが春日山で、樹木は蒼鬱として繁つて、壯嚴犯すべか

らざる風があります。三笠山は其の一つの峰です。若草山は之に連つて居る小丘で満山悉く短草で、恰も青い毛氈を敷いた様で、何となく親しく、なつかしい氣がします。奈良には、元來一月堂から十二月堂までありまして、元其の月に相當する堂で、月々祈禱したのだといふが、今日殘存して居るのは、二月堂と三月堂とです。二月堂は崖によつて造られ、丁度京都の清水堂の觀があります。東大寺は南都七大寺の一つで、聖武天皇の神龜五年、勅願によつて造られた巨刹で、華嚴宗の總本山で、元、我が國の總國分寺であつたのです。有名な大佛は當寺の本尊で、其の入れてある殿舎の高さ十五丈六尺、東西二十九丈で、南北十七丈あるといひます。佛は盧舍那佛の座形で、長け五丈三尺五寸あつて、天平十五年より八度改鑄して、漸く同十八年に出來上つたのです。此の鑄造のために消費した金品は、非常に多額な者ですが、今は煩しいから別に申しません。之を見ても、當時如何に鑄造術が進歩して居つたかといふことが知れます。此の割合で進歩したら、今日はどれほど發達したか知れんのに、今日出來る銅像などを見ると、夫々有名な人たちが造るのでせうが、誠になさけない有様です。此の銅造は、度々火災に罹つて頭が溶けましたが、今日に存するのは、元祿年間に鑄たのだそうです。大佛殿の後手に正倉院があります。此の倉は校倉で、孝謙天皇が御父聖武天皇の御物を供養のために、東大寺へ獻納せられた者で、古から勅封であつたが、今は益嚴重に保護せらる、事となりました。此の倉の内に納めてある服飾、器具の類は、皆歴史、美術、工藝上の參考となるべき貴重な者で、此の倉は建築以來、今に一千百餘年でありますが、一度も天災に遇

はないのは、實に國家の幸福といふべきです。興福寺はもと山城國にあつて、山階寺といひましたが、後に此に移したのです。法相宗で、これも南都七大寺の一つです。何しろ藤原氏の氏寺ですから、昔は堂宇壯麗であつたが、度々火災にかつて、今日現存する堂宇は、南圓堂、北圓堂、東金堂、五重塔位に過ぎません。此の中、南圓堂は最も著名の者で、弘仁年中藤原冬嗣が北家の衰ふるのを嘆いて、父内鷹の志を繼いで、建立した者で、八角の寶形造です。五重塔は境内の南の端に聳えて、應永年間の造立で、猿澤池に臨んで居て、其の高さ十五丈一尺方四間五尺二寸ほどあつて、南圓堂と共に奈良市街の一壯觀をなして居ます。猿澤池は此の塔の下にあつて、周回百八十六間で、池中には鯉が多いさうです。一体奈良の地は、總て一公園ともいふべき地です。奈良博物館は帝國三博物館の一で、奈良平安朝時代の美術品を陳列して縦覽させます。其の中でも、佛像、彫刻物、織物などには、殊に勝れて居る者が多いやうに見受けられました。奈良の名産は筆、墨、根來塗、霞酒、奈良漬、團扇、奈良扇、奈良酒などで、到る處の商店で賣て居て、遊覽人などが土産として買つて行きます。

八月十六日に關西鐵道で、笠置山の下を通つて、元弘の昔を追懷しながら、伊勢の方に出立して、津に數日滞在しました。津は一名阿濃津と申しまして、伊勢國の中央で、東は阿漕浦に臨み、岩田川は其の中央を横ぎりて流れ、參宮街道に當るから、市中は極めて繁盛で、家並の一樣に揃つて居る事などは、此の度見た市街中で、第一かと思はれました。人口は三万余で、もと藤堂氏の城地でし

た。阿漕浦は津市の東の海岸一帯をいふので、白沙青松の景など得も云はれませんが、阿漕塚には、芭蕉の「月の夜やなにを阿古木に啼く千鳥。」といふ句が、彫つてあります。此は例の平治云々といふ處ですが、元より俗説で、取るに足りません。別格官幣結城神社は、阿漕塚から四五丁の處にあつて、結城宗廣、及び、其の子親光等を合祀してあります。結城氏の事は能く人の知る所で、宗廣は北畠親房等と、義良親王を奉じて、陸奥に下向の際、颶風に遇つて、此の地に吹き附けられ、遂に此に歿したといひ傳へられて、今に藤堂家の建てた結城神君之墓と彫つた墓があります。一説には、宇治の光明寺にある墓が正しくつて、宗廣は彼の地に死せりともいひ、學者の説が紛々として一定しません。此の海で環海流の水泳の試験を見ましたが、五十人ほど泳ぎてがあつて、教師は船の上に居て、船には旗を建て、大鼓をうち、威勢を附け、泳ぎては聲を張上げて、叫びながら泳ぐなど、一風あります。此の流義は速に泳ぐより、永く繼續するのを本旨とするさうで、伊勢附近の中學の學生などは、暑中休暇を利用して、練習に行く者が多いさうです。一日、三重縣第一中學校を參觀に行きましたが、此の學校は講堂、理化學教室、同器械藥品室、生理博物教室、同標本室などの完備整頓して居る割合に、校舎、寄宿舎の不潔なる事です。教室内、廊下などは、樂書で充たされ、それがために壁の塗り換へ中でした。此の様な始末ですから、之と申して御話いたすほどの事はありません。此の點に就ては、我が校生徒諸君の御一考を煩はしいのです。

八月十九日參宮鐵道に乗つて、内外宮を參拜に行きました。山田に結城宗廣の墓を拜しました。墓

は停車場の近くの商家の後に在つて、小さき五輪石塔が三つ四つ立て居ました。豊受太神宮は、それから五町ほどの處に鎮坐まじりて、境内は平地ですが、森林鬱蒼として聳え、本社は豊受太神を祭り瓊々杵尊、天兒屋根命、天太玉命を合せ祀てあります。それから一里ほど行くと、宇治に出ます。此の途の兩側は、商店櫛比といふさまで、參詣人に向つて、土産を買ふ事を勧むるのは、一寸氣持をわるくさせます。皇太神宮は宇治町の南端で、五十鈴川の清流、其の側を流れて、其の上に乗せる宇治橋を渡ると、直ぐに神域で、古杉、老檜鬱鬱として天を衝き、彼の西行法師の「何事のおはしますかは知らねども有難なさに涙こぼる、」といはれたる如く、人をして自から襟を正さしめます。實に我が國の宗廟とも申すべきで、天照太神を祭り、天手力雄命、萬豊秋津師姫を合せ祀ります。歴代の天皇御崇敬あらせらる、は、固より臣民として御神徳を仰がぬ者はありません。内外兩宮共に御神殿は極めて質素で、別に丹壁を加へません。内宮で神樂を陪観しましたが、誠に優美で、儘存してあります。兩宮共に末社は甚多くあります。内宮で神樂を陪観しましたが、誠に優美で、大和で天人が天くだつて衣の袖を五度かへしたとかいふのが、五節の舞の始めだと申しますが、其の天人の羽衣をかへしたのも、かくやと思はれました。舞姫は皆十五歳以下の容貌秀麗の少女を採るのだといひます。二見浦は宇治から一里あまりで、其の海岸數間を隔てたる處に、彼の著名なる二つ岩があります。此の二つの岩は、相距ること三間ばかりで、岩の色は蒼黒色で、木理紋をなして居ます、多分水成岩でせう大なる方は高さ二丈九尺、少なる者は高さ一丈二尺位で、其の狀は關

門をなすがやうで常に注連を張つてあります。其の近くにはいろ／＼の狀の岩石が起伏して、配置自ら宜しきを得て、遠くは尾張、參河の諸山を雲烟模糊の間に望み。風光明媚、巧に之を形容することが出来ません。まして旭日の昇天する景色などは、申分ない事と思ひます。此に徴古館といふのがありまして、古器物、其の他書畫などを備へ、縦覽に供しますが、考古上或は歴史上に參考になるべき者が非常に多くあります。

八月二十日山田を出發して、松坂に下車して本居宣長先生の墓を參詣しました。先生は實に此の地に生れ、墓は松坂より一里あまりの山室村の字高峰の丘の上にあつて、樹木が繁茂して四面を蔽ひ、境は最も幽邃で、此に大國學者たる先生は眠つて、居るのです。塚の上に塔石があつて、本居宣長之奥墓と彫つてありますが、之は先生の自筆です。又其の左側に、平田篤胤の碑があつて「なきがらは何處の土となりぬともたまは翁のもとにゆかなん」といふ一首の歌が刻つてあります。宣長篤胤二大人を祀れる社は、松坂にあるといふ事です。

松坂から名古屋まで直行して、名古屋に着いたのは、夜の九時過ぎでしたから、翌八日市中を一覽しました。名古屋は兩京の間にある繁盛の都會なので、人が中京などと申します。人口は二十万ほど、尾張侯の舊城市でありました、此では兩本願寺別院、春陽館といふ料理屋の座敷、庭園及び大須觀音などが有名ですが、評判ほどではなく、唯名古屋城ばかりは、巍々として東海に聳ゆるとでも申しませうか、實に天下無比の名城で、徳川家康が其の子義直の爲めに、天下の諸侯に命じて

築城したのです。さて此に注意せねばならぬ事は、天下の諸侯伯にかゝる御用を命じ、金品を出させたのは、徳川氏の一の政策で、徳川氏が三百年の泰平を謳歌する事が出来た一原因です。されば日光廟の壯麗、久能東照宮、寛永寺、増上寺の美觀は、諸大名の血税より成りし者です。かく時々事件に應じ諸侯に御用を命じ、諸大名をして蓄財せしめず、以て事を起す事の出来ぬ様にしたのは、さすが家康の慧眼です。それはさて置き、名古屋城の五層の天主閣は、加藤清正の所望で、其の一手で造築したので、巍々として雲表に聳え、殊に閣上一雙の金鯰は、此の城の美名を添ふる所以で、高さ八尺五寸、胴の周圍七尺三寸ほどあつて、實に黄金一千九百四十枚を熔して、鑄造した者たといひます。嘗て澳國博覽會に出品して、芳名を全世界に轟しました。此の日直に名古屋を出發して静岡に向つて途に官幣大社熱田神宮を拜しました。熱田は名古屋から一里半程で、神宮は熱田停車場の前方、四五町密林鬱鬱たる間で、社域は極めて廣濶で、八方に華表、諸門を設け、また境内に入らぬ内に、既に神威の高きを知ります。祭神は五座で日本武尊、天照太神、素盞鳴尊、宮簀姫、及、建稻種命を祭つてあります。

静岡は人口四万余で、中世頃は此に國府あつた故、府中又は駿府といつて、明治維新以後、今の名に改めたので、東海道中屈指の都會です。賤機山は静岡市に接し、古、青葉ヶ岡といつて、山頂に今川義元の居つた古城趾があります。此の山麓に淺間神社がありまして、官幣中社です。貝原益軒が或時此の社の構造を稱して、日本神社の華麗なる、唯日光東照宮及び本社之二あるのみと、いは

れましたが、亦決して譽め過ぎた言ではありません。境内は静岡公園になつて居ります。賤機山の東北十町ほどの處に、臨濟寺といふ寺があります。禪宗臨濟派の總本山で、天文年間、今川義元の創建したので、伽藍は宏壯です。徳川家康幼年の頃、今川義元の處に人質であつた時、此の寺に寓し、漢學を學びました室だといつて、書院の隅に、四疊半の小座敷があります。又此の寺には、古書畫、古器物などが多くあつて、人の縦覽に供します。堂の後に今川氏輝中村一氏の墓があります。又此から二町ばかりの處に今川義元の首塚がありますが、之は桶狭間の役に、義元敗死せし時、侍臣某其の首を携へ、此の地に遁れ來つ、賤機山城に入らうとして得ず此に葬つたといひ傳へます。塚は高さ四尺ばかりで、今は其の圍りに方一間ほどの小堂を建て、裡に今川氏の位牌があります。静岡に滞在中、八月二十四日、久能山から興津の方まで出掛けました。一躰、今回の旅行は、大概草鞋旅行のつもりで、其の用意までもして出かけたのですが、實際草鞋を穿いたのは、此の日の旅行だけで、誠に御耻しい次第です。又此の度の旅行中、大失敗をして、苦しい目を見たのも此の時でしたが、そんな事は省きませう。久能山は静岡から二里半ほどで山上に別格官幣東照宮があります。元和三年に徳川家康の遺骸を此の山上に葬り、墓前に一祠を建てましたが、遺骸を日光に移した後も、祠を東照宮といつて、今日に至りました。絶壁にある石階を登る事、十七曲始めて社門に達して、後數町上つて、社の前に至ります。社殿は日光の如く壯麗ではないが、金碧煌々といふ位なのです。寶庫には寶物が多いさうですが、其の中徳川各將軍の着用した甲冑は見る事が出來ます。

其の末代ほど甲冑が追々花々しくなつて居るが、之は儘に人士が文弱に流れ、奢侈に耽り柔弱になつた事を現はして居るかと思はれます。山上の眺望は亦頗る絶佳で、東北に富嶽、田子浦を望み、清見潟、三保松原は眼の下に在つて、伊豆、相模の青山、外洋の白波など一として畫圖の好紛本でない者はありません。龍華寺は久能山から一里餘、清水港より十餘町の處で、寺域は廣く、庭前に大蘇鐵、霸王樹があつて、此も亦山海の眺望大に佳で、久能山と同様です。三保の松原は眼下になつて、一帶の長洲が突出して、其の尖きが、三つまたになり、所謂三穂をなし、白沙青松と連る一里ばかりで、遠く之を望むと、恰も一叢の松林が海上に泛んで居るやうで、世間に羽衣の松云々といふ故事のあるのは此です。私も行かうと思ひましたが、便船の都合で行きませんでした。それから江尻町を通して、興津町に行きました。此は静岡から四里ほどで、清水港からは一里半程でした。有名の清見寺は東海鐵道線路の傍にあつて、禪宗です。寺は先年一部分焼失したとかで、あまり大きくはないが、古書畫、古器物が多くあつて縦覽に供します。此は古、清見關の關趾で、當時用ひました、突棒、差股、鍬の三具は、猶秘藏してあります。境内からは、眼下に三保の松原を眺め、富士、愛鷹、龍爪、久能の山々を望み、其の風景は畫圖も及ばぬ位です。總て此の邊一帶の海岸は東海道中最もよい景色で、夏期には、海水浴客が多く、東京あたりより來る者が多い様子です。此の日は此まで、やめて、静岡まで歸りました。

實は此の度の旅行は、なほ進んで伊豆半島を經廻つて、箱根の古道を踏んで歸る考でしたが、追々

日子も少く、旅費も残り少く、甚だ心淋しくなりましたから、今歳は此迄で中止して、名残多くも、八月二十五日、岐阜に向け出立しました。

岐阜には御承知の持田先生が居られましたから、先生の家に厄介になつて、處々方々を見物しました。岐阜は人口四万ほごで、織田信長も嘗て此に居城した事もあります。稻葉山は又金華山といつて、市の東に聳え、信長の城趾があります。長良川は市の西北を流れ、有名の鵜飼の本場で、養老瀑布と共に、美濃の二奇観で、此を通る者は、皆見物します。鵜飼船は、總体で十二艘あつて、鵜を使ふ者は一人で十二羽使ふといひます。鵜は一年中、生魚を與へて飼養するとかで、ふだん飼育するのが困難なので、近頃は少しく衰微の方だといひます。之を見物する遊覧船は、凡百艘もあつて、皆屋形船で一晩いくらいといふ賃錢で貸すのです。鵜を使つて鮎を取らせるには、暗夜でなければいけないのでありますが、私の行きました頃は、丁度月夜でしたから、つひ見ませんでした。長良橋を渡つて長良村字福光に行くに崇福寺といふ禪寺があります。此の寺に織田信長信忠の墓及び信長の靈廟があります。此の寺の本堂の天井の板は、元、岐阜城の廊下の板で、關ヶ原の役岐阜城東軍の爲めに陥りし時、勇士の奮戦せし折の血痕が附着して居るので、紀念の爲め、此の寺に寄附したのを天井にしたのださうで、血天井といつて、今に血痕が現存して、見る人をして思はず、身の毛をよだてさせます。岐阜には有名な名和昆虫研究所といふのがありまして、名和某といふ篤志家が、昆虫を研究して、今日まで、各地から講習に來る人が多いさうで、標本や材料などよく集めてあり

ます。之も岐阜では必見るべき一つです。

八月二十八日瀛車で岐阜から京都に向つて馬場で下りて、大津附近の名所を探りました。所謂近江八景といふ者は、琵琶湖の四邊に散在して、到底一日位で、一寸見るやうな事は出来ません。木曾義仲の墓は、義仲寺といふ小寺にありまして、旭將軍の末路は此です。義仲の墓に並んで俳諧で有名な松尾芭蕉の塚があります。芭蕉は大坂で病死したのですが、其遺言で、弟子の板本其角等が此に葬つて、塚を立て、「木曾殿と背中合せの寒さかな。」といふ句が刻つてあります。又それに並んで、「旅に病んで夢は枯野をかけたまはる。」と句が刻つた石碑があります。三井寺は、又、園城寺ともいつて、天台宗です。昔は大寺でしたが、今は大に衰微した様に考へられます。石階を上りますと、前に琵琶湖を望み、八景中一番景色がよいさうです。疏水の本源は三井寺の直下の處で、此から京都の方へ水が流れて行くのです。三井寺には、辨慶の叡山に引上げしといふ釣鐘とか、或は辨慶の汁鍋などいふ者がありますが、眞似は知れません。それで、此の日の夕方に京都に着きました。京都にまた數日滞在して、近郊を巡覽しまして、愈九月三日に萩の方へ歸りました。途中神戸で湊川神社を拜しましたが、社は停車場の直く前の方で境内は商店に接して、俗塵に被はれ、神威を贖すかの如く感ぜられました。徳川光國の建てたと云ふ碑は、表門を入りて、右の方にあつて、高さ臺石共に、凡、十尺ほごで、碑の面に嗚呼忠臣楠子之墓の八字を刻み、裏面には明人朱舜水の撰文が彫つてあります。湊川は神戸と兵庫との間を流る、河で、常には水は少しもありません。兵庫に

平相國清盛の塔があります。十三層の石塔婆で、高二十六尺臺石は方五尺位です。月島寺には清盛の寵姫王姫女の墓があります。此の地は清盛の築いた經島です。

須磨に着いた時は、此の日の夕方で、直ぐに須磨寺に行きました。此の寺には、平家の若武者敦盛に縁りの寶物があるといひますが、餘り遅かつた爲め、見る事が出来ませんでした。又一の谷鐵拐ヶ峯なども聞かつた故、よく探りませんでした。安德帝の内裏の趾は、一の谷の上の丘陵にあるといひます。敦盛の塚は、一の谷の西、街道の傍にあります。こちより瀛車で行くと、須磨停車場に入る少し手前の、左の方の松林の中を、注意して視ると見る事が出来ます。墓は五輪の石塔で、高さ一丈一尺、臺石は方四尺ばかりで、一層毎に梵字が彫つてあります。私の行きました時は眞暗で漸く提灯の火で見ましたが、その頃でも、線香を焚て居る人がありました。敦盛蕎麥といつて有名の蕎麥屋が其の方にありますが、其の時は最早戸を閉ちて居りました。

元來、須磨、明石、舞子などの海岸は、前に淡路島を控へ、日中なら誠によい景色ですが、夜中で闇でしたから其の絶景を賞する事も出来ず、車中で寝たり、覺めたりして、翌四日宮崎驛に着し、直ぐに瀛船で嚴島に行きました。嚴島神社は國幣中社で、市杵嶋姫、田心姫、湍津姫を祭り國幣立尊、天照太神、素盞鳴尊を合祀てあります。此の社は平清盛の非常に崇敬した社で、拜殿の左右にある回廊の長さは百四十八間で、其の間には、有名な畫家が書いた額が甚だ多く掛けてあります。満潮になりますと、社殿、廊廓の下は、皆水になつて、丁度浮んで居るやうで、極めて美觀です。

されば、日本三景といふのも、無理ではありません。社の後の方に寶物を見せる處がありますが、此には色々参考になる者が多くあります。其の前を通つて行くと、紅葉谷に出ます。紅葉谷は御手洗川の溪流に臨んで、楓と櫻の木が多く、幽邃の地ですが、料理屋などが多くつて、俗了して居ます。千疊閣は豊臣秀吉の建設だといつて、頗る廣大の者ですが、何に用ひました者ですか知れませんが。

宮嶋から又乗車して岩國に来て、錦帶橋を見ました。此の橋は又算盤橋ともいつて、錦川に架けてある故錦帶橋といふのです。此の橋は我が國、架橋工事中最も構造の奇であるのと、堅牢であるのとで有名で、日本建築法の好模範です。長さは百二十間で、最も高き處が水面より十三間で、河の中に石を疊んで四個の橋脚を築いて、之に半月形の五つの小橋を架けたので、橋は一の柱をも用ひないで、框を組んで互に持ち合はせて、それで全躰の橋の重量を支へて居るのです。或人の話に其の造り方は、西洋の迫持法に適つて、今日トンネルなどの内面を煉瓦で積み立て、蔽ふのも之と申しだと申されました。

此の日は小郡まで参りまして、同地に一泊し、翌五日無事、萩地に歸着いたしました。以上は此の度の旅行で、私の觀察した所の概略であります。考へて見ますと、四十餘日の日子と、少なからぬ金銭とを消費して、視察した所は實に之丈で、殊に多くは車上の見物で、誠に横着の旅行をしまして、甚だ汗顔の至りて御座ります、か、るつまらぬ事で、永く御清聴を煩しまして、實に恐れ入る

次第であります。

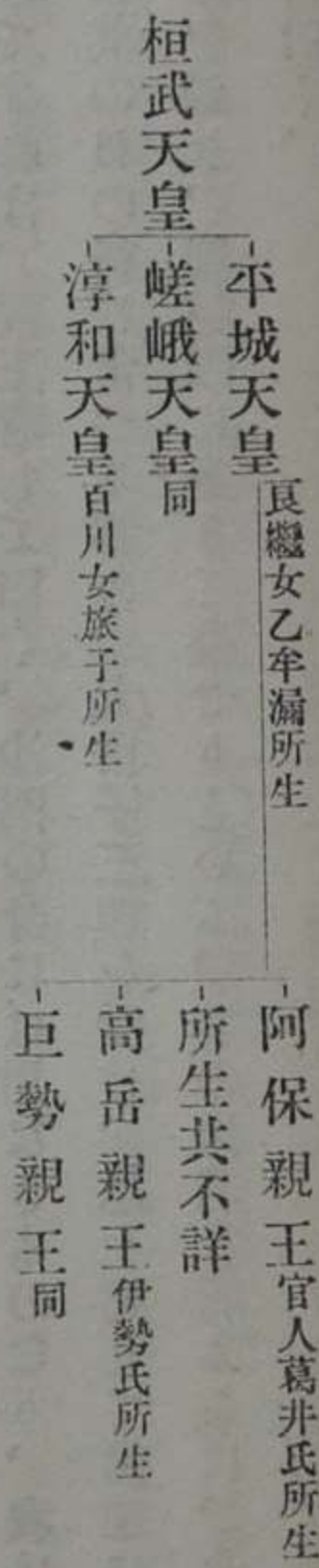
學 術

高 岳 親 王

特別會員 郡 司 厚

按するに、親王は平城帝の第三子なり、帝皇子四人あり、長は阿保親王、宮人葛井氏の出なり、次は所生共に明かならず、次は則ち親王にして、次は巨勢親王なり、共に伊勢氏の出なり、帝専ら、親王を太子と爲さん志なりしが、藤原氏の爲めに遂に、其の心を果すと能はざりき、始め藤氏謀りて光仁帝を策立し、次ぎて又桓武帝を援立して入る、に女を以てし、而して其の出を立て、平城、嵯峨、淳和と兄弟互ひに相及ぼし、は、皆藤氏の意より出でたる、藤氏吾が權勢の基礎を定むる謀略にして、平城帝の即位するや、吾が子を立て位を譲らんと欲すれども、皆藤氏の出にあらず、且つ桓武は平城を愛せずして嵯峨を愛せり、故に勢、位を嵯峨に譲らざるを得ず、されどもこれその本意にあらずしかば、中頃太子を替へむと企てしも、百方冬嗣等の擁護によりて、遂に其の意を果すと能はざりき、後快々として早く位を去りしも、病疾の爲なりとはいへ、實は之れが爲めなり、嵯峨帝即位し、親王を以て皇太子とせしは、藤氏の本意にあらず、全く平城帝の讎心をなだめ

んとする、一時の策にして、太子となすべきものは、別に淳和帝あり、されは此の時、親王の位地は、殆ど後の恒貞親王の、仁明帝に於ける場合の如し、今其の關係を示せば



親王が、嵯峨帝の太子となるや、時人、蹲居太子と稱せしは、親王なほ匍匐の幼兒たりしが爲めならむ、廢せられしは其の明年にして、太子固より弘仁の變には關係なかりき、而して罪なくして廢せられし故は、此の時、太子の存廢は後に藤氏の權勢上に、大いに利害を及ぼすものあればなり、弘仁の亂は、藥子、仲成等が、平城帝の寵に乗じ、己れ獨り權勢を奪はんと、帝の早く讓位せし不平の機を窺ひ、復位のを勧めしより起れりとはいへど、此の亂によりて、藏人所など出來しほどなれば、思ふに當時公卿たちの、藤氏の爲めに志を得ずして、平城の方に通せしもの多かりしならむ、されは親王を立て置くは藤氏の大患なり、こゝに於て太子を廢して、淳和帝を立つ、是より藤氏一門の權益熾なり、

親王は以上述し如くなれば、弘仁の亂に際し、廢立の厄に遇ひしとを追懷し、偏へに世の無常を感じて落髮し給ひしなり、蓋し其の意に諱ひしならむ、長く俗世に在りて身を藤氏、壓制の下に屈せ

んよりは、寧世を捨て山に入りて深く佛法を極めんには及ばずと、親王性聰敏志氣宏邁とあれば、沙門となるも徒に凡庸を以て終るものにあらず、これ入唐の志を興し、所以なり、當時入唐求法の僧、多くは僅かに一兩年の留學を以て歸朝し、得々然たらざるもの寡なし、親王は之を慨して、常に言へらく、密乘奧秘、此方未だ盡さず、當さに唐に入り疑はしき所を質すべし、彼の地若し此の土の如くならば、遠く葱嶺を踰えんと、而して親王入唐するや、時に唐室大いに亂れ、佛法衰微の際なりしかば、遍く名徳を詢ふも、一つも意に叶はず、此に於て決然印度に渡り、深く法源を探らんと企てたるなり、

親王入唐以來殆ど廿年、其の存亡杳として聞えざりしが、元慶五年留學僧中瓊の報によりて、始めて其の薨去を知るとを得たり、此の時其の歳を算すれば殆ど八十の高齡たり、實に其の志の程思ふべし、或は又曰く虎の害に遭ふと、親王唐を辭せむとするや、唐帝其の志を感じて、送るに種々の財寶を以てすれば、親王辭して曰く、沙門の身には用なきものなり、我は行く／＼食を乞はんのみと、僅に其の目の料に當つる爲め、大柑子三顆を受け、恩を謝して佛地に向へり、而して今此に親王が流沙を過き、羅越國に至りて薨せりといふ、其の地名を考ふるに、北澤正誠氏の、親王羅越國墳墓考に曰く、

(前略)唐書、地理志を讀むに及云々、羅越國の亞細亞東南洋の岸國にして、東天竺の行路たるを知り云々、(瀛環志略に羅越國、南掌に作る、又羅掌に作る即老撾なり)今の老撾緬甸兩國に涉りし

なるべし、老撾の音羅越に近し、其の地果して古の羅越國たるを知る、抑唐代五天に至る、其の道二あり、一路は長安より隴西に出て、玉門陽關を経て流沙を渡り、南山に沿ひて西し、葱嶺を過て北天竺に至るものとす云々、一路は長安より蜀に入り南掌即ち羅越を過き、東天竺に至る、唐書地理志に曰く、西至永昌、故郡三百里、又西渡怒江、至諸葛亮城、中略入驃國境、今緬甸經萬公等八部落、略西度黑山、至東天竺、迦摩波千六百里とあり、然則親王、當時北道に依て玉門陽關を出てすして、東道に依り羅越より怒江に向ひしや明かなり、

流沙亦二あり、一は沙磧にして玉門陽關を出て、葱嶺に至る中間、今の哈密土魯番の側云々、一は河名にして今日雲南より老撾を過き緬甸に至る、大河あり怒江と云ふ云々、唐代東天竺の行路、怒江を經る明文あれば、當時親王の渡りたる流沙は、玉門陽關の流波に非ずして、老撾の流沙たるを明瞭なり、

か、れば、親王がもと葱嶺を越えむと云はれしは、北天竺に至る道なるべし、而して入唐して路を轉じ、長安より蜀に入り、羅越を過き、東天竺に向ひしなり、其の趾跡の遺跡、薨去の墳墓等の如きは、自から彼の地に渡り、之を探訪するにあらざれば、今史籍の據て考ふべきものなし、惜哉、嗚呼佛法我國に入りてより、親王に至るまで殆ど三百年、入唐求法の僧枚擧に暇あらず、然れとも未だ印度に渡り、其の法源を究めんとせしものあらず、親王身は萬乘の皇子を以て、翩々たる孤影、獨り錫杖を飛ばして、山臥石枕、此遠征を企つ、誰か其の高風碩徳を仰慕せざるものあらんや、願

はくば有志の士、彼の地に航し、其の遺蹟を探訪し、其の墳墓を顯揚せられんことを、されば親王千載未死の靈魂も、亦以て長く瞑するところあらむ、

コンスタンタイン大帝を論ず

第五學年 湯原 綱

上下茫茫三千歳、頭を回して、其の歴史を顧みれば、笑ふべく、泣く可く、將た恐るべきもの多し。而して英傑雲の如く輩出し、俊才踵を接して立ち、集合離散、搏噬攘奪、天震ひ、地撼き、忽ちにして疾風驟雨、山崩れ、地裂け、怒濤天に呼號し、忽ちにして雨霽れ、雲散じ、皓月輝々として、千里に渡るの感あるもの羅馬史なりとす。けに羅馬史は、人世の運命、國家の盛衰榮枯を語りて餘りあり。王政、執政、共和の世局變遷を経て、帝政の世となれる羅馬は、その時代の宇内を總括し、百花爛熳、異香馥郁たる太平無事の世にして、その民は鼓腹謳歌して樂めり。遂に彼等の腦髓は、深く平和に感染し、彼等をして、人類は常に一帝王の治下に統御せられ、而して羅馬國なるものは、永劫不變に存在するものと、確信して疑はざるに至らしめり。少くとも彼等の想像は、誤らざりき。運命の神は、形而下の思想を變じて、形而上の事實と化せり。彼等は形體に於てこそ異なれども、確かに世界の統一權を掌握せり。彼等はその當時の世界全局を、武力に依て統一保持し、宗教に依て、後世の局勢を感化指導し、法律を以て、現世代の世界全局面を支配せるにあらずや。彼等の思

想は連綿として繼續し、羅馬なる觀念は、全世界の人の子の腦底に映せざる時なし。嗚呼偉なる哉、羅馬史は全世界の歴史たるなり。

コンスタンタイン大帝は、羅馬旺盛の世に生れ、帝政時代錚々の英主にして、彼は確かに羅馬史上に、一轉機を興へり。彼は剛毅英邁の度に於て、ダイオクレシアン帝に酷似せり。帝はこれ彼の思想的人物なりき、而して帝は創業を夢み、彼は守成を考ふるの人物なりき。彼は願ひ稀れる敢斷力を蓄へ、整然たる體系を備ふる獨創力を有しき。吾人は理想的人物より論せん。ダイオクレシアン帝は、一大變革を元首の性質と、統治の方法に與へり、かの即位の劈頭に於て、元老院より行政權を剝奪し、國庫と内藏との區別を廢除せるが如き、優にその手腕の敏捷を示し、皇權の制限を徹去して、專制君主政體となせり。實にこの新政體主義の完成者こそ、大帝なりき。而して外領の政治を圓活敏捷ならしめ、且つ皇位繼承の安全を維持せんとする政策上帝國を四分し、オーガスタス地を失はんとし、帝政時代の初期に於て、境疆に築くに金城湯池を以てし、不利顛に三大隊、ライオン、ダニユープ間に十六大隊、ユーフレテース方面に八大隊、埃及西班牙に一大隊の豺貅を屯せるも、この時代羅馬葉奢の軍兵は、新強蠻族の敵にあらず。人血を見ざれば心猿騷き、意馬狂ふの蠻族は、楯を手にし、戈を枕として、漸く北塞に迫り、危機一髪の秋に際せり。あ、驕れる平氏は久しからざるの譬に洩れざるか。實に大帝はこの衝に立てるなり。

大帝の性たる敢斷にして、不拔の精神あり。聰敏にして、達識なり、豈に彼の眼底に、累卵の羅馬の映せざらんや。彼は不撓不屈の精神を以て、數敵を倒し、政權を手中に掌握し、大英斷を以て、國外に出でざりし帝都を、遠くビザンチンに遷し、國民の腦中に、深染せるペガニズムを排し、耶蘇教を國教とせり。その功績は、史上の花として、千秋史家の賞賛を博せる所なり。而して余は、以下段を分ちて、彼の裏面を説き、この美名に適せるかを論せん。

大帝の性行、コンスタンタイン大帝は、ダイヲクレシアンの爲め、ヌキシミアンと共に、簡拔せられて、ヲーガスタスとなれるコンスタンチアス、コロラスの一子なり、ダイヲクレシアン帝病で立つ能はず、その危篤に迫るや、マキシミアンをして、其の志を紹がしめき。而して彼は多くの國亂を鎮め、リシニアスと共に、位に即けり。彼は政治的才能を有すると共に、單將たるの大膽畧を有しき。而かも彼の軒昂たる意氣は、能く士卒の畏服する所たりきなり。彼の父コンスタンチウスコロラスの懸軍深く不利顛の地に入り、空しく形骸を陣頭に曝すや、士卒は直ちにその地に於て、彼を押し帝位に上し、彼の爲め、喜んで水戦火闘せるにあらずや。而して又彼の果敢勇猛の志は、幾多の猛士をして、甘んじて其下に立たしめ、その英々潑潑の氣は、能く部下を鼓吹して、進戦せしめしにあらずや。蓋し彼は、用兵の人よりも、寧ろ經略家なり。彼の歸國するや、分國の統一は、彼の身を捧げるの一大事業なりき。彼の政敵は多かりき、其の主動者として、五勁敵は鐵鞭を振り、墨を高くし、壕を深くして歓迎せり。彼は事業に忠實なりき、また之に適する手腕と、頭

腦とを有しき。彼は戦ひ、而して勝ちぬ、その報酬として、羅馬大帝國は、彼の足下に獻せられぬ。教會史家は記して曰く、彼が羅馬に於ける政敵マセンチアスを攻撃せるとき、陣頭に於て、燦々として輝ける十字架を見、その夜の靈夢に、耶蘇顯はれり。これ彼の改宗し、又十字架を旗徴とせる所謂なりと、誦にして巧に富み、權謀術數彼れが長所たる、何ぞ一の手品的手段を取らざらんや。彼の改宗は、明かに政策上なりき。吾人は一步を讓與し、かゝることありとして、之を論せんに、多くの耶蘇教徒は、矛と楯とを以て、彼に従ひ轉戦せり。彼は之を徳とすること大なり、且つ教徒の爲め、感化せられて、其の教義の趣味を了解せり。之に於てか、苦しき時の神だのみ、彼は戦毎に熱心營中に祈禱し、突然出陣するや、彼は聯想の爲め、かゝる幼影を見しことなきを保する得はず、謂はんや、滔々たる當時の改宗者の皆然るをや。

帝の遷都、羅馬大帝國の首府として、久しく其の位置を保てる羅馬は、ダイヲクレシアン帝の時より、その首府たるの品位、及性質を失へり。その時、帝は、ミラン、ニコミチアの數個所に、大都會を新開し、帝都羅馬を廢せり。其他政府の所在地として、ニオーガタタスの都あり。羅馬は其勢自然に孤城落日たるを免れず。大帝の時に至り、百事益々衰滅の兆を顯はし、嘗て世界を一統せし羅馬市民は、翻てその郡領の爲め制せられ、主客の位地轉倒せり。故に羅馬を棄て、邊境に都し、以て外敵の動靜を窺ふに若かずとし、昔時希臘の一都府なりし、ボスフヲラス海峽のビザンチンに遷都し、其の規模を擴張し、大帝自ら名けて、新羅馬と呼び、後世之をコンスタンチノールと稱

す。地は海中に突出し、敵軍來襲の虞なく、最も首府たるに適し、後世この堅城を以て、サラサン人の強を挫き、爲めに歐洲の天地平穩なるを得たり。兎に角その事たる、舊政體を破壊せる分界標にして、政策上吾人はその美舉なるを知るも、この擧の裏面を觀破すれば、醜の醜たるものあるを如何せん。

帝の性質の缺點たる、徳性人を服することなきのみならず、其の人物は粗厲嚴雋に近く、其意滿ちて氣驕り易く、且殘忍薄の行多くして、遂に怨を全羅馬市民に買はざるべからざるに至れり。彼はその身の羅馬市民の怨府となり、四面楚歌に充つるを覺るや、全市民を擧げて屠殺せんとする、極惡なる大陰謀を企圖せり。然れども僅かに其志を躡すを得て、遷都の平和手段に依れるのみ、嗟乎。帝の政策、帝の政治たるや、ダイヲクレシアンダイヲクレシアンの創立に係る、專制政治の安成を告げしものなり。而してダイヲクレシアンは、武人の皇權を侵すを防ぐ爲め、其の權力を内閣に分與し、巧みに之を操從せるが大帝はこの屬僚制度が、却りて帝國分裂の憂を起さん恐れ、自ら文武の兩權を掌握し、その屬僚には、政權と兵權を分有せしむるの策をとりぬ。帝の行政上改革は、全國を四州とし、之を縣に小分し、數級の貴族を新設す。これ近代の貴族制度の模型なり。軍制に騎兵總督、及歩兵總督を置き、其の部下に、ヂウク及カウントを置き、大帝中央にありて之を督せり。而して宮中に、侍從長チヤウカシレン以下數級の職員を置き、皇位に東洋風の性質を與へ、多く皇室附屬の官吏を設け、且つ基督教會長兼保護者として、大に尊嚴を増し、皇權は無限となりぬ、其結果として、帝に對する敬禮は、卑屈となり、宮中に趨走する侍臣は、諂佞を事とする東洋的專制政治の惡幣に傾けり。

帝と耶蘇教、帝と耶蘇教を論ずるに先ち、耶蘇教の發達を叙述せん。初め教徒は、ジエルサレムに教會を設立せるが、猶太人の激烈なる迫害を蒙り、シリアのアンチオックアンチオックに遷り、信徒の多く歸依するや、僧侶の別なきに至り、埃及の僧アントニアスアントニアス僧俗の區別、僧侶の制モノク、僧院イロテスルの設立をなせるは、頗る我國佛教渡來時に髣髴たり。かくて使徒教會長となり、大都會の僧正ビレヨツ(監督者の義)漸く勢力を有し、ローマ、アレキサンドリア、コンスタンチノーブル、アンチオック、ジエルサレムの五僧正は法教長パトリアルクと特稱せられ、而して羅馬の法教長は法王ポッ(父の義)として尊信せらる、に至れり。斯く隆盛に趣けるは、忽然にあらず、着々歩を進めたり。實に彼等教徒の血と涙との報酬なり。彼等の敵は、宗教上にベガニズムあり、政治上に帝王崇拜あり、其間に身を處して、隱密に布教せり。嗚呼隱密は、宣教上唯一の手段なりき。彼等は商工業に伴ふて、宗教の種子を齎せり。故に宗教史尙ほ、アレキサンドリア、及カーセージ、又は羅馬本國の教會創立の顛末は、明記する能はざるにあらずや。

彼等の羅馬に於て、夜中密會して布教せるは、深く邪教徒を疑はしめ、火災暴風若しくは、疫病ある毎に、その神祇の激怒する所となして、之を虐待せり。他方に於て、諸皇帝は、彼等の民間に勢力を得て、其狀自ら精神的團結により、一種特殊の帝國を其境内に建てる觀あり、且つ羅馬の國家主義に大なる不利を與ふるを知るや、ドミアン、トラジヤン、ハドリアヌスの明君も、政策上之を

虐待せざるを得ざりき。然れども世は、塞翁の馬の譬に洩れざりし。彼等の虐待を蒙りしこと屢々にして、頗る慘憺たる悲劇を史上に遺し、時に少女及び兒童と雖も、從容として、苛責の苦を受け、死を甘じて、教義を保護せり。これ後世天下志士の同情を惹き起したる所以にして、其の民心を収攬せる基なり。かくて耶蘇教は、ダイオクレシアン帝の時に至り、全國教會の設立を見ざる一市一村なきに至り、その勢力は延て帝國の主權を危くするの恐怖を抱かしむるに至り、遂に未曾有の大迫害は、帝に依て決行されき。されどこれ又た教徒の權利を得る前兆なりき。

今や彼等は、コンスタンタイン大帝の治下に立てり、大帝の慧眼は、希臘哲學思想を輸入せる、國民間に帝王崇拜主義の行はるべくもあらざるを觀破し、政治以外に超立せる耶蘇教を以て、國民の統一を維持するの適切なるを認識せり。こゝに於て信仰自由の勅令は、ミランの地より發せられぬ。是に於て耶蘇教徒は始めて、天日皓々たる裡に生活し、旭日の勢を以て、全國民を風靡せり。政治家、哲學家、多神教徒が三角同盟を形成してこの共同の一大強敵に當るに至れるは必然の勢なり。争鬭の最過激なりしは、哲學者と耶蘇教徒間の學術的論戰なりき。然れどもこれ基督教のため教義進歩の動機を興へたるに過ぎず。彼等は學校を興し、教義を研究し、後世の所謂神學の基礎を置けり。

一方に於て、彼等は同教間に綻びを生せり。當時アレキサンドリヤに、アリウスなる僧あり。彼は學識深遂にして卓見あり、當時滔々たる僧侶の、現世の利名に眼を眩じ、奸諂なる大帝の政策を翼助する情態を深く慷慨せり。而してその僧正の位を望みて、其の意志の齟齬するや、炎々たる憤情は、彼の胸裏を發挑し、その餘炎は顯はれて異説となれり。曰く「基督は神の子なれど、又一の被造物に過ぎず」と。詳言すれば、彼は論據を哲學上に求め、三位一神に於て、神の子の位置を論じ、「子は其子たるの性質上、必ず父より生れたるものならざるべからず、即ち子の未だ存らざりし時あり、而して初めて在りし時、なからざるを得ず、即ち父は子に先ちて已にありし者なり、」これ明かに、三位の間に階級を立つるものにして、一神の説と兩立せず。反對黨は神の唯一獨尊を潰す者とし、痛く之を攻撃し、遂に政治上に及ぼし、全埃及の男女一人として、關せざるなきに至れり。是に於て、大帝は、基督教會長兼保護者たるの位地に於て、之に關涉し、ナイシアに大議會を開き、アリウス説は否決せられ、一神説即ち耶蘇を以て、神と同一の性質を有する説を以て正義となせり。これ後世歐洲社會の發達に、大影響を及し、處のものなり。抑も大帝の耶蘇教容認は、主として國家統一の政治的經策に出でたるは、瞭々として火を視るより明かなり。而して彼自ら身教徒たる所以は、その性行たる誦詐權謀を縱とし、殘忍惡逆を横として、織れるものにして、極惡なる私行を以て充滿せり。故に彼は宗教を以て、良心を慰藉するの具となせり。拙なるかな、彼的手段や、その金箔は晩年に於て禿けたり。彼の行爲は、神聖なる耶蘇教徒の資格を有せずして、その行動は、一として、教義に適せざりき。その惡逆非道は、暴帝テロと伯仲の間にして、何ぞ其の間一庭徑あらんや。

詞藻

記 郊遊 戲擬漢文

特別會員

安藤紀一

椿東之村。有山有水。一帶之地勢。超於南。北至越濱而盡。我萩中學校。有郊遊之議。五月二十五日。學校休課。究其地理而發。時午前八點鐘。風日晴和。街塵不起。隊伍肅整。均服振々。遇松本。是日。吉田氏例爲松陰先生祭儀。乃致幣禮而去。取路城腰。出于小畑。薄午。遂達越濱。此間道路迂曲。徑于田隴。入于林薄。忽而海濱。忽而丘岡。而矚目之際。山水變幻。遠者如笑。近者如躍。流者紆餘。峙者宕犖。一送一迎。綸傑交出。至若海門之外。一碧千里。令人不得竭目力。蓋皆是境之壯觀也。越濱之地。斗出于海。魚鹽之舍。連于洲。洲之盡處。龐然而起者爲笠山。山上有噴火遺蹟。山下有市杵島姬祠。祠前大池。與海水通。清澈如鑑。潛鱗可指。池之東。有小學校。時已終課。乃請爲休憩之處。解隊而就食。食畢。於是。有臨水者。有登祠者。有踞石而嘯者。有望林而作畫者。有入山而探古蹟者。有問村家而觀俗者。有蒐草木翅鱗而整理之者。遊意酣暢。不覺晷之移。皆修學者之佳適也。午後第二點鐘。發集合之令。各伍檢員。乃就歸路。蓋嘗聞之。王陽明之警發門人。多在山水泉石之間。我吉田松陰先生之教人。亦以郊遊養氣爲學問之一益。常謂。學之爲功。氣類先接。義理從融。非區々禮法所能及也。碩校之生徒。昕夕昇降。遠之不下二三里。其往來所觀。山而宕犖爲傑。水而紆餘爲綸。足以冥養默修其精神者已不爲少。況今日同窓四百人之遊。非復五六冠童之比。而壯觀之與佳適。舞雩風詠無以尙也。則其養氣之功。有補於學。豈可以尋常計哉。余於是乎誠知休課郊遊之時或不可已也。四點鐘。皆歸校。余乃私記之。

公園に遊ぶ記

第三學年

池田克彰

廿日の土曜日午後のことであつた。清く澄み渡つた水色の大空は、所々に一塊の綿の如き雲もて色ざられ、春の日影は、ほか／＼と暖で、遠く何所かに雲雀の囀る聲がしきりに聞える。そこで、僕は思はず、活潑なる、精神は、健康なる身體に宿ると大聲しながら、大闊歩で戸外に出で、先づ公園にと膝栗毛を進めた。町の盡くる所は、長い間、過半廢墜し風雨で骨の出で、をまけに、蔦葛が所いとはずしがみついた壁ばかりで、そのあいだ／＼に、昔ながらの長屋めいたのが、壁は剝落しても骨柱は少しも動かぬのは、丁度昔の武士の精神を表してる。あはれ、僕はこの様を見るにつけ、實に懐古の念にたへぬ。僕の思は、はや多忙多事なる世にあたり、長薩の大風雲兒が、活潑に勇壯に天下に唱導した世を往

來するのである。

壁盡くる所が公園で、又大いなる歴史をもつ城跡である。

僕は先づ高くそびえた石垣の下に、樂しさうに咲いた美しい莖の花に迎へられて園は入れば、櫻花爛然と咲き亂れ、今を盛りの風情で、其木の多いことは、千もて數ふるほどである。

僕は手をふところにながら、ほど近い青い苔むした石に腰かけた。

櫻花の咲き満ちた中に、所々柳の若緑葉で色ざられ、其間には彼所に蝶がひら／＼と花に戯る、があれは、此所には蜜蜂がえも知らぬ歌うなりながら、忙しさうに花のまはりを飛び廻るのである。折しも蜂に蹴り落された花の一ひらは、僕の膝に取つき、さも彼の無禮を語る様である。

前には高く御城山が泰然として恐ろしいのがあると、ひき、近くには、莖たんぼ、れんげ、などの美しい花が愛らしく咲いてゐて、城跡の森羅萬象は皆、無限の秘密を有してゐる。あはれ此の秘密をよく知つてゐるものは誰であらう。

僕はいざ行かうとすると、僕のまぢかの花に一心に戯れるた一ひきのきあげは蝶の所へ、何方とも知れず、また一ひきの同じ蝶がきて、共につれあひ、とつれあうて、樂しそうにかなたの花蔭へ飛び去つた。あはれいかなる樂しきつれであつたらう。

それより花幔を排き行けば、小池があり、其上には石橋が架けてあり、其欄干から池中をのぞくと、鯉や鮒が藻や岩の間を潜り、共々に戯る、様は、樂が溢る、やうである。

拜を済し、御城山に登らうとすれば、老樹鬱蒼畫猶凄き所とでも云ひたうて、しんと寒く、身の毛もよだち、ごことなく神さびたやうな氣持がする。又春風が颯々そよよと深林を吹き拂うと、俄に夕立が來たやうにざわ／＼と音するのである。

このうす暗い所を抜け、頂上に達すると、俄に豁達とはれ渡つた。先づ東方遠く僕の故郷なる山口は淡く霞み、物思せる如く、又近くには菊ヶ濱の青松白砂は相映り、濱松に春風の調ぶる音は、碧海の方よりしきりに菊が濱へ突貫して來る波の聲と和して、遠くかすかに聞え、又南方は萩町大夏なつの正列、西ノ濱の並松、三見浦海岸の奇巖と風趣の勝れたる中にも、殊に西北の方は、遙あなたたの海を望むと、實に雲濤杳茫と其涯を知らず、其際に見島は雲烟模糊の中にとざされ、又近く碧海鏡の如き中には、大島相島などが、青松をいたゞいて點々し、又其間を漁船の眞帆片帆が、悠悠と見えかくれしつ、縫ひ行く様は、恰かも一幅の活畫を見るやうである。

午後六時頃であつたらう、少し紅を帯びた夕陽の影は、油のやうに靜に滑な夕潮の海の面に映り、あはれ、見よ、天の美しき神は彼の樂と愛もて満たされたる國に伴はんとするのが、かなたより僕のある眞下の麓まで、一條の太い黄金色の浮橋は架しられたのである。

夕陽は水平線上に近づくにしたがひ、ますます／＼紅に、ますます／＼太くなり、漸く光線を收め、又中天の雲は、赤、紅、黄、紫、紺などの種々の色に染められ、海面の黄金橋は廣がりて海面をおほひ、太陽の光に浴せる家も山も森と、皆異様の色をばなつた。折しも眼前水天髣髴の間、微に一抹の黒烟が

立昇つたのは蒸氣船であらう、これに續いて漁船の白帆は點々と本平線上に現はれ、こなたに急ぐ様である。

僕は此絶景に向ひ、種々の空想に驅られ、恍惚として己の居所を忘れぬたが、俄に僕の背で大に呼ぶものがある。こは即ち晚鴉の時に歸つたのであつた。それでは僕も遺憾ながら歸らねはならぬ。さらば、空よ、島よ、海よ、美しき神よ、さらば。

夏日漫筆

暑中休暇

第五學年

山 本 松 四

學生の頭腦を痛ましめたる試験も、既に了りを告げ、諸國の學生、皆多くは、故郷に向て去る。十里の煙火、長亭短驛、白雲青山、平野長流、滿眼皆是故郷の幻影若し夫綠陰深き處、遙に衡宇を認め、載欣載奔、兄弟姉妹の衛星に圍れて、恙なき父母の慈顔を拜するの快事に至ては、人生の多幸、何者か之に如かん。

消夏法

昔、建部綾足に、「すゞみ草」の著あり。夏日苦熱の餘、机に憑りて、種々往時、清涼の境を追思し、其の憶ひ出づるまゝ、を記せるものなりと。又、坐禪を學ぶものは、結跏瞑目して、妄想を拂ひ、邪念を斥け、心を清澄ならしむる時は、三伏の暑に當て、尙雪中にあるが如きを覺ゆと。我亦之に倣て曰む、獨り矮樓に盤礴して、得意の書を読み、讀み罷て、復任意の文を作る。此の際門外の車聲、馬語、囂々耳に滿ちて聞るざるなり。街上の飛塵窓隙より闖入し、紙を填めて、筆を擬す、而して煩とせざるなり。蓋心專書と文との間にありて、超然物外に忘るればなりと。

午 眠

高樓清風に對して、宰子を學ぶ、時に或は可なり。然れども是習慣の最も惡しきものにて、若し之を忍ばずんば人間の半生は、午眠の爲めに、掠奪せらるべし。一日二時間の午眠をなすせば、五十日間には、百時間となる。年毎に、百時間の午眠をなせば、五十年間には、五千時間となる、豈大ならずや。況んや、一日五時間乃至六時間も、午眠をなすに於てをや。我れ午眠者を見る事、仇敵の如く、懶惰の源泉、多く之より生ずとす。

瞑 想

獨坐瞑想の時、或は半宵夢驚きて、眠られざるの時、或は只一人旅行する時、偶然一個の道理を念ひ得て、序を趁ふて、之を考ふるに、其の勢破竹の如く、遂に、其の理を明かにす。此の瞬間の滿意快樂、實に喩ふべきものなし。未だ知らず、謙信が能州の月に對し、那翁が埃及ピラミッドを望める時の情、之に孰れなるを。

月 花

花と月とは、寔に古今東西に通じて、賞せられたるなり。

「三吉野の花の春は、山のあなたを隠れ家と頼み、武藏野の月の秋は草のゆかりを宿りにて、あかし暮し侍れば、六十餘州の抖擻残る處なく、三十一字の風情尋ねぬ方もなかりけり。」

花と月との人に於ける力、因て見るべからざらんや、天の月、地の花、幾と對を爲せり。花の聯想を喚起するや著し、蘭の屈原に於ける、菊の淵明に於ける、抑又梅林の水戸の西山大垣の鐵心に於ける、皆其人を想見せしむ、若し夫「朝日に匂ふ山櫻花」といふや、彷彿として日本國民の元氣を目前に睹る心地するなり。月を觀て、幾代前の今月今夕云々の事ありしと追想し來らんには、感慨甚深かるべし、土佐日記正月二十日のくだりに、

「二十日の夜の月出でにけり、山の端もなくて海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、むかし安倍の仲磨といひける人は、唐に渡りて歸りてきたる時に云々」

といひき。文人が七月既望舟を泛べて東坡を懷ひ、武人が九月十三夕鎮營の前庭に謙信を懷ふが若き、敢て怪むべしとせんや。

乃ち地に在ては花か、天に在ては月か。然して花には花の趣味、月には月の趣味あり、而も優劣の辨は自ら起らざるを得ず、濱臣は樂翁に答へて

花やあらぬ雪や哀れとおもほへぬ

こゝろひとつを月にすまして

とよみにき。誠に人を感興する力より云へば、月は遙に花の上に出づるならん。

好物と嫌物

我が好物は、綠蔭風清き處、光風霽日、激艶たる湖光、螢、休暇、月下の詩吟、驟雨、蓮花、端艇競漕、巍然たる山頂、釣魚、田舎、讀書、入江に續く青海原、意氣豪宕なる少年、海軍軍人、氣宇宏濶なる人、なほれおん、項羽、西卿隆盛、及び餅。

我が嫌物は、曇天、蠅、蟬聲、蛇、蚊、いら、船酔、小言すきの人、立腹成し易き人、しやれ好きの人、引續く永雨、蒸し熱き日、折れ易き鉛筆、蛙の聲、氣慨のなき人、蘇我馬子、僧道鏡、活氣無き長演説及び葱の白根。

驟雨

祝融令を司り、炎威鬱蒸、街頭の砂礫爲めに毒氣を蒸騰し、屋上の鬼瓦、爲に火焰を吐き、萬民將に焦死せんとす。忽見る、濛雲漠々天を呑み、迅雷轟々地を碎く、俄然白雨沛然として盆を覆し、疾風颯然として屋を捲く、凄絶又快絶、瞬間にして、雨歇み、雲散じ、窓前の疎竹奇影婆娑として涼風を送り、庭前の青苔夕陽に映じて光輝々たり、是に於て、萬物始めて蘇生す。古來大豪傑の事業頗る之に類するものあり。蘇我の狡兒政柄を弄し、榮華を盡し、良民を虐げ、天下の黔首將に亡んとす。忽見る、大極殿上、血雨飛び、叫聲起り、電光石火、凄絶又慘絶、瞬間にして、天日熙々、皇澤春の如く、濛雲散じて紫雲九重の天に鬢く、是に於て、萬民始めて蘇生す、蓋大織冠鎌足の功大なり。蒙古の豺狼、勢赫陽の如く、東西至る處、焦土と化す、既にして、來て神州を以て趙東に

疑す。相摸太郎膽甕の如く、其の書を焼き、其の使を戮す、忽見る、筑紫海上颯風起り、旗鼓寥寥として海に躍り、吶喊の聲天響く、凄絶又快絶、瞬間にして波静り、風止んで、天地清新、玉兔長へに西海を照す、是に於て、萬物始めて蘇生す。一斑を以て全豹を窺ふ、他は推知すべきのみ。

十六夜日記をよむ

第五學年

三宅彌太彦

過ぎにし日、十六夜月は誘はねど、師の御教をたよりにて、此の日記をたどりしに、物の憐も知らず、世のはかなきも知らぬ心にも、ふしぐ身にしみつ、端なくもうつるは、氣高き尼の面影なりけり。そもその日記は、阿佛尼うつたへござありて、かよわき女の身もて、京を出で遙々と鎌倉に下れる間の紀行文なり。頃は後宇多天皇の御世にして鎌倉には、北條時宗、執權の職にありき。此の日記よ、紫めきし源氏の、面影あるにしもあらず、才艶なる枕の草紙の、姿あるにもあらず。文字の花咲き亂れて、色香を争ひし平安朝の美しきに、比ぶべくはあらざれども、昔、壁の中より出でけむ書の、世の人の子に、忘らる、果敢なさを嘆き、鎌倉の政事、としげく、聞えあげし言の葉の、滞れる、あさましの世や、うれたき様よと、悲しき調に、限りなき誠をよせし筆の跡の、妙にも憐にて、遠き昔の忍ばれ、さすがに憐しらぬ眼にも涙うかぶ。人の書き出る水莖の跡、大方は、たゞ其の文の妙なるをめで、徒に其の言葉のよしあしのみ争ふは、世の常なれど、眞の文學こそは

げに其人の心、其人の姿なれ、鳴立澤の古事には、西行のうき世へだてし、自然をめぐる面影を慕ひ、行く川の流には、長明の世を嘆きし氣高き想の忍ばれぬ、いとも果敢なき習なれど、花は散れども又咲くめり、月は曇れど又照すめり、うせゆく人の身は、朽つるとも、幾年月は流るとも、朽ちせぬ者は文學にこそ。そも阿佛尼は何人ぞ、昔、安嘉門院の四條とて、權大納言、藤原爲家の妻にして、冷泉爲相の母なりき、歌にも勝れぬれば、勅撰にさへ入り侍りぬ。その家居や如何にみやびなりけむ、花の都に住みけるを、花には嵐、月にはむら雲の習にて、異腹の子爲氏、爲相の所領を横領せしかば、詮方なく鎌倉に訴へ、聽て怨みを抱きて、旅の空に身まかりき。その乳母の文を讀みなんには、徳高く操正しく深きなさを見るべく、夜の鶴をひもとかんには、大和歌に秀で、且はめでたきそが才學を見るべし、十六夜日記は、たゞはしなき女のくり言ならで、道を助け、子を育めど、残し、細川の流の、故なくてせきとめられしかば、たゞ一片の領地に心置かれしにはあらねども、深き契りを守るに餘念なく、惜しからぬ身一つはたやすく思ひすつれども、子を思ふ心のみは猶しのび難く、道をかへり見る恨はやらん方なく、道を思ひ家を思ふ一筋のまめなる志、亡き人を戀ふる情にあふれ、我立ち去らばと歌ひし心やいかなりけん、忍ぶ昔の夢の名残を、語らひかねつる胸の中やいかなりけむ、さむれば見えぬ人のをもかげとか啣ちしとかや、且は我が子の返り事の、嬉しきにつけても、夫を慕ひ、旅寢の夢に目さむるにつけても、昔を忍びしなど、既に妻たるもの、こよなき操を残して文にこそ。子を思ふ清き涙には、

つく／＼と空ながめを戀しくば

道どほくとはや歸りこん

心の中こそ此歌にもつくし得ざりしならん、そをそだてん情には、

君をこそ朝日とたのめふるさに

残るなでしこ霜にからすな

その行く末を思ひては、

我が子ども君に仕へんためならで

渡らましやは關の不二川

と歌ひぬ、さすがに子を思ふ情のみち／＼と、あはれにもゆかしき婦女の文學にこそ。其の子紀内侍につかはしける訓の文にも、先づ人は心にて、いかに物學びに勝れたりとも心定まらぬにはそのかひなく、又は女のたしなみ、手かくと歌よむとごも、文の心得など、いとも懇ろに書き贈りし、げに母の文字にてみちけるにはあらずや、婦人は情の人涙の人なりとかや、げに尼が流し、血涙の痕こそ、此の日記ともなりて、今猶よむ人の袖をぬらすなれ、東の空と遙に、道の便あしければ、夜ごとにむすぶ草の枕の覺束なく、假寢の夢にも、浦風の音にも、行かふ遠の白雲にも、あだし東の花見るにも、夫を慕ひ、子を思ひ、家を忍び、故里を戀ふ、一字に涙あり、一句に情あり、實に婦人文學の粹ならずや。いづれをあやめ分ちかねつる源氏物語と枕の草紙とは双壁とて、いともめ

でたき文學なりとかや、さらば石山寺の秋の月は婦人のほまれか、香爐峰の雪は婦人のほまれか、人は皆しか云ふめり、されどその記されたる事柄の、何となく賤しげにて、此の日記と比ぶべくもあらず、なごてやは婦人のほまれなるべき、いやしくも文學にして其の巧を言葉の末にあらそひ、其の思想の及ばぬは、花の色美しくして、香なきにやたとへん、阿佛尼の日記ぞ、雪間に匂ふ梅が香の、いとかくはしくかほるにも似るべく、其の思想もいと高く、清き操を残ししこそ、實に文學の鏡とこそ云ふべけれ。

羅馬史を讀みて感あり

第五學年

佐伯益豐

青丹よし奈良の都は荒れはて、伽藍徒に古の名残を留め星月夜鎌倉の府は廢れつくして陰鬼空しく雨に哭す英雄の骨も朽ちてはまた土愧と擇はず美人の髑髏時に鋤犁に觸れて出づるも誰か當年の俤を認めむ東流の水一度逝いて復た返らず人間の富貴果して能く幾時で塞翁の馬上才月徒に過ぎて邯鄲の枕頭芳夢早く覺めぬけにや祇園精舎の鐘諸行無常の聲にひゞき沙羅双樹の花盛者必衰の色に出づ萬里の長城未だ全く成らずして山東既に亂れ坑炭なほ温かにして咸陽の宮殿三月紅なりあはれ萬世無窮と期せし遺國も忽ち二世にして盡きぬ盛なる哉豈に竟に久しからんや
羅馬は希獵に次いで開けし國なり其の強盛なること世界に比なかりしは未だ全く開化せざる時にし

てまた國力の最も強き時代なりき馬は華山の陽に歸り牛は桃林の野に放され堯雨舜風燦然たる希臘の文華盛て輸入せらるゝに至りて彼が國力漸く衰へぬ五帝の治政は文化の余弊その極に達せし時代なり爾來道德は甚だ壞頽して遊戲これ事とし秦平に慣れて武を講ずるものなく春の朝に花を歌ひ秋の夕に月を詠じ優柔習をなし淫靡風をなし建築造營は壯麗を争ひ奴隸の賣買盛に行はれて其の待遇は苛酷を極め征討邊防の事は一に近衛軍地方邊鎮の將士に委しまた他事あるを知らざりき百代の勇王エキサンチープスを辟易せしめ萬古の名將ハンニバルを囚ましたりし當年の羅馬人の子孫もあはれやアルプス以北の野蠻人の爲に亡ぼされぬその余孽大にコンスタンチノブルに榮えて第二の希臘を現出せしもこれも亞細亞にて未だ開化せざりし土耳其のために滅せられてその文華も一時は當時始めて用ゐ出したる大砲の丸に摧碎せられたるにあらずや印度は亡べり波斯は亡べりアツシリヤは亡べり埃及に及べり荒涼たる山河當年の殘礎を覓めむとするもまた得べからず歌舞の地鳥雀空しく悲しみ古塔月影の寒きに鎖し蔓草武夫の夢を封す夕陽にむかしを問へば悲風千里より來り荒墳に英雄を吊へば零落長へに冷かなり嗚呼榮えし國は亡びぬ文化の最も早く開けし國も最もはやく亡びぬ而して敢て之に代りしものは當時未だ榮えず文代の開けざりし國にあらずや漫に文華と云ふ勿れ漫に開化と云ふ勿れ文化はなほ酒の如し酒を飲むものは必ず酔ひ文化に耽るものは必ず亡ぶ歴史は正直なり常に人間に向て之を語れどもおぞや魚市に入て腥きを知らず太平の安きに慣れて人また危きを思はざるなり嗚呼國家昏亂して忠臣現はれ天下太平にして小人陸梁す輕裝肥馬の間に醒生夢死する者共に古今の興亡を語るに足らず悠悠たる行路誰に向ひてか邦家百年の大計を説かむ一窓の夜雨を、るに古を撫し慨然として眠る能はず机を叩いて大息すれば孤燈耿として三尺の秋水寒し

神皇正統記を讀みて感せし條々

第四學年

林 壽 香

余、神皇正統記を繙き讀みて、後醍醐天皇の條に至る。中に「さしたる大功もなく、かくては抽賞せらるべき。」とあり。こは、天皇尊氏の功少きに、みだりに、抽賞せられたるをいひしなり。「天の功をぬすみて、おのが功と思へり。」とは、天下を一統せしを己が功と思ひ、餘分の賞を望みたる罪をなじりたるにて「人の心のみだりになり行く姿は、これにてもおし量るべし。」とあるは、天皇を、るに尊氏を寵嬖せられし故に、尊氏は益々專横を極め、これが爲めに天下の人心、僅かの功をたのみて、餘分の賞を望むは、亂世の前兆たることを歎じたるなり。次に官爵の重大なることを論じて「名と器とは人にかさす。」又「昔人をえらび用ゐられし日は、まづ徳行をつくす。」と云へり。こは、天皇、尊氏の如き逆臣にみだりに高位高官をさすけ給ひ、尊氏これを受けたるのみかは、これにつのりて、益、あさましき望をいたきたるを諷刺したるなり。「其首たりし鄧禹すら封せらる、所四縣に過ぎざりき。」は、鄧禹後漢の光武帝を助けて大功あり、然るに封せらる、所は、至つて小なり。尊氏の如き、さしたる功もなく、又、徳もなき輩は、封するに足らずといふにあり。又、尊氏

が將來を諷して、いひけらく「邪なるものは、久しからずしてほろび、亂れたる世も正にかへるは古今の理なり」と、宜なるかな。尊氏、一時天下を掌に握り、逆威を四海に振ふといへども、數代にして亡ひ、又其の痕跡を留めず。今に至りて、これを惡まぬものなし。而して南北朝相争へる兵火は後龜山に至りてやみぬ。「大日本島根は、もとよりの皇都なり。内待所、神璽も吉野におはしませば、いつくか、都にあらざるべき。」と論じたるは、當時北朝の帝、京師にありて、吉野の南朝を凌ぎければ、時人、都にある方を正統の天子と誤らむことを恐れてこれを戒めつるなり。「昔、仲尼は、獲麟に筆をたつとあれば、こゝにて止りたくはあれど、神皇正統のよこしまなるまじき、こゝとわりを申しのべて、素志の末もあらはさまほしくて、しひて記しつるなり。」の句は、親房が、此書を著し、故を述べたるにて、孔子の春秋を書きし心を以て此書を著したりしこと知るべし。これを以て親房が精神を窺ふに、當時逆威を天下に振ひし尊氏をば恐る、氣色もなく、一々其罪を摘出して之をなじる。其精忠大義濯々として、紙上に溢る。親房、顯貴の身を以て、兵馬の間を馳驅し、一卷の参考書もなく、斯る大著述を爲したるを見るに、普く和漢の學を涉獵して、其閫奥を極めたるなるべし。其學力、卓見、汪々として量るべからざるものあり。而して、此書の後世に及ぼしたる影響は、如何、大日本史は此書を基として編せられぬ。日本外史は此の精神によりて著されぬ。又世の忠臣義士は此書の爲めに如何程、其心を固からしめられたるや知るべからず。正統記の功、亦大なりといふべし。柳、抑、文章を作るの要は、能く經國の大業、不朽の盛事たる功を奏するにあり。此の書の如きは眞に文章の鑑といひつべし。神皇正統記を讀み感ずる所あり。これを述べ。

讀書の心得

第三學年

百井盛 二

學生の書を讀むに當り必ず心得べき者數種あり故に今其心得可きものを左に説述せん第一學生が讀書せる際に當て忽然他の想像の浮み出する事ありか、る時には斷然其讀書を廢し其思ひ浮びし想像を心中に書き了り心裏を滌去し虚心平氣なるに及び再び讀書に従事すべし又其の間他人傍らにありて談話等の我が耳に入り讀書の思想を攪する等の場合には兩掌を以て左右の耳孔を蓋ひ讀むべし若し斯くせずして他の事物を思考せば即ち不留意の百讀にして其文味を知る能はざるに至るべし故に寧、留意の一讀に若かず又天下の書を讀むに當ては元を皆己と同輩者の著述せるものと見做して見るを可とす然ざれば若し有名なる碩學智人の著述として之を見るときは未だ見ざる前に其有名なる人の著作なれば蓋し其文味もよからん事心中に豫定して讀書するにより章として美ならざるなく句として美ならざるなし著者をして鬼神の化現かと疑はしむるに至る事少からず然れども彼も亦人なり固より誤なきを保し難し若し虚心平氣を以て之を閱讀したらんには往々瑕瑾もあり又欠點もあるならん今若し前に述べたる如く他の事物を見聞思考しながら讀書せば如何なる新奇妙文なるも輕々

看過して一も記憶する者なかるべし此等は徒に光陰を費すものにして其の甲斐少しもあらざるべし

最嗜好する遊戯

第二學年

大賀 幾太

螢燈雪案の故事に鑑み、日夜勉學して餘念なき、我々學生をして、其の苦悶を慰め、且又身体の健康を計らしむるものは、唯是遊戯あるのみ。乞ふ余の最嗜好する遊戯、即ち水泳に關して、少しく余の所感を述べしめよ。

水泳の術たる、人生實に欠く可らざる一技にして、之を知ると知らざるとは、時としては生死の分界に關する事あるものなり。萬里の海洋、風浪怒號し、船体を卷きて沙底に没し、又は汽罐の擡げ、暗礁の噛むが如きは、其免る、と然らざるとは、水術に通ずると通せざるとの別なかるべしと云へども、一度門外に出づれば、橋梁は到る所として有らざるはなく、渡舟に於けるも亦然り、車駭き馬躓き、或は不慮の難よりして崖より轉び、舟より落つる事なしといふべからず。僅十尺の溝と雖、水肩に及ば、水術なき者は、立つこと能はず。輾轉反側の間、水は鼻口を衝きて入り、忽ち生命の虞をなすべし。若し其の技に通せば、脚底千仞も亦何かあらん。四肢自ら動き、水波を切りて走り、直に岸に達するを得べし。前者後者の得失、果して如何ぞや。蓋し人にして前者の如くならば、平時に於ける其の心の安泰如何ぞや。橋を過ぎ舟に乗るに方り、脚底は實に是冥界なり。一度足を失

する時は、魂招けども返らず。父母兄弟は内に嘆き、親戚朋友は外に悲み、万金の富、曠世の才も、水鬼と化して、用ゐる所なきに至らんとす。故に煙波を見て心悸き、長流に臨みて魂消するは免れざる所なり。又夏日三伏の候、炎熱焼くか如く、五尺の身体置くに所なき時に際し、河海に游泳せんか、其快實に譬ふる物なからん。人或は曰ふ、水術を解するがために反りて溺る、ものあり、故に反りて解せざに若かじと、直に罪を技に歸す。是術の罪に非ず。技未だ至さざるか、或は狎れ弄んで誤を來すによる。何ぞ之を以て直に咎を術に歸すべけんや。夫未熟錯誤を以て術を責めむは、誤診を恐れて醫を廢するに異ならず。豈理ならんや。況んや、我國は四方環海の國、故に國民たるもの、游泳術に通せずして可ならんや。

評、意到り筆も亦到る

藤井

最嗜好する遊戯

第二學年

大谷 清記

余は幼き時より、柔術を見るを以て、無上の樂となし居たりしが、幸にも昨年五月頃よりは、本校にも此の科を設置せられしに由り、余は逸早く入會し、爾來學業の餘暇を得ては、熱心に此の稽古に没々たりしが、漸く日數の重るに連れて、愈身の健康を覺え、又一層の快樂を感じ、此の頃にては、他に比なき最良き、最好める遊戯となすに至れり。余が斯く迄も柔道を以て、最良好なる運動

となす所以は、只に前述の体育上の利益のみを以てするに非ず、他に又精神上に得る利益の、大なるものあるを以てなり。試に彼のベースボール、フットボールなど、比較せんに、彼にありては只身体を養成し、精神の疲勞を醫するに、小功を現すのみ。加之近來は奢侈の風習日に長じ、又毫も剛毅の素養なし。然るに柔術にありては、身体の養成は云ふも更なり。質素を旨とし驕奢を賤み、或は禮儀を重じて、我が國固有の大和魂を養成し、或は又百萬の強敵に遭ふも屈せざるが如き、膽力を鍛鍊する等に至りては、彼に見ざる所なり。且又此の術をして、大に隆盛に趣かしめたらんには、常に單獨個人の利益たるのみならず。又以て國家を利すべき、一端となるべし。是を以て之を觀れば、此は之れ一つの報國的運動なりとして、不可なかるべし。余幼き時にありては、只動作の敏捷、或は元氣の勇敢なるのみを以て、無上の快樂となせしも、やう／＼長するに従つて、以上の如き理由あるを發見し、以て最快活なる運動となし、最愉快なる遊戯となすに至れるなり。評、ベースボール、フットボールに對する意見は尙至らざるものあれども、柔道の効用を述べたる所は筆端、自、自在の氣象あるを見る。 藤井

大和魂

第一學年 堀 俊 雄

峨々として、白雪を戴くものは、芙蓉の峰なり。激激として、蒼波を堪ゆるものは、琵琶の湖なり。

此の山、此水は、實に吾國に獨り有する所の美觀なり。然れども、山は、時ありて崩れ、水は、時ありて涸る。是れ、未以て優れたるものと云ふべからず。唯、皇統の連綿なるに至りては、眞に、萬世一系にして崩れず、涸れず、其の窮りなきこと、天地と久しきを共にせんとするもの、是れ、實に吾國の精美にして、即ち、眞に優れたるものと云ふべきなり。夫れ上に優れたる君あり、下豈に優れたる國民なからんや。古來忠節の士に乏しからず。蹇々皇猷を補翼せしもの、是れ、即ち國民の優れたる所以なり。嗚呼、此の君ありて、此の民を仁愛し、此の民ありて、此の君を尊敬す。焉ぞ、其の間に優れたる、特性なからんや。大和魂、即ち是なり。此の特性内にありて、艱難を忍び、辛苦に耐へ、百折撓まず、千挫屈せず、強を挫き、弱を扶け、天下の憂に先ちて憂へ、天下の樂みに後れて樂む、此の特性の外に發するや、忠君愛國の精神を以て、甲冑となし、公道正理の氣象を以て城壘となし、進みて、死するも、退きて、生ることを欲せず。玉となりて、碎くるも、瓦となりて、全きことを耻づ。大岳前に崩れ、巨流後に漲るとも、虎龍左に嘯き、獅狼右に吼ゆることも、大和魂の存する所、又、以て吾を驚かしめ、吾を怖れしむるに足らず。大和魂なる哉、大和魂なるかな、一旦緩急あらば、筆を捨て、劍を腰にし、鉞を擲ちて、銃を肩にし、義を重んずる、泰山の如く、命を輕する、鴻毛の如くにするもの、是れ、眞に大和魂ある日本男子なり。嗚呼、芙蓉の峯は東海の汀に峙ち、琵琶の湖は叡山の麓に漲る。此の山紫水明の間、以て、斯の大和魂を養ふに足る。奮へよ、日本男子、起てよ、神州の烈大夫、以て、益斯の大和魂を發揮し、大に、國威を

宣揚すべきなり。噫。

建武中興の失敗に歸せん所以を論ず (席題)

第五學年 小澤泰二

建武中興成りて、是に王政舊に復し、天皇親ら政を視給ひ、群臣階下に伏して命を聽く、王朝の盛事古に譲らず國家の安康、指を屈して待つ可きなりと、豫想せし中興は、一朝足利の風雲動きて、天下の庶士翕然として之に應じ、中興の大業、此に畫餅に屬しぬ。而して中興の長く其の業を全うすること能はず中道にして敗れん所以の者、數多なりしと雖も其の主因たるもの實に當時忠誠の勤王家無きにあり。楠公新田氏の如き、誠實の忠臣或は無きに非らずと雖も、大概當時の勤王家たる者、或は北條氏に怨を含み、或は其祖幕府の爲めに、其所領を奪はれ、流浪轉展爲すべきなく乃ち好機逸す可らずとして、王事に盡し、以て己が所領を回復せんとし、或は風雲に乗じて、一躍高官を得んとしたる者等、皆野心満々たるの輩なりき。中興成りて後、是等の勤王家或は寸功なくして大國を有し、或は一身を犠牲に供して、王事に勉め、然も尙一步の地をも領する能はざる者あり。是に於て、王政に不満の者天下に充ち、心竊に武家政治を悦びき。此の時に當て足利尊氏大志あり、己が源家の後裔にして、北條の配下に屈するを、心良しとせず、其官軍討伐軍に長として西上するや、旗を翻して王軍に歸し、中興の業成るに及んで、位祿遙に諸將を凌ぎ、跳梁憚るなく阿諛及ば

ざるなし、世の漸く王政を好まずして幕府を悦ぶを察し、是に反旗を翻して朝に抗し、天下の士、雀躍して之に従ひ、中興の大業此に挫屈するに至れり。嗚呼大業の全局、遂に失敗に歸せしは、當時勤王家中二三を除く外一人の誠忠直實の者無かりしと、嘗罰其の當を得ざりしに因れるなり。

我が國の海軍

第一學年 白井洗

我が國をして、宇内の第一流海軍國たらしめずんば、則ち已む。又東邦の覇權を掌握し、列國と雄を争ふ志無からしめば、則ち已む。苟くも然らずば、兵備の完實、又已むべからざるに非ずや。現在及び將來に於て、東邦危機の迸發しつ、あるを知り、殊に我が帝國が、此際に處する地歩の至て重く、任務の極めて大なるを知らば、誰か之を非とするものあらんや。我が帝國は、地勢よりいへば、一面には宇内無比の強國たる露國接し、又一方には、世界各強國の垂涎分攫せんとしつ、ある亞細亞の大邦たる清國と隣し、列國競争の十字街道に立つものなり。即ち露は西比利亞より滿州に出で、英は印度より緬甸を経て巴蜀に入り、佛は安南より暹羅に逼り、獨は海上より樞要の島嶼を獲んとす。是時に當り、我が日本帝國は海軍擴張の完成充實を怠ることを得るか。露は進取の力を張んが爲めに、東洋艦隊を増加し、英は富庫を護せんが爲めに、艦隊の振整を謀り、佛も獨も各々其雄志を遂げんが爲め艦隊力を東洋に増加するに當り、我が日本帝國は海軍擴張の完成充實を緩う

するを得るか。之を緩うする日は、是れ我が帝國自殺の日なり。彼の強國たる、露、英、米、佛、獨の實力なるものは何ぞや。他無し善く戦ふに足るの實力あるに外ならず。苟も善く戦ふに足らざるば、彼れ安ぞ東邦に横行濶歩することを得んや。我が日本帝國にして宇内第一流の雄國と爲り、東邦の盟主と爲らんと欲せば、善く戦ふ實力あるに非ざれば、決して第二十世紀の強國雄邦と對峙競争することを得じ、今日東邦の平和を擔保するの任務を盡すことを得じ。願ふに征清の彼は、一般の國民をして、戰鬪の實力、即ち兵備の完實を最大必要とするを感せしめたり。現に、海軍は鎮守府を横須賀、吳、佐世保、舞鶴、室蘭に置き、現時、帝國軍艦の總數は、其の製造又は艦裝中のものを合せて殆んど六十隻、其の排水量は凡そ二十六萬噸に達す、就中、敷島、朝日、初瀬、三笠の四艦は、共に排水量一萬五千噸以上、富士、八島の二艦は、一萬二千噸以上の一等戰艦にして、淺間、常磐、八雲、吾妻、出雲、磐手の諸艦これに亞ぎ、皆九千噸以上なり。水雷船艇は水雷艇驅逐艇、水雷艇の種別ありて、これまでは、水雷艇のみ、總て二十八艘、其の排水量凡そ二千噸なりしが、叢雲、東雲、雷、電、夕霧、不知火、曙、漣、陽炎、薄雲、朧等の水雷艇驅逐艇より、あらたに製造せる水雷艇を合すれば、排水量八千餘噸に達す、水雷艇にては、小鷹號最も大なり。海軍には出師、國防、作戰の計畫を司どり、并せて軍隊の教育、訓練を監督する海軍軍令部長、及び兵器を製造する海軍造船廠等あり。海軍軍人は現役、豫備、後備を合せて三萬餘あり。海軍軍人を養成する學校には、海軍大學校、海軍兵學校、海軍機關學校等ありて、其の兵備着々歩を進むると雖

ども、未だ各列國が汲汲乎として、其全力を東洋の海軍に傾け盡し、毫も遺す所なきに比せば、何んぞ之に安んじて可ならんや。故に我が國、海軍の擴張亦已むべからざるなり。

端艇競漕を觀る記

第一學年

大 草 靜 眞

人に競争心なくんば、精神をして奮發せしむること能はず。夫れ競争心の起る原は人慾にあり。三歳の兒童と雖も、傍兒の美服を見れば之れを羨み、或ひは此事人より劣りたりと云はば、必ずや又競争心發すべし。况や壯者に於てをや。生來天稟の優劣する處ありと雖も、必ず勉強の効に由て優も劣も別かるべし、故に優者は劣者に及ばざらんことを欲し、劣者は優者に及ばんことを欲す、是れ所謂、競争は勉勵の原たる所以なり。是に於てか、我萩中學校には、教員諸氏を初め盛に運動を奨勵せられ、此に校友會端艇水泳部を設けられ、九月十四日を以て端艇大競漕會を舉行せらる。此日空能く晴れ風穩なり。河は阿武川下流にして、兩橋の間を以て競争區域とせられ、上橋の下に二個の小舟を繋がる。既にして赤白の兩艇、部伍整々として競漕區域に入るや、忽ち一發の銃聲と共に、下橋の下より兩艇上流に向て進行を始め、而して其の勝敗は上流の二個の小舟を廻りて原地に還り、其速力の優劣を以て勝負を決するにあり。かくて十數回の番組も盡き勝ちて勇むもあれば負けて勵むもありて、其壯快なること言語に盡し難し。既にして、日將に西山に没せんとす、此に

於て此日の競漕は遂に終りぬ。思ふに、我校は開校後日尙ほ淺く、況して端艇競漕會の如きも此の度を以て初めとす。然るに此の如く盛大なるを見るは欣喜の至りならずや、是偏に我が校教員諸氏の熱心と、生徒諸君の勉勵とに外ならず。抑々端艇競漕たるや、一に其の技術の巧みを要するのみならず、各一心協力して、以て各一身の技を奮ふにあり。余等の如き、未だ嘗てオールを手にしたることなしと雖も、此度の競漕會は余をして以後益々此の技を修練せんとするの念を絶つこと能はざらしめたり。實に此の技は海國男子の一日も忽にすべからざる技なり。因りて燈下に對し、當日の感を記す。

亡友を追想す

第二學年 竹内宗輔

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず、玉兔匆匆流水の如く、去つて歸らず、火雲礫石の災天も今や一變して、秋風梧葉を掃ふの候とならんとす。余一夜獨机邊に在つて、往事を追想すれば、已に恍然として夢の如く、今を去る二年前の今日は如何なりしか、當時我が宿志を同じくしたる、慕はしき戀しき、學友は尙此世に在りしなり。實に光陰に關守なく、吾輩を残して、溘然此世を去りて歸らぬ旅に赴きしは、昨日今日と思ひしに早くも、二年は過ぎたり。此に於てか、感慨交胸間に逼り、往時を追想して、轉追慕の情を加ふるのみ。此年月に於て、余は果して幾何の事を成せしか、唯得たる所のものは馬蹄に過ぎず、英露は定て余の無氣力なるを恨みもし悲みもすべし、實に慚愧に堪へざる程に、無限の涙こそ流る、なれ。

嗚呼、逝くものは復歸らず、既往は咎むるも詮なし、唯望む所は將來のみ、若し、夫今日の如くにして、碌々年月を蹉跎せば、宿志何の日か達するを得んや、否達せざるのみならず、斯くの如くにして、爲すことなくば、余は確に亡友に對する、大虚言者のみ、余愚なりと雖、豈虚言者の名を甘んずるものならんや。ナポレオン曰く、不能と云ふ文字は、愚人の字書に於てのみ之を見ると、余は朝夕此の言を服膺して、必死奮勵せんのみと、筆を擱けば燈暗く、四隣人既に寝ね、唯耳にするものは飢狗軒下に泣き、時辰分秒を軌る響のみ。

評、宿志を成就して舊交に背かざらるを期す延陵解劍の意あり

正直

故第二學年 矢田茂介

我が大日本帝國は、亞細亞洲の東部に位し、位置善良、氣候溫暖、地味肥沃にして、地勢東北より西南に亘り、恰龍の天に朝するが如し。而して中國にては、溫帯生の動植物あり。琉球及び臺灣には、熱帯生の動植物あり。千島北海道には、寒帯生の動植物あり。實に世界中、國多しと雖、未曾我國の如き良國あるを聞かず。故に世人我國を稱して、一大公園なりと云へり。且我大日本帝國は、

上に萬世一系の天皇を戴き、下に忠勇義烈なる臣民あり。而して日清の戦役後、國光頓に上り、宇宙間屈指の一大強國となれり。試に活眼を開きて見よ。斯の如く名譽ある、斯の如く強盛なる、我が國の組織を。人あり、數人相集りて一家をなし、數十家相集りて村落をなし、村落相集りて郡をなし、縣をなし、以て我帝國を組織せるに非ずや。夫一國の盛衰は、國民の團結如何によるものなり。國民の團結を謀らんと欲せば、則ち一家の團結を謀らざるべからず。一家の團結を謀るには、各人皆正直ならざるべからず。正直とは如何。即信實にして、人を欺かざるを云ふ。若し人々誠實ならざる時は、小にしては一家の不和を來し、大にしては一國の平和を破るに至るべし。莫大なる資を投じて、商業をなすせんか、常に誠實を旨とし、物品を販賣せば、益々商業は盛大に赴き、一家に取りては、一家の富貴となり、一國に取りては、一國の隆盛となるべし。三井大丸の商業の有様を見よ。三井大丸の品は、正札にて大丈夫なりとて、品柄をも改めずして買ふに非ずや。是れ實に三井大丸の正直なるが故なり。我が國人にして、正直ならざらんか、遂には外國の信用を失ひ、交際途絶え、國運の衰微せんこと、數年を出でざるべし。是人々正直ならざるべからざる所以なり。幸にして我國人は、正直心に富めり。されば我が國の如き、天下無双の國土に生れたる國民は、其正直の心を以て、農業に、工業に、將た商業に、着々進歩の實を擧げ、恰旭の東天に昇るが如く、日進月歩、世界各國の文物制度を輸入し、彼の長を取りて、我が短を捕ひ、以て我國の隆盛を謀らざる可らず。

矢田生温恭の質を以て勉勵怠らず我が輩竊に望を屬する所ありしに不幸にして病の爲に夭折す惜い哉今其の遺文を讀むに暗涙の禁じ得ざるあり生を識れるもの誰か余と感を同じくせざるものあらん乃本誌の編輯者に謀り、載せて同窓追念の料となす

藤井百輔識

修學の目的 (懸賞當撰)

第二學年

大賀 幾 太

我々學生が、貴重なる光陰と、金錢とを費して、學を修むるは何の爲か。高位顯官に昇り、名聲を海内に輝さんが爲か。將臣萬の富を致して、一生を幸福に送らんが爲か。否、我々は、斯かる卑劣の精神を以て、學を修むる者には非ざるなり。然らば、如何なる精神を以て學を修むるものなるか。是他なし、先哲が發明研究せし、智識を學びて、人倫の大要を辨明し、又自然の事實に問ひ、以て人生必須の智識を開發して、之れを社會の活事實に應用して、人生の福利を増進せんがために、刻苦勉勵するのみ。然るに世人や、もすれば、世の修學者を罵りて、曰ふ、學者必ず問拔け者面と、夫如何なる原因によりて、か、る謗を受くるものなるか。蓋し天下の學生、多くは、前述の旨を失し、徒に古人の糟粕を嘗むるを以て、修學の要とし、死書に眷戀して、敢て人生の目的を思はざるが故のみ。誓へば、目的地の何所たるをも定めず、徒に金と時とを浪費して、漠然汽車に投じたるが如きものなり。誰か其愚を笑はざらんや。斯る人は退きて書冊を友とし、一生を無爲の間に送る

が故に、社會の不生産者なり、社會に一の補なき者なり、時には字引の代用をなし、時には無識者の顧問となるも、そは未以て修學の目的を達して、世を益し、社會を利したるものとは云ふべからず。吾人はかゝる人を五人得んよりは、一人の商賣人を得んことを切望するものなり。凡學問の功果は、迂を直にし、鈍を敏にし、小を大にし、挫を巧にして、人の天才を發揮せむるにあり、故に源義家は學びて、益々軍機に敏く、細川幽齋は學びて、愈々其の氣格を高めたるに非ずや。是と同じく、明治の學生は學びて益々經世の略に敏く、修めて愈々學術の蘊奥を極め、以て前者と正反對なる學者必ず利巧面てふ稱賛を得んことを務めざるべからず。

我故郷（懸賞當撰）

第二學年 工藤康生

他郷にありて、哀れ戀しきものは、我故郷なりけり。暑さ漸く去りて、蟬の聲はいつしか遠ざかり、きのふまでの炎熱は、けふは秋風と打ち變り、野邊の景色もひとかはりして、吹きすさむ風に、木の葉のむら／＼と落つるは何となく物淋しく哀なり。殊に、獨り文机に向ひ書を繙く折しも、落葉の風にさそはれて、ほと／＼と窓に音つる、時、其のあはれさ何にたとへてか云はん。日頃慕はしき我が故郷を思ひ出づる折しも、雁の一群二群雲井遙に鳴きつれて、西へ／＼と過ぎ行くを、眺むれば、もの、哀れもいやまさりて、我父母はいかにおはす、同じ思に見給ふらん。かしこの青空に

たなびく白雲は、我が故郷の空ならん。山の端出づる日影は木の間に／＼にかゝりやきて、池水に錦の波を湛ふる有様、眺も頓にかはりして、しばし心も慰められしが、日もやう／＼西へかたむくま、に、物のあやめも見えかねて、今迄吹きすさびし軒端の山の松風いつしか音やみぬ。夜更る、ま、に、月冴え渡りて、草間なく虫の聲さへ淋しく聞えて、又もや思の糸を繰出しぬ。我が故郷は幾多の山川、八十路の長程を、隔つることながら、月はけぢめなく照り渡りて、床しく眺むるものもあれば、あはれと眺むるものもあらん。彼の山の方こそ、わが懐しき故郷あるところならぬ。慕しきかな、今宵は父母は如何にしてゐます、われのかく彼方を思ふ如く、彼方にも同じ心に思ひ給ふらん。嗚呼此の月から雁さへあはれを添へて、故郷の思を増さしめ、涙は袖を濕して、筆のはこびも鈍くなりぬ、折柄聞ゆる虫の聲はいよ／＼切なく、無情の月はますます／＼清らかなり、あはれ我が故郷の父母いかに此の夜を過し給ふらん。

我故郷（懸賞當撰）

第二學年 増野純亮

故郷を愛するは、人情の至美なるものなり。獨人間のみに止まらず宇宙有情の者に通じて、易ふべからざるものなり。故郷は、吾身の生れし所、吾身の育ちし所にして、祖先の骨を埋めし所あり。慈父兄弟あり。吾が昔日の親友あり。故に、我郷里を愛せずして、又、何處をか愛すべけん。東京

は、我國の首府にして、宮城の所在地なり。諸官衙あり。高等の學校あり。又、勝景に富み、華麗の建築多くして、一時人心を樂ましむと雖も、深夜寂莫として、萬籟聲無きに當り、我家の景、朦朧として目睫の間に現然たるを覺え、慈父母、兄弟の温容髣髴として、覺えず數滴の涙に咽ぶことなきにあらず。

村北に聳ゆる鍋山、村西を流る、大井川等は、其風景、其眺望、固より嵐山、隅田川等に優るべきにもあらねども、慈母が手づから庖丁取られし、晝飯の合物は、下宿の下女の、運び來る膳と比すべくもあらず。又春に、秋に、夏に、冬に、或は小鳥を追ひ、或は釣を垂れ、歸りては、瓮菜堆き爐邊に、家族親友と共に團欒を忍ぶこと、又、寄宿舎に於ての、學友の空談と比すべくもあらず。實に他郷に在りて、吾人の胸裡を離れざるものは故郷なり。

嗟呼、堂々たる五尺の男子、痴情の結晶と云ふべきものならんや。否々、試みに思へ、奈翁の末路、蹉跎して囚虜となるに及びても、我一身は、佛國の爲に盡し、今佛國の爲に殺さる。吾死するも、佛國の益光榮あらんとを祈ると痴呼せりといふにあらずや。實に彼等は好遇せらる、が爲めに、郷里を愛するにあらず。虐待せらる、も、尙郷里を愛するにあらずや。

夫れ、一國を愛するの精神は、故郷を愛する精神より來る。故郷を思はざるの輕薄者にして、安んぞ國家を愛するを知らんや。而して故郷を愛するは、其繁榮を望み、其隆盛を冀ふものなり。然らば、如何にして是を隆盛ならしめ、如何にして是を繁榮ならしめんか。思考してこゝに至れば、徒

らに、故郷の天を望みて悵惆すべきにあらず。奮起して大に爲す所あらざるべからず。

嗚呼。故郷は吾身の生れ、吾身の育ちし所。吾等が祖先の墳墓のある所。兩親朋友のいます所。苟も名を擧げんとするもの、父母を顯はさんとする者、いかでか郷里を愛せずして可ならんや。

蒸 氣 船 (懸賞當選)

第一學年 師 井 幸 彦

船に蒸氣船あり。帆前船あり。帆前船は、風力に依て走るものなり。故に帆前船は、順風を得ざれば、恰も鳥の翼を失へるが如く、一所に碇繫して、幾日を経ると雖も、依然其所を去ること能はず。將た帆前船は航海中、或は逆風のために吹戻さる、憂あるべく、又暴風激浪のために帆檣を折られ船艀を覆没せらるると雖、往々免かる、こと能はず。而して萬里の波濤を蹴て、瞬奔快走するものは蒸氣船なり。世界の人種を搭して、東西萬邦の交を媒するものは蒸氣船なり。幾萬の貨物を載せて互市の便を助くるものは蒸氣船なり。その他、智識を世界に求むるも、貿易を盛にして國益を圖るも亦蒸氣船なり。然り而して、蒸氣船は、蒸氣の力を以て進航するものなり。されば、帆前船の順風をまちて日子を費すの損ならず。彼の五日、若くは十日の航路は、一日若くは二日を以て至るべきの益あり。斯く蒸氣力の功用大なりと雖も、元之、少力に鐵瓶の湯氣のみ、然るに斯く利用せしは、實に彼のワット氏なり。彼は日常、瑣細の事と雖も、能く注意し、勉強せざるは無きを以て、

鐵瓶の沸騰を見て、漸く此の大發明を成すことを得たり。嗚呼、和漢洋を問はず、在來瓶水の沸騰を見て知らざるもの幾萬人ぞ、而して蒸氣力を考へ斯く利用せしもの、ワット氏の外他に有らざるは何事ぞ、蓋し之、注意と勉強との足らざればなり。人たるもの日常瑣細の事と雖も、能く注意し能く勉強して、其の理を究めば、何ぞ其の發明する所ワット氏に及ばざる所あらんや何か有らん、豈勉めざるべけん哉。

如何にして父母に事ふべきか (懸賞當撰)

第一學年 福 場 温

吾等の此の世に生れ出づるや、全く父母の賜なり、若し父母なくんば、いかでか此の幸福を得べき。而して父母は、日夜千辛萬苦して養育し、稍々長するに至れば、學に就かしめ、業を習はしむ。其の目的、人たる道を行はしめんとするにあるのみ。其の恩の高き、其の惠の深きこと、筆や言葉の能く盡す所にあらず。此の窮りなき恩惠に酬いんが爲めに、力を致し心を盡す之を孝と云ふ。抑、人の行ふべき道は頗る多しといへども、親に事へて孝を盡し敬を致すより先なるはなし。凡そ人として孝敬の心あれば、家に居ては友愛を全うし、朋友に交りては禮讓を盡くし、君に事へては、忠を致すべし。若し以上の道理を辨へずして、苟も孝道に欠くる所あらば、其の他に何程の善き行ひありとも、稱するに足らじ。されば或人の行を見聞せば、其の人の孝と、不孝とを認むる難きにあ

らざるべし。古人云へることあり、孝は百行の本と。其の方法種々ありといへども、常に父母の膝下にありて、其の慈愛を蒙る間は、兎角之に狎れて、深く其の恩を感せず、或は父母の膝下をはなれ、或は父母の失せたる後に至りて、始めて其の恩惠の廣大なるを覺り、親に事ふることの、久しからんを欲することも得べからず。故に子たるものは、幼時より常に父母の我を思ふ心を以て、我が心となして、怠らず、其の心を案樂にし、其の志に違はず、其の耳目を喜ばしめ、其の起居を安んじ、其の飲食を以て之を忠養し、以て百般の人道を全うせば、到底報い盡し得べきにあらずといへども、或は其の恩の幾分を報ゆるに足るべし。又進んでは、立身出世して、國家に對するの大義務を盡し、以て父母の名を揚るに至り之實に父母に事ふるの道なり。

秋のうた十二首

特別會員 宮澤精一郎

○ あれはてし庭の小草の葉かくれに露けく咲けるなでしこの花

○ 咲けれどもあはれとおもふ人もなしあれたる庭の撫子のはな

あきの野の尾花あしげの駒とめてきくもうれしき初雁のこえ

おぼつかなゆくへはいつこかりかねの雲に消え行く夕暮の聲

紅葉狩われわけくればあさか山まだ色あさき木々もありけり

たかねのみ紅葉しにけり淺香山ふもとの方はまだあさくして

道もせにあき萩さきぬいざわけて旅のころもの袖にすらばや

さらぬだに露けきものをたびごろも重ねてぬらす秋の雨かな

ふるさとのむかしの友は秋の夜の露のうてな月やめづらむ

まはぎ原ゆふべの露のちる見ればわけぬ袂もぬれにけるかな

たび衣うきをかさねて行くそでに露おき添ふる秋のゆふぐれ

年ありしよろこひ見せて山さとも煙ゆたかにたちのぼるかな

雑 報 十四首

特別會員 藤井百輔

皇后陛下賜義足於清淨

あたながらいためる足をたてよとて物たふみこといかに聞く覽

同

わかきみの廣きめくみの天が下こゝろのまゝにいたちてゆけ

伊東中將丁提督の屍を彼の國に送返しぬとき、て

國のためつくすまことははらしと思ひやりぬる君そゆかしき

清人某將軍の仁慈を慕ふとき、て

あたをさへいたむなさけにつはもの、心かためてひける君かな

戦死の人々をいたみて

國のためなかつらしほの野をそめて大和にしきを韓にこそ織れ

時雨

我をおもふおやのゐませはふるさとの夜半の時雨よ心してふれ

同

降ると見てぬれしとかさすかさの上に月の光ももるしくれかな

関妃

その國のかけの林の名におひてあしたをつくるめごとりなりけり

寄松祝

君か手にふれし子の日のひめ小松千年のはるもかきさらさるらむ

難波なる某大人に歌のなほし與ふとてつけて送りける

なには津の春にさきたつ梅か香をたもごにふれむとぞうれしき

同

ことの葉のはなの木かけにやとうなむことしの春を樂しかり梟

爐邊閑談

埋火のあたりは春のこ・ちしてよはもしらゆきとけてかたりき

輕業師

からからぬ身をかくして一すちのつなをたのみに世を渡る哉

弓削道鏡

墨ぞめのけかれし神に天つ日のあかきひかりをいかでおほはむ

雜詠 六首

特別會員

安藤 紀 一

萩中學校の建築落成式のありしときよめる

あはれ世のいしすゑをしもつくり出てん末頼もしき今日のむろ壽

中學校職員生徒の燈の行列といふことをせしときおのれが提灯にかきつけたる

これそこの國の光をますらをの手にとりくのごもしひのかけ

春のうたの中に

遠ざかる蟹の小舟によぶ聲もかすみに消ゆるはるの海原

おほる夜の月のにほひも山のはの霞にきゆる春のあけぼの

草花露

花のうへにやとれる月の影きえてあさ風わたる露の萩原

同僚にわかつて

いつかまた同じ机のよりく今日をむつかしの物語りせん

秋雜詠 十八首

特別會員

郡司

厚

柿のみも粟も色つくをちかたにいねかりほせるふもと田の家

なにとなく秋のあはれのふしくも山田のいほに住みてこそしれ

しらぬまにいつかしくれもふる里のいと忍はる、秋はきにけり

徒然と軒端に友をしのぶ草いやしけかれとしくれふるなり

いざ今日は紅葉たつねむごことなく今望の時雨のあとめぐりして

ひとすちに時雨ふるの、あと、めて紅葉のにしき折らむとそおもふ

秋の雨よいたくなふりをさらぬだに故郷ぞ忍ぶ袖くちむとす

はたおりの鳴なるま、に秋の野は千草の花のにしきしぬらむ

こゝろせく旅路なれとも夕まくれこまどめてきく鈴虫の聲

今日もまた野に宿らばや虫の音のおかしきあたり草枕して

はふり子が舞する音にかよひけりかくらが岡のす、むしの聲

ねさめしていそつつ波を故郷の松のあらしとしばしき、けむ

おもかけの山もあらはに目いて、いざり火遠し玉の江の浦

舟うけてよしや見るとも水のおもの月なくなきたきを心してこげ

山寺の鐘さへすみて月きよくなかめさやけき玉の江の浦

舟人の棹のしづくもにはふて月のかつらのちる、夜半かな

初かりのころをほにあげて玉の江を渡る數さへ見ゆる月影

長者が館とは名のみにて 秋風さひし淺芽原

青苔墓前の萩の花 一枝はかれて一技は榮え

こある木かけに立寄れば
世のありさまを示しつ、

詩八首

特別會員 竹内菊五郎

文藝部諸子。徵余詩。乃錄近作數首塞責。只恨斯詩未加再考。倉卒應需。若其無雜鄙俚。姑不違恤也。芳宜僑居雜咏六首。

恰似江南柑橘鄉。陸離碩菓滿眸黃。車輪舶運年々利。無復農丁講種梁。
陶窯斯地產佳品。却見苦窳多雅清。傳是當年歸化裔。高麗仍稱舊鄉名。
滿浦腥風送落暍。千帆向岸盡歸漁。網耘竿耨家々給。無復海田關稅租。
海鄉芳美足魚鰕。自是遊人不憶家。晨膳夕羞堪鼓舌。十年歷著故邱瓜。
頽墻破壁認會棲。尙是雄藩舊市街。中興功臣弗拔地。衡門時見顯官牌。

誰劈黃橙金玉皮。漬成香味氣難持。京商輸給苞苴用。黨殺朱門幾萬願。

聞四月三十日開赤十字社大會于山口。小松親王親臨。恭賦此志喜。去年六月。余在清國北京。會暴匪俄起。在攻圍裡六十三日。及大軍來援。始得出圍。中間敘事實。係當時所見聞也。

今上聖明振文武。誓駕万邦表千古。

忠良臣庶奉宸慮。翼贊鴻謨答。

聖主。乃結赤社醴義金。開來絕大恤兵部。

于京于縣設本支。絲牽條提嚴紀律。

憶昨燕京騷亂起。我在重圍分必死。

輟鮒獲水喜可知。迎謝轅門只歔歔。

爭問其故重涕淚。始知攻勞倍守疲。

猛進急程爭頃刻。星行露宿怕後期。

只憂氛暑天如燬。日在長途逼渴飢。

採掇菜瓜供生食。纔忍渴飢得至茲。

朝陽一戰最劇矣。敵兵頑抗據重壘。

傷者病者紛作群。此際慘事豈忍云。

馬革裹屍所素期。未見却就豈禁怨。

誰綜社務任統率。小松親王德無匹。

平時練習救恤方。應急有備待萬壹。

一夜砲聲驅百雷。傳云天兵救急至。

尤驚天兵無容姿。面垢衣泥紛陸離。

自從受命上應救。不忍同胞敵饑罹。

爾來累月廢盥嗽。雨苦風酸甘如飴。

或怕井水敵投毒。河流渾濁傷腸脾。

既誓萬死期一忠。豈顧泥垢滿面衣。

我兵肉薄爆門扉。堅城鐵壁若破紙。

身臨生死家無信。露衾風枕空吟呻。

乍有赤社呼救至。滿軍戰士泣國恩。

今日春風九根穩。

我縣赤社舉盛典。

只怕士女尙未目死地。

護將盛事比遊戲。

四月十五日。監督考試。席上有感。

滿場乘簡射標題。

筆陣鬪爭春尙凄。

知他勁綠勝霜雪。

畢竟冶紅委土泥。

聞說親王賜親臨。

幾万士女拜袞冕。

寄語縱覽歡笑者。

深省艱難致其意。

駿鷲比肩嘗共櫜。

雞鸞分品乍殊棲。

請看今時育英法。

青雲榜路競攀躋。

雜報

○舊師を送り新師を迎ふ

集合離散は人生の常事にして、遂に免るべからざるか。茲に永く本校數學科教授の任に當られし持田先生は、本校を去て、岐阜縣師範學校へ轉任し給ひ、又英語教授永島先生は、來任以來日猶淺かりしに、一朝二豎の犯す所となりて、故郷に歸り給ひ、英語科囑托高羅先生、漢文科囑托八谷先生は、何れも在職僅かにして去り給

ひぬ。此等諸先生が生等を誘掖訓薫せられしは實に生等の忘れんと欲して能はざる所。只日夜奮發勉勵以て諸先生の鴻恩に報ゆる能はざるを畏る、のみ。然るに余等が右等の諸先生と手を別つと同時に、數多の新任諸先生の手を握るを得たるは、聊か余等の自ら慰むる所なり。即ち英語科には龜山先生、ガスタフソン先生、數學科には藤原先生、國語科には郡司先生、生理衛

生科には有福先生、相次て本校に入り給へり。余等の幸福何ぞ之れに如かむ。特にガスタフソン先生の如きは、余等の兼てより踴躍せし所、先生遠く故國を離れて此僻地に來らる余等の初めて先生に見ゆるや、「余は恰かも星の世界に來れるかの感あり」と云はれしもの、實にその真情なるべし。先生が幾多の不便を忍びつ、諄々として教へて倦まざる熱誠に對つは、余等は滿腔の感謝を表せんと欲するものなり(中島磯治)

○第一回卒業式

四月十五日午前九時、我校第一回卒業生證書授與式を舉げ、縣知事代理野田視官初め來賓六十餘名之に臨む。今其模様を記さんに、來賓は式場(倫理講堂を以て之に充つ)の右側に、本校職員は其左側に列し、卒業生は正面に座し、生徒は其後方に正列す。席定るや、校長は學式の挨拶

を爲し、恭しく聖影室を開扉す。滿場一齊に最敬禮をなし、續て君が代の唱歌を三唱す。次て校長の勅語奉讀を終るや、三十七名の卒業生は順次最嚴かに校長の手より卒業證書を受取れり。これに繼て前學年間一時間も遅刻及缺席なき生徒四名、前學年間遅刻若くは缺席三時間以内の生徒二十四名、及び前學年間引き續き伍長の任務を盡せし生徒五十四名にも、それ／＼賞状を授けらる。特に第五年生林新作氏の身軀強健、學力優等、品行方正なるの故を以て、英語字書一部を授與せられたるは、卒業生に次きて、本日最も面目を施したるものといふべし。右終るや聖影室は閉扉せられ、校長は卒業生に對して其所信と希望を述べられ、終りに今回初めて選拔せられたる七名の生徒に本學年間の特待生を命せらる。其數五學年三人、四學年に一人、

二學年に三人なりき。右終て野田視學官の告辭あり。小田教諭の前學年間生徒成績に關する報告あり。最後に卒業生總代厚東太郎氏の答辭あり。是に於て式全く終り、一同退場す。嗚呼喜ぶべきかな、余輩はこゝに三十七名の先輩を得たり。此等卒業生諸君が、五年の永き余輩に與へられたる誘導感化に對し、余輩の負ふ所實に少からず。余輩の最感謝する所なり。然とも、今後諸君が各種の方面に於ける成効は余輩を感化すること更に之より大なるものあらむ。これ余輩の祈願して措かざる所なり。卒業生諸君希くば健在なれ。(山本松四)

○我校撰手の名譽

頃は卯月の半なりけむ。山口なる高等學校學友會に第三回競技會の催ありて、縣下中學校生徒の競走こそ此日の晴業なりとて、觀者の評定と

補習科は本年花綻ぶ彌生の春と共に起りけるが爾後一人消へ、二人消へ、雲のかけ橋の如く、いとどたえがちに續きけるが、遂に七月の夕立と共に消えうせしこそはかなれ。(山本松四)

○赤十字社山口支部總會

想ふに赤十字社の事業は、友愛の人道に基ける至善至美の動きなれば、文明の諸國皆之を行へり。本縣亦見る所あり、明治廿一年十月山口に於て、初めて山口支部會を立てたり。爾來泰山は土壤を譲らず、河海は細流を擇はざる喩の如く、漸々諸種の會員増加し來り、遂に本年四月三十日第二回支部總會を開きて總裁大勳位小松宮彰仁親王殿下を迎へ奉るの盛況に達せり、實に賀すべきの至ならずや。此日縣下の諸學校は悉く臨時休業となりたれば、本校生徒中にも三四の教員に伴はれて參觀に赴きける者百數十名

りノなりしが、やかて其番となるや、各校の撰手七八名静々と場に顯る。我校より出しは高橋由之、中嶋磯治の兩氏なりしが、他はき、もらしつ。いつれ劣らぬ豪の者、いでや見ん事驅け抜きれんと身搦たる有様見る者も遽に景氣立ちたる程に、一發の砲聲と共に撰手は一齊に驅け出てぬ、或は脱兎の如く、或は疾風の如く、或は猛虎の如く、或は野猪の如く、暫しか程は何を先とも定め難かりしが、斯くてはかなはじとや思ひけむ、我高橋氏は勇氣一番真先にと飛び出すや、決勝の砲聲轟然と響き來りて、遂に勝利は我校撰手の手に歸したり。高橋氏當日の苦戦いかばかりなりけむ。今其勝敗の順序を記すれば左の如し。第一等萩中學、第二等山口中學、第三等山口中學、第四等豊浦中學。(山本松四)

○補習科の消滅

ありたり。今其一人の語る所によれば、式場は山口高等學校運動場の中央に設けられ、萬國の國旗幾百旒は春風に翩翩たり。式は午前十時より音樂隊の囀曉たる聲と共に開かれ、小松宮殿下には一段高き席に就かせられ、御機嫌いさうるはしかりき。其の下には六千人の總員満ち々々たり。勅語の奉讀君が代三唱祝辭等ありて式終り、午後二時より字白石に於て救護班演習行はる。東軍は小月方向より進んで、西軍と朝仁保村附近にて衝突し、之を湯田方向に追撃するの方略にして、實に實戦を見るが如くなりき。殊に赤十字兵の負傷者を師範學校内に設けられたる病院に送る有様は、感嘆の外なかりきとぞ。(山本松四)

○陸上運動會

春風柳葉を吹きて和氣藹然たる五月の七日とい

ふに、本校春季陸上運動會は催されたり。場は運動場の中央に設けられ、北の隅なる蔭樹の梢上には國旗高く掲げられ、夫より數條の繩を滿場に引渡し、幾百の小旗球燈を結び付けたれば、壯麗言ふべからず。正面なる來賓席には慢暮打ち繞らしなどして、種々の準備をさく／＼怠なし。此日曉頃は滿天墨を流したる如く、時に多少の降雨さへありしが、天余等の熱心にや感じけむ、八時頃より漸く暗れ渡りたれば、愈々九時といふに競技は開始せられたり。何れ劣らぬ幾十の健兒は、鈴聲を合圖に集り、銃聲を合圖に疾走り、勝者は得々として賞品を受取り。午後至りては來賓を初として、町内老幼男女の來り觀るもの堵の如く、有志者の寄附に係る煙火は、時々刻々天上に轟聲を發して一倍の勇氣を添へぬ。競技中面白かりしは、擊劍源平野試合、各

組撰手競走、小學校撰手競走、相摸等なりき。今重もなる競技に於ける勝者の姓名を紹介すべし。困に記す、小學校撰手競走に於て、尋常、高等共明倫の勝となりて、勝旗は各其校の得る所となれり。

二百メートル早駈 第一回
 大多和作 三十秒 森重 忠作 中原 庄治

第二回
 田中 昌一 二十八秒 竹重 信三 中村 治

四百メートル早駈 第一回
 兒玉 民也 一分十秒 河村 米助 杉山 菊造

第二回
 高橋 由之 一分二秒 田坂 信一 岡本 精一

二百メートル早駈 第一回
 中村 芳樹 三十秒 平川 春介 兼常 清佐

第二回

厚 東 洋 二十八秒 藤井 龜松 杉山 仁造

第三回

上田米太郎 二十八秒 寺田 林一 弘 毅太郎

四百メートル早駈 第一回

能谷 芳助 一分八秒 藤井 龜松 弘 毅太郎

藤津 亮然

特別障害物 第一回

篠原 滿 二分五秒 荒地 政作 藤井 清

六百メートル早駈 第一回

高橋 由之 一分七秒 篠原 滿 岡本 精一

小學校競走 第一回

明倫 原田 德一 三十五秒 白水 三戸 義彦 明倫 福田 敬二郎

明倫 河西 定二 一分十秒 明倫 小野 利八 白水 中村 光輔

職員競争 第一回

青木 先生 二分五秒 能勢 先生 三好 先生

選手競争 第一回

補修科 高橋 由之 二分二秒 第五學年 篠原 滿 第四學年 中島 磯治
 選手 高橋 由之 十五秒 年選手 篠原 滿 年選手

○伊東海軍大將の來校

明治廿七八年の役、我海軍司令長官として赫々たる威名を中外に輝したる、伊東海軍大將は、當度舞鶴軍港視察の途次、當地滞在中、六月廿八日校長の招待によりて、數多の參謀官を従へ我が校に臨まる。大將は毅然たる偉大夫、頭に斑白の髪を蓄へ、胸に燦爛たる勳章を懸け、一見人をしてセミストークレス、テルソンの偉業を忍ばしむるの風あり。大將全校生徒に對して躰育の必要を説き、且各自の目的とする所、文武の何たるを問はず、須らく百折不撓萬挫不屈の決心を以てこれを貫かざるべからざる旨を訓誨せられたり。(寺西啓太郎)

○竹内先生叙勳

曩きに北京に義和團の變あり、列國公使館は其重圍中に陥り、危急旦夕に迫るや、我國軍隊は列國應援軍の主力となりて終によく列國公使を救ひ出すことを得たるは世界の汎く知る處、而して當時我軍隊の司令官たりしもの實に前項記載の山口中將にあらずや。中將の功偉なりと謂つべし。然れども大厦を一柱の危に支へ、百斤を一髪の弱きに繋ぎ、彼の應援軍をして殊功を奏せしむるに至りしもの、當時の籠城義勇兵百廿八(内日本人二十四名)の働にあらずして何ぞや。兩者の効實に輕重し易からざるものあり。これ今回這般の籠城者に對して叙勳の御沙汰ありし所以なるべし。我竹内先生夙に志を立て、笈を負ひて燕京に遊ぶ、一朝此事變に際會し、忽ち筆硯を抛て鏡劍を擔ひ、硝烟に咽ひ、彈雨を冒し、幸に身を全ふして歸朝し、初めて我校

に來任せらるゝに至れり。曩日山口中將の我校を訪ふや、中將先づ先生の手を執りて、其健康を祝されたりと。實にさもあるべきなり。八月三十一日先生功を以て勳八等に叙せられ、白色桐葉章及金三百圓を授かる、豈先生一身の名譽のみならむや、實に我校全体の名譽なり。豈特筆大書せざるべけむや。

○第一回短艇競漕

金風漸く冷やかに、阿武川の水又清らかなり、豈此好時機を無視すべけんや。我校友會に於て曩に新に二隻の短艇を購入せし以來、日に數十の健兒を河上に見ざることなく、腕を鳴して競漕會の來るを待つもの少からざりしが、九月十四日に至りて遂に其第一回競漕會を催すに至れり。其日のレース、コースは、阿武川筋なる玉江橋を瓊浦橋との間と定めらる。午前十一時全

校の生徒列を整へて河岸の松原に居並び、數百の觀覽者は遠近より陸續として集れり。競漕は源平の二組に分れ、各艇首には白赤の章旗翻々と翻りていと雄々しけれど、漕手の帽子の外は思ひ／＼の服裝したるなどは少しく物足らぬ心地しぬ。さはれ外形の如何は由來我校の本色にあらず。約八百メートルの廻航距離、早きは六分内外、遅きも八分位にて漕き了りたる腕力は確かに一贊を値するものなり。勝たるもの、満面笑を帯びて上陸し、敗けたるもの、恨しげなる様して歸り來る面白さよ。一回終り、二回すみ、終に十二組の競漕をなしたりしに、赤軍八に對して、白軍は僅かに三回の勝利を得たるのみなりき。白組の船戦にかくまでの敗を取れるは長門に右の例なき事なり。面白き勝負もありし中に最後の四年生五年生の撰手競漕が如何に

滿校生徒の注目を引けるかは、玉江の山に轟き渡れる赤！白！の叫聲の著しかりしにて知るべし。廻轉點に至るまでは、五年の艇四年の艇を抜く事一艇身以上なりしに、決勝點に來れば、五年は却て非常の勝を四年に輸したるは奇といふべし。蓋し廻轉點に於ける繫船の位置亂れ居りしによるとかや。何れ眞の勝敗は後日に拜見する事として、今其撰手人名を擧ぐれば左の如し。

- | | |
|-------|-------|
| 五年(白) | 四年(赤) |
| 佐藤 虎介 | 佐伯 政一 |
| 山本 松四 | 八谷 俊一 |
| 中村喜代三 | 坂本 治郎 |
| 波多野百三 | 赤川 省吾 |
| 林 章貫 | 口羽 雅介 |
| 林 新作 | 厚東健二郎 |

杵築 市助 上田米太郎

○山口師團長の來校

九月廿三日第五師團長山口中將、并に第二十一旅團長塚本少將、第九旅團長眞鍋少將、第四十二聯隊長粟屋大佐等は非常なる歓迎を受けて濱田より當地に來られ、同二十四日午前十一時頃、在郷將校數十名を従へて來校し、中將は講堂に於て生徒一般に精神教育の必要を説かれたり。

○同窓學友の死去

國家のため悲むべきものありとせば有爲青年の夭折は、その最大なるもの、一なり。一身のため悲むべきものありとせば、同窓學友の逝去は、其最劇なるもの、一なり。余等は本學年に入りてより二人の最も惜むべき學友二人を失へり。曰く第一學年兒玉英太郎君、曰く第二學年矢田茂介君。嗚呼これ國家のため、一身のため、痛

んや、級を同うし席を共にするものに於ておや。過般四年生島田八重丸君病魔に冒されて、其郷里石州津和野に歸らざるの已むを得ざるに至るや、同級生徒大に之を憂ひて百方盡力したれども、病氣の事として詮術なく、由て見舞狀に見舞品を添へて同氏の郷里に送りたり。又五年生林新作君の脚氣に腦されて重體に陥るや、同級生は總代を發して其病狀を問ひ、同じく五年生河野通毅君の本學期の初より種々なる病氣に罹られ、遂に腦充血より心臟病に變りしと聞くや、同級生一同大に驚き、各不足勝なる小使錢を拆き、其蒐まりたる金高もて牛乳を購ひ、再び總代を撰びて病狀を問ひ、且見舞として之を贈りたりと。此等の事前項二年生の矢田氏に於けると共に、皆我同窓學生間に充實せる友情の時に應じて事實となりて顯象するものにあらずして

悲浩嘆すべきことにあらずして何ぞや。二君共に品行方正、學術優等を以て同級生中に鳴る。然れども兒玉君は、もと蒲柳の質、籍を我校に置くこと僅かに三月、六月十五日を以て没す。矢田君の如きは、身軀の強壯なること寧ろ他生に勝る程なりしにも拘はらず、一朝病を得て遂に起たず、十月五日溘然として逝きぬ。兒玉君は齡僅かに十五歳にして、矢田君は十九歳なりき。天の此少年を奪ふ、何を夫速かなるや。二君の喪に當り、校長吊詞を送り、組長及び同級生これに會せり。二君の靈亦まさに其友情の篤きに感せしなるべし。曩きに矢田君の病むや、二年生一同醵金をなし、見舞として同君に贈りたりと、同級生としてはさもあるべき事なり。

○同窓會學友の病氣と見舞

快樂を共にし困苦を分つは朋友の情義なり。況

何ぞや。

○第二回端艇競漕會

十月十八日は、恰も我が校開校の二周年紀念日に當りければ、午前は紀念式舉行せられ、午後よりぞ第二回端艇競争會は阿武河畔、綠深き中渡橋と瓊江橋との間に開かれぬ。

此の日天曇り、風さへ吹き荒みしが、百數十人の來賓は、陸續として來臨せられ、數千の群衆は、河岸せましと押寄せたり。

午後一時、號砲轟然として開會を報ず、五百の健兒は俄然色めき、第一回競漕の組々各自、その艇に上る、紅白の艇旗は相並んで北風に翻り、見物人の聲喧々聳々。

かくて十數番の後、全く閉會せしは、五時半なりしが、絶えず烟花を打ち揚げ、興をそへければ、其の盛なる前會に數倍せしは會員一同の喜

ぶ所なり(菊家孫輔)

○寄宿舎工事と假寄宿舎

十一萬七千六百餘圓の臨時費を投じて、縣下五中學生徒のために建築せられつゝ、ある寄宿舎の一たる本校寄宿の工事は、七月下旬工を起してより駸々として捗取り、今や日を追ふて落成に近きつゝ、あり。聞く所によれば寄宿舎及び其附屬造營物は悉皆本年中に成就し、來年一月より生徒の入舎を命せらるゝ由なり。然るに其準備として十月一日以來新堀好成館に假寄宿舎を設けし、一年生二年生三十名を入舎せしめたり。毎夜先生の交代當直せらるゝありて、萬事整頓に近き居る由、余輩は一日も完全なる寄宿舎の成立を熱望するものなり。(寺西啓太郎)

○假寄宿舎茶話會

凡そ校風の興る、先づ一致團結の心なかるべからず。

縣中學校寄宿舎談、又次に安藤先生は當假寄宿舎の、同先生の家庭教育に及す影響、并に當建物は、初近藤芳樹先生の起されし、抄宗寮の趾にして、殊に其當時、吉田松蔭先生の松下村塾と共に、明倫館の兩翼とも云ふべきものにて、王政維新の大事業に預りて力ありしものなれば、今假寄宿舎として、此の内に入れるものは、宜しく右兩塾生の、明倫館に感化を及せしが如く、奮勵して全校生徒の、標準たらざるべからずとの意を演説せられたり。其後は別に定りし、話とてもなく各自得意の、腕押、脛押等をなし、九時半とも覺ゆる頃、閉會を告げて解散せるは近來の快事なりき。(増野純一)

○文藝部懸賞文

去八月夏期休業中研學の資ともなるべき目的を以て、本部は左の諸項を掲げて、懸賞文を募れ

らす。人々箇々己の欲する所に從ひ、毫も他を顧ることなからむか、校風何によりて起ることを得む。一致團結の心を養ふは親情友義に基かざるを得ず。而して藹然たる親情を勃興せしめ、純乎たる友義を發揮せしむるは茶話會よりよきはなし。然るに我校未だ嘗て此種の會合あるを聞かず。これ余輩の尤遺憾とする所なり。我假寄宿舎生一同大に茲に感ずる所あり、乃ち去十月二十六日土曜日を卜して率先之を實行するに至れり。此日午後五時半頃より諸先の臨席を乞ひ、同六時半先生及び舎生相共に自修室に圍坐す。増野純一君開會の辭を述べ、次て菓子芋を喫しつ、諸先生の談話を聞く。兩谷校長は高等學校寄宿舎生活中の、弊害及其得點に付きて談られ、次に小田先生の第一高等學校寄宿舎在舎中に於る、同窓學友の有様次に宮澤先生の群馬

第五學年

- (一) 制裁論
- (二) 舊師を懷ふ

第四學年

- (一) 家庭改良論
- (二) 理科大學に入らんとする友を送る

第三學年

- (一) 學生の有すべき特色
- (二) 日本刀

第二學年

- (一) 修學の目的
- (二) 我が故郷

第一學年

- (一) 如何にして父母に事ふべきか
- (二) 蒸氣船

全校部員中、募に應じて文章を提出せし者、僅に廿七人なりしと、文章の品質何れも餘り好良ならざりしとは、大に本部の失望せし所なれども、兎に角、當初の約束に従うて、悉く當撰文

を掲載せり。今當撰せられたる諸氏を左に列記すべし。

第二等賞(英和双解熟語大字集一冊)四ノ一

紀藤 庄助君

第三等賞(英和熟語故事字書一冊)二ノ一

大賀 幾太君

全 上(日本立志編一冊)二ノ二

工藤 康生君

全 上(全上)二ノ三

増野 純亮君

全 上(珍袖英和字書一冊)一ノ一

師井 幸彦君

全 上(全上)一ノ二

福場 温君

尚ほ賞品授與式の時には宮澤、竹内雨先生の作文に關する有益なる講話ありたり。

因に記す、本誌所載の懸賞當撰文は、何れも先生の添削を加へたるものに非ず

盛ならんことを希望するものなり。されど一時に起り立つものは、其熱も亦冷め易きは流行の常なれば、よくく其邊に注意し、此美風をして一時の流行たらしめず、我同窓學生間の親睦を謀り、團結を促すの機會として、益々有効に利用せられんことを望まざるを得ず。其期日の如きも、一日數會競争的に催すの觀ある如きは如何のものにや、讀者の一考を煩はしたきものなり。

因に曰く、前述諸種の會合に關する記事の投書も多かりしが、一々録載せんも頁を費すこと多き割合に、讀む人の興味却て淺ければ、一括して其模様を記し、合せて記者の管見をも交へたり。(小田省吾)

○柔道擊劍部の現況附たり

同部有志者の壯舉

先般校長の熱心なる斡旋の結果として、柔道擊

○各組の茶話及遠足會

近頃我校に一種の流行起れり。各組茶話會及び遠足會これなり。此流行の蒐をなし、は、二年一組生の美爾郡景清穴探嶮(十月廿六日)と、二年三組生の佐々波遠足(二十七日)とにして、夫よりは各組共われ劣らじと競ひ出でしもの、如く、十一月二日の如きは、五年は塚本教授宅に、四年は指月公園に、三年一組は學校内道場に陣取り、諸方より招かれたる先生方は、三々五々群をなして、此等の會に廻臨し給ひ、三年一組の如きは晝より夜に至るまで趣好を凝して其會を續けたり。翌日天長節には、三の一は奈古の古蹟を探り、二の三は山田村の大瀧を見んとて、式終るや否、結束して出發せり。這般の流行、余輩必しもこれを非難するものに非ず。其有益にして趣味多き、寧ろ一種の美風として益々其

劍部費用の一部は校費を以て辨じ得る事となり新に稽古着及び擊劍道具も購入せられたれば、該部の盛大、隆々として朝暉を見る如きものあらんと思ひしに、此處にも秋の見舞ひしと見え、廣き道場の片隅に、一組二組柔道の稽古なす様は、椎の枯葉の庭面に吹き廻はるかと思はれ、絶えく々に聞ゆる竹刀の響は、橙の未葉を拂ふ風音にも及ばず、該部勝負の如きも、本學年に入りて僅に一回ありしのみ。我校友氣振作の重任を其雙肩に擔へる該部の現況斯の如くなるの際、一方に於て、學生として尤も恥づべき所業によりて、所罰若くは諭旨退學に遭ひしもの實に少からず。嗚呼これ果して慶すべきの現象なるか。昔は天下太平に醉ふの時に當り、羽賀臺の演武に天下の耳目を驚せし忠正公の偉圖も、明治の青年には全く忘却せられ、赤間關の砲

擊に醜虜の膽を寒からしめたる奇兵隊の意氣、今や尋ぬるに由なし。苟も志あるの士、仔細に萩地方青年の氣風を觀察し來らば、長州人將來の運命につきて、轉々憂慮に堪へざるものあらむ。是時に當りて、一の快心事こそ起りたれ。これを柔道擊劔部有志者の武者修行的遠足となす。小田、青木兩先生の夙に該部の爲に盡碎せらるることは皆人の知る處、特に近來我校士氣の振はざるを慨嘆せられ、先般山口高等學校柔道教師轟祥太氏の來萩を機として、同氏に談する處あり、又校長にも説く處ありて、該部の熱心家二十三名を募り、親ら之を率ゐて山口に向て二泊遠足を企つるに至れり。蓋し其目的とする處、武を同好の士と戦はし、好を彼等の間に結び、以て斯道の隆盛を謀らんとするにあり。今左に山口に於ける一行の模様を記して、我同

窓諸君に報すべし。一行は十一月廿二日午後〇時廿分を以て校門を發し、午後八時四十分山口中學校寄宿舎に着す。山口中學に於ける同部の生徒は一行を出迎へ、舎監は一行に向て種々なる便宜を與へられ、一行これによりて廿三日廿四日兩日共、同寄宿舎に宿泊することを得たるは意外の幸福なりき。然れども廿三日は當時恰も興行中なりし相摸見物の爲に費されたるを、廿四日正午よりは歸途に就かざるを得ざるを以て、武術の稽古は僅に廿四日午前のみに限らるゝに至りしは聊か遺憾なきにあらず。同日に至り、午前八時より十時まで二時間、雙方の健兒入交りて柔道及び擊劔の稽古をなし、が、夫より山口、萩相分れて紅白勝負を行ふ事となれり。其番組及び勝負の結果は實に左表の如くなりき。

第一、擊劔紅白勝負(○は勝×は負)

紅組(萩)	白組(山口)
×○○○○末永(三年)	○藤松(五年)
×○赤川(四年)	×三村(五年)
×横見(二年)	×野村(五年)
×○○島尾(四年)	×守田(五年)
×山根(三年)	×吉富(四年)
×○○中村(五年)	×○志田(三年)
×○山本(五年)	×○○小野(三年)
×○○大草(一年)	×大岡(三年)
×○茶川(五年)	×○田中(四年)
×村田(二年)	×○佐伯(二年)
×大賀(二年)	×新村(五年)
×佐々木(二年)	×○山根(五年)
×○林(二年)	×○○脇本(五年)
×山縣(三年)	×○景山(四年)

第二、柔道紅白勝負

紅組(萩)	白組(山口)
引分會野(三年)	志滿(四年)
×松尾(二年)	西嶋(四年)
×○山縣(三年)	吉松(五年)
×上田(四年)	藤井(五年)
×中村(五年)	引分○○井上(三年)
×吉田(三年)	×○○陶山(五年)
引分○藤津(三年)	引分河内(四年)
×佐々木(二年)	×○金只(三年)

右の如く、兩方共終に我軍の失敗となりしは返すくも残念の次第なりといへども、彼我年級對比の上より見れば、寧ろ當然の結果なるべし。兎に角、此回の行、固より山口中學と勝負を決するを以て唯一の目的とせしにあらざるを以て此等の稽古及び試合によりて技術上少からざる

利益を得たると、彼を知り我を知り、以て益々奮勵するの資を得たるを得て満足して可なり。余輩は今茲に勝負につきて論せざるべし、只這般の壯舉の屢々行はる、ありて、彼我の實力如何を悟るに至らば、旺盛純潔なる競争心は自ら其間に發揮せらる、を得、以て大に斯道の興起を促すに足るべきを信するが故に、滿腔の熱心を以て、今回の壯舉を稱揚せんと欲するなり。況んや、近時稍もすれば意氣消沈の淵に陥らむとする此地方の青年に向て、一の有効なる興奮劑たるに於ておや。

○英語談話會員諸君に望む

前學年高野先生初め英語科諸教諭の斡旋によりて成立せし英語談話會は、極めて有益なるものにして、其好發育を遂げんこと、兼て前號の本誌に希冀し置きたりしが、不幸にも高野教諭の

なかるべし。余輩被教育者たるもの、間接に彼會に負ふ所多きを以て、此報導を聞くに及びて、歡喜措く能はざるものあり。由て其委員の姓名と會則とを掲げて、讀者に告ぐと爾云。

父兄保證人會委員

- 萩町 石光松之助君
- 萩中學 小田 省吾君
- 同上 龜山 昇君
- 萩町 兼常 吉勝君
- 同上 中村 二郎君
- 同上 熊谷 萬吉君
- 小畑村 厚東 頼三君
- 萩中學 宮澤精一郎君
- 玉江村 三戸 四郎君
- 西分村 平野好五郎君

父兄保證人談話會規則

轉任と共に頓挫し、今に何等の消息を傳ふる所なきは、余輩の甚遺憾とする所なり。今やガヌタンフソン先生來られ、龜山先生來らる、本會再興の時機今を措て他にこれあらざるべし、本會々員諸君の奮發を望むや切なり。

○父兄保證人談話會

學校教員と父兄保證人との益々視密になり行くは、吾等被教育者の最幸福とする所なり。聞く所によれば、同會は先般の會合に於て左記十名の委員を撰定し、規則を設け、彌々改善の策を講すべき筈なりと。今や天下中學校の數、實にの多きに達したりといへども、多くは生徒の家庭と學校との間に何等の連鎖なきを以て學校に於て施す所の德育の效果に至りては、誠に遺憾の點少からずといふ。兩者の關係の親密なる我が校の如きは、天下有數の例と謂ふも不可

第一條 本會の目的は學校と家庭との聯絡を

圖らんとするに在り

第二條 本會は一年三回(五月十月一月)是を

校内に開く

第三條 本會一切の事務を處理せんが爲めに

委員十名を置き三名は學校職員中より七名

は父兄保證人より是を推選し其年限を一ヶ

年とす

第四條 本會の經費は校友會費を以て之を辨

す

第五條 本會に於てなすべき事項左の如し

一、學校よりの報告

二、父兄よりの報告

三、教育に關する談話、演説

○文藝部委員の辭職

及補缺撰舉

本部委員補修科山本政人君は退學し、五年森信丸君は事故により辭任せられたるを以て、補缺撰擧を行ひ、五年永田民也、山本松四の兩君當撰したるを以て、左の通會誌編輯事業の分擔を定む、

論說欄	五	永田 民也
雜纂欄	五	石津 御楯
三の一		落合 兼文
二の三		増野 純亮
五		山本 松四
雜報欄	五	寺西啓太郎
三の二		大谷 清記
二の二		中村文治郎
四の一		石村勘決郎
詞藻欄		堀 俊雄
一の三		佐野 松一
一の一		

本會錄	五	菊屋 孫輔
四の二		中嶋 磯治
二の一		大賀 幾太

會 告

校友會々計報告は本誌に掲載すべき筈の處、會計主任書記の交迭ありて多忙を極めたるにつき其運に至らず。由て次號に譲ること、なせり。

附 錄

山口縣立萩中學校現任職員表

受持學科及掛	卒業學校學位稱號及教員免許學科	就職年月日	職名	氏名	府縣籍
修身地理英語	文科大學卒業	明治二十二年九月十八日	校長	雨谷 羔太郎	茨城縣士族
數學理科	理科大學卒業	明治三十三年四月二十一日	教諭	塚本 又三郎	大阪府平民
英語	文科大學卒業	明治三十三年四月二十一日	全	小田 省吾	三重縣平民
博物史	高等師範學校卒業 教育動物植物礦物生理地文	明治三十三年四月二十一日	全	能勢 賴俊	山梨縣士族
國語	東京國學院卒業	明治三十三年五月三十一日	全	宮澤 精一郎	群馬縣平民
數學	國語	明治三十四年五月三日	全	藤原 甚吉	山口縣平民
漢文	漢文	明治三十四年一月十七日	全	竹內 菊五郎	愛媛縣平民
國語	漢文	明治三十三年四月四日	全	藤井 百輔	山口縣士族
習字	山口縣師範學校卒業 國語漢文	明治三十二年九月一日	全	安藤 紀一	山口縣士族

附錄

校友會雜誌

第貳號

習字	東京美術學校卒業	明治三十四年一月十七日	全	濱中半三郎	東京府平民
體操	陸軍歩兵曹長	明治三十三年九月十一日	助教諭	門司 嘉	福岡縣平民
體操	陸軍教導團卒業 陸軍歩兵軍曹兵式體操	明治三十二年九月一日	全	三好 雅美	山口縣族
英語	京都同志社卒業	明治三十四年九月廿七日	教諭心得	龜山 昇	熊本縣族
英語	私立東京專門學校專修英語科卒業	明治三十二年九月一日	全	頓野 多介	山口縣族
數學	參謀本部陸地測量修技所卒業	明治三十二年九月一日	全	山本 忠助	全
國語	私立東京國學院卒業	明治三十四年八月十五日	全	郡司 厚	茨城縣民
地理	茨城縣中學校卒業 東京私立正則英學校卒業	明治三十三年九月廿七日 明治三十三年七月十四日	助教諭	青木恭太郎	福岡縣族
英語	カリフォルニア大學卒業 バツチユラー、ラブ、アーツ	明治三十四年五月廿六日	教諭	中村秀次郎	茨城縣族
體操	陸軍教導團卒業 陸軍歩兵特務曹長	明治三十四年二月十二日	同	溝部 壯六	山口縣族

生理	第五高等學校醫學部卒業	明治三十四年九月十三日	同	有福直三郎	山口縣族
英語	私立東京專門學校英文學科卒業	明治三十四年二月十二日	書記兼教諭心得	坂田 庫吉	新潟縣族
會計主任		明治三十四年十月廿四日	書記	伊藤 義光	山口縣族
庶務主任		明治三十二年九月一日	同	波多 政義	同
庶務	第五高等學校醫學部卒業	明治三十二年九月一日	事務雇	福原 貞彦	同
休職	私立東北學院卒業	明治三十四年四月廿五日	教諭	永島 藤三	北海道平民

備考 本表は明治三十四年十一月二十日現在を以て取調たるものなり

生徒郷貫別表

學年	阿武郡	大津郡	美濃郡	稱厚郡	狹野郡	豐浦郡	吉敷郡	佐波郡	濃熊郡	毛玖郡	島根縣	福岡縣	愛媛縣	廣島府	大坂府	計	
第一學年	一〇	一二	四	一	二	一	二	三	一	二	一	二	一	二	一	二	三

第二學年	八九一九	五	二		一	一	二	八	一	一						一一四
第三學年	六〇一二	四	二		一		二		二		一					八三
第四學年	五四六	五	三		一		一		二	一						七三
第五學年	四五六	一														五五
計	三四九六七	一五	六	四	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一		二四六一

備考 本表は明治三十四年九月一日現在を以て取調たるものなり

生徒入學前の成業別表

學年	卒業	尋常小學校	高等小學校	同第二學年	同第三學年	同卒業	計
第一學年	一	〇	〇	〇	五九	六一	一三六
第二學年	〇	〇	〇	六三	三一	二〇	一四
第三學年	〇	〇	〇	二六	二九	二六	八三
第四學年	〇	〇	〇	三一	二三	一九	七三
第五學年	一	〇	〇	二四	一五	八七	四六一
計							

備考 本表は明治三十四年九月一日現在を以て取調たるものなり

生徒年齢表

學年	最長年齢	最少年齡
第一學年	十七年八月	十二年五月
第二學年	十七年十月	十三年七月
第三學年	十八年十一月	滿十四年
第四學年	二十五年七月	十五年一月
第五學年	二十三年七月	十五年九月

備考 本表は明治三十四年九月一日現在を以て取調たるものなり

生徒假定目的分類統計表 明治卅四年十一月廿日調

假定目的	五學年	四學年	三學年	二學年	一學年	合計
海軍	一九	一九	一八	一七	三五	九九
高等學校		三三	二六	二九	二五	一三一
計	一〇	五二	四四	四六	六〇	二一八

陸軍	商業	商船學校	商業學校	工業學校	美術學校	農業學校	國學院	高等師範學校	醫學	實業	僧侶	教育家	外國語學校	附錄 校友會雜誌 第貳號 六
一三	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	八
一〇	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
一〇	四	四	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
一三	二〇	二〇	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三五	三〇	三〇	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
八一	三九	三九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

未計	五〇	七五	八〇	一〇五	一三三	四四二
定	一	一	四	四	一	一〇

通學生徒の宿處別統計表

學年	自宅	親族宅	保證人宅	下宿	計
第五學年	三六	五	四	五	五〇
第四學年	四九	一一	七	八	七五
第三學年	三九	一七	七	一七	八〇
第二學年	六一	二三	九	二二	一〇五
第一學年	七一	二七	六	二八	一三二
計	二五六	八三	三三	七〇	四四二

備考 本表は明治三十四年十一月廿日現在を以て取調たるものなり
附錄 校友會雜誌 第貳號 七

本校特待生表

本籍地	入學前の資格	假定目的	生年月	學年及組	姓名
阿武郡萩町	阿武郡萩町明倫高等小學校卒業	高等學校	明治十七年十月	第二學年第一組	大賀 幾太
阿武郡須佐村	阿武郡須佐村育英高等小學校卒業	高等學校	明治十七年十月	第二學年第二組	大谷 清記
阿武郡紫福村	阿武郡紫福村柴福高等小學校卒業	高等學校	明治十九年一月	第二學年第三組	増野 純亮
阿武郡田萬崎村	阿武郡田萬崎村多磨高等小學校卒業	高等學校	明治十六年八月	第四學年第一組	中村文治郎
阿武郡萩町	阿武郡萩町明倫高等小學校第二學年修了	海軍兵學校	明治十七年五月	第五學年	林 新作
阿武郡萩町	阿武郡萩町明倫高等小學校第二學年修了	高等學校	明治十七年十一月	同	永田 民也
豐浦郡田耕村	豐浦郡東村豐東高等小學校第二學年修了	商船學校	明治十五年九月	同	和田 準介

本年三月本校を卒業せしものにして
 高等學校に入學を許されたるもの

入學學校名等	姓 名
外國語學校	山 田 藤 介
商船學校	横 田 直 藏
山口高等學校	香 原 祐 江
海軍兵學校	三 戸 基 介
海軍兵學校	阿 武 信 一
陸軍士官候補生	高 橋 由 之
海軍兵學校	山 本 吉 德
商船學校	勝 野 清
陸軍士官候補生	光 藤 健 介
郵便電信學校	伊 藤 治 郎

本校生徒にして本年陸軍地方幼年學校へ
 入學を許されたるもの

本籍地	生年月	學年	姓名
阿武郡 萩町	明治十九年十一月	第二學年	內山修一郎
大津郡 三隅村	明治二十年一月	同	詠村十造

武學貸費生表

(三度以上引續き貸費生に採用せられたるものは○印を附す)

學年	採用月	姓名
第四學年	明治三十二年九月採用の武學貸費生	○梨羽次郎熊
第五學年	明治三十三年三月採用の武學貸費生	○宮川 鐵藏 ○兒玉 良三 ○岡部 孝介
第五學年	明治三十三年九月採用の武學貸費生	○宮川 鐵藏 ○桐山 敏輔 ○香原 祐江
補習科	明治三十四年三月採用の武學貸費生	○梨羽次郎熊
第五學年	明治三十四年九月採用の武學貸費生	○阿武 信一 ○林 新作 ○山本 松四 ○中村喜代藏
第五學年	明治三十四年九月採用の武學貸費生	○河野 安宅 ○山本 松四 ○佐藤 虎介 ○木村 彌三 ○三宅彌太彦

學年	採用月	姓名
第三學年	明治三十三年三月採用の武學貸費生	○高橋 由之 ○三宅彌太彦 ○阿武 信一 ○田中 三造 ○佐藤 虎介 ○中村 章一 ○山本 豐 ○桐山 敏輔 ○林 新作 ○前原 清 ○山本 松四 ○田坂 信一 ○横見菊三郎 ○岡 龜熊
第四學年	明治三十三年三月採用の武學貸費生	○木村 彌三 ○岡本 精一 ○阿武 信一 ○田中 三造 ○佐藤 虎介 ○中村 章一 ○藤井 清 ○桐山 敏輔 ○三浦 德一 ○三浦 基介 ○山本 松四 ○田坂 信一 ○三宅彌太彦 ○林 新作
第四學年	明治三十三年九月採用の武學貸費生	○高橋 由之 ○阿武 信一 ○田中 三造 ○佐藤 虎介 ○中村 章一 ○三浦 德一 ○山本 豐 ○林 新作 ○前原 清 ○山本 松四 ○田坂 信一 ○三宅彌太彦 ○中村喜代藏 ○原川 國介
第四學年	明治三十四年三月採用の武學貸費生	○三宅彌太彦 ○自上貫之助 ○河野 安宅 ○佐古 良一 ○中島 磯治 ○兒玉 省三 ○吉田 光胤 ○新庄 順一 ○波多野晋平 ○三浦 國藏
第四學年	明治三十四年九月採用の武學貸費生	○自上貫之助 ○青水 英一 ○中村喜代藏 ○山根 孝一 ○兒玉 良三 ○佐古 良一 ○吉田 光胤 ○三浦 國藏 ○波多野晋平 ○新庄 順一 ○永富儀三郎 ○中島 磯治 ○田坂 信一

附錄 校友會雜誌 第貳號

附錄

校友會雜誌

第貳號

一三

片山 熊雄
佐伯 政一
深井 清
波根 良弼
青水 英一

原川 國介
前原 清
岡 龜熊
波根 良弼
青水 英一
片山 熊雄
山根 孝一
境 半三

河野 安宅
白上貫之助
青水 英一
山根 孝一

明治三十五年一月十二日印刷
明治三十五年一月廿五日發行

山口縣長門國阿武郡萩町第千五百二拾
八番屋敷居住士族

發行兼編輯者

波 多 政 義

發行所

山口縣萩中學校校友會

印刷者

東京市京橋區日吉町十番地
田 波 省 三

印刷所

東京市京橋區日吉町十番地
近藤商店活版部



校友會雜誌

第參號

明治三十七年七月發行

山口縣立萩中學校校友會